

天保仇討無惨旅 （第3部）

幼妻

「イヤー！放して！」

「こら！・・静かにせんかいな。志乃様や慎之介様が目醒ましてしまうやろ・・」

惣右衛門が千鶴を黙らせようと口の中に手拭いを押し込みながら小さな声で命じた。

深夜の牢の中でくぐもった千鶴の悲鳴と男達の荒い息と藻掻き合う音が響いた。

新たな珍芸の修行を早朝から深更まで受け続け、疲れ切って泥の様な深い眠りに落ちていた志乃と慎之介であったが、千鶴を閉じ込めた檻から聞こえるただならぬ気配に目を醒ました。高窓を通して月の光がほのかに差すだけの暗闇の中、惣右衛門が悲鳴を封じる様に千鶴の口に手拭いを押し付け、篤馬が暴れないよう身体を押さえ付け、玄斎が麻縄を扱いて縛り上げようとしていた。

三人の悪鬼がとうとう千鶴に食指を伸ばしたことを理解した志乃が、「お約束で御座います！千鶴には指一本触れぬというお約束では御座いませんか！女子の身体を抱きたいのであれば志乃が喜んで身体を差上げます！どうか千鶴だけはお許してください！」と、牢格子を握り締め泣き叫ぶように男達に哀願した。

慎之介も実の妹の様な目で見っていた千鶴の危機におろおろとして牢格子を握り締めていた。姉弟の悲鳴のような抗議と哀願の声も耳に入らない様に三人は千鶴を無理やり後手に縛り上げると、バタバタと必死に暴れる千鶴を牢から引きずり出し、姉弟の収容された檻の前を無言で通り過ぎ、階下へ向かった。

泣き叫び身悶えしていた千鶴もとうとう来るべき時が来たと観念したのか、男達に取り囲まれて悲惨な用意が整えられた階下に降りて行った。

勇敢で気丈な娘であったが、これから身に降り掛るであろう恐怖に貌は青ざめ脚はガタガタと震え、両側から男達の支えられていないとそのまま崩れそうになる身体を引きずられて行く千鶴の後姿を悲痛な声音を発しながら見送るしか無かった。

「千鶴はワテ所の使用人ダスさかい、ワテが最初のモノを頂きませ・・」

階下から惣右衛門の淫欲にくぐもった声が聞こえて来た。

「うむ・・・よかろう・・・」

惣右衛門の言葉に玄斎が同意する声が聞こえて来た。

「さあ！今からワテが女にしてやるさかい、大人しゅうするんや！」

獣欲に息を荒げた惣右衛門の声が聞こえて来た。

イヤー！イヤー！と泣き叫ぶ声とバタバタと手足を打ち付ける音が階下からこだました。

暴れる少女を男達が左右から押さえ付ける様子が伝わって来た。

気丈な娘と思ってはいたが、いざその瞬間を迎え恐怖に打ちひしがれている様子が分かった。

「お止めください！お約束で御座います！代わりに志乃を存分にお責め下さい！どうか千鶴をお許し下さい！」

階下から聞こえて来る千鶴の悲鳴や男達の荒い息や物音に堪りかねたように泣き叫んだ。

志乃の悲痛な叫び声は階下に聞こえている筈であったが、男達は千鶴を攻めることに夢中で何の反応も無かった。

ひいー・・・という押し殺した悲鳴に続いて千鶴の咽び泣く声が聞こえて来た。

とうとう、千鶴が惣右衛門により破瓜させられたことが判り、今までの自分の努力が全て無駄に終わったことを思い知らされて床に頭を打ち付けて泣き叫んだ。

「どや？ええやろ？ええやろ？」

新鉢を割られグッタリと抵抗を止めた女体に、荒い息を吐きながら、まるで杭を打ち込むように腰を前後させる様子が階下からの気配で想像された。

惣右衛門はその後も長い間幼い身体を蹂躪し続けた後、喚く様な声を発して動きを止めた。

己の体内に残忍な男の精を注ぎ込まれたことを知った千鶴が悲痛な鳴き声を上げた。

惣右衛門は暫くの間、自分が引き裂いた女陰の感触に浸っていたようであるが、満足気な溜息を吐くと体を離れた様であった。

男達は傷ついた少女を労わる優しさなど露ほども無く、惣右衛門が離れた身体の上に次は玄斎が被さっていった。ギシギシと床の軋む音と玄斎の巨根の前に喘ぐ声が聞こえて来た。

姉弟は両手で耳を塞ぎ、咽び泣いた。

精力絶倫の玄斎が果てると次に篤馬が求めた。

残酷な男達は一刻以上に渡って幼い身体を蹂躪し尽くした。

男達から散々突き立てられ、涙も涸れ果ててすっかり憔悴し、自力では歩くことも立つことも出来ない千鶴が男達に引きずられて二階に上がって来た。

その千鶴の変わり果てた姿に志乃の怒りが込み上げて来た。

「余りに惨い仕打ちではありませぬか！志乃とお約束したではありませんか？千鶴には指一本触れぬと！」

ぐったりとした千鶴を抱きかかえる惣右衛門を睨みつけながら叫び声を上げた。

「ワテは別に志乃様とのお約束を破ってませんでえ・・・」

牢の中から憤怒に燃える視線を送る志乃を見詰め返してシレッと声を発した。

「ワテの店で働く女子は、余程の醜女^{おなご}か年寄りでも無い限り、皆ワテの手が付いてまんのや。そやから、千鶴も遅かれ早かれワテに抱かれることになってましたんや。ワテらは志乃様とのお約束を守って今日まで我慢してきたんだす。」

「お銀がの・・・千鶴にも珍芸の指導をしたいと言い出したんじゃ・・・千鶴位の年でないと芸を覚えるには遅すぎると申しての・・・いくらお銀でも手入らず生娘に珍芸を仕込むのは無理じゃからの！」

玄斎が可笑しそうに身体をゆすって笑った。

「ほれ！今日はお前の慕っておった慎之介の檻に入れてやろう！慎之介に甘えて慰めて貰え！」

慎之介の牢の扉を開くと抵抗する気力も無い千鶴を無理やり中に押し込んだ。

自分が慎之介と同じ牢に閉じ込められたことを理解した千鶴は隅に身を寄せ、両手で幼い身体を隠す様にして、背を丸めてしゃがみ込んだ。

牢の施錠を終えると、千鶴の身体の余韻を楽しむように悪鬼達は笑いながら去って行った。

牢の隅で身体を縮めて泣きじゃくる千鶴と離れた場所からどうしたら良いか分からずオロオロする慎之介の姿を目にした志乃は、牢格子を握り締め励ますように声を掛けた。

「慎之介！千鶴は身も心も傷ついています！その傷を治せるのは其方^{そなた}だけです！」

志乃も勿論千鶴が慎之介に対してほのかな恋心を抱いている事は気付いていた。

今心身ともに深く傷付いた千鶴を癒せるのは慎之介の愛しかないと思った。

志乃の必死の叫び声に促されて、慎之介は千鶴の傍ににじり寄った。

恐る恐る伸ばした慎之介の指先が千鶴の身体に触れた途端、惣右衛門達から受けた強姦の記憶が蘇ったのか、引き攣った悲鳴を上げて手足をバタバタさせて手を振りはらった。

男の暴力の前に肉体を蹂躪される恐怖に泣き叫び暴れる千鶴の裸身に慎之介はそっと布団を掛けてあげた。

ふっと千鶴の藻掻きが止んだ。

慎之介は布団の上から千鶴の小さな身体をそっと抱きしめた。

薄い掛け布団を通して小さく震える幼い体と咽び泣きが伝わって来た。

慎之介の心に千鶴に対する恋しさが込み上げて来て、千鶴を抱きしめる力が強くなって来た。

小鳥の囀る声が外から聞こえ、高窓から差し込む朝日が牢舎内を明るく照らした。

慎之介は薄い^{まどろみ}微睡の中ですっかり夜が明けたことに気付いた。

隣では慎之介の腕を枕にして千鶴がスヤスヤと眠っていた。

この幼い娘と一つ布団にくるまり、ぐっすりと眠った慎之介は近頃感じたことの無い至福感に浸っていた。

直ぐ横で幸せそうな寝顔を浮かべて眠る千鶴の顔を繁々と見詰めた。

慎之介の視線に気づいたのか、突然声を上げて跳ね起き、布団から飛び出すと、横たわる慎之介に向かって「申し訳ありませんでした！」と叫ぶように口にして、土下座した。

知らぬ内に慎之介と同衾し眠りに落ちてしまった事を謝っているようであった。

「千鶴は嬉しゅうございます・・・このように下賤の身に在りながら慎之介様のお情けを頂き・・・」

床に頭を擦り付けながら叫ぶように口にした。

「・・・そして、千鶴は悲しゅうございます。清い身体を慎之介様に差上げられなかったことに・・・」

この一夜の激しい運命の変遷に翻弄された少女が土下座したまま、体を震わせて泣きじゃくっていた。

恋しく想っていた慎之介に抱かれる前に悪鬼達の毒牙の餌食となったことが悔しくてならなかったのだ。

「もう良いのじゃ・・・千鶴・・・」

床に這いつくばる千鶴の裸身を優しく抱え上げ、嗚咽する幼い身体を抱きしめた。

千鶴を固く抱きしめながらその可憐な唇を求めた。

千鶴も慎之介の求めに応じて唇を差し出した。

慎之介の唇と重ねながら頬に一筋の涙が零れ落ちた。

「ほほほ・・・昨夜は慎之介に可愛がってもらったのかい？」

お銀が男達を引き連れて、陰険な笑顔を浮かべて二人を閉じ込めた檻の前に立っていた。

「慎之介もこの所すっかり従順になって来て、珍芸の修行に励むようになって、随分と上達したもんだけど、今日からまた新しい技の修行に入るよ・・・」

篤馬に命じて慎之介を檻から出しながら、「淋しいだろうけど、夜になったら又返して上げるからね・・・それまで辛抱するんだよ・・・そこから亭主が珍芸を覚える様子を眺めていれば良いよ・・・」

心配そうに眼を向ける千鶴の様子を眺めながら笑って言った。

それから連日慎之介と志乃の新しい淫靡な技の修練は続いたが、何故かお銀は千鶴には手を触れようとしなかった。

心身ともに打ちのめされた慎之介にとって千鶴と伴に一つ布団にくるまって夜を過ごすのが唯一の癒しとなっていた。

「アッ・・・」慎之介に身体を預ける千鶴が小さく声を上げた。

慎之介の男のモノが力を失って女洞の中で萎えて行くを感じた。

「すまぬ・・・千鶴、昼間の修行で少し疲れておるのじゃ・・・」

幼妻の身体を抱きしめながら慎之介がすまなそうに声を発した。

「いいえ・・・千鶴こそお疲れの慎之介様におねだりをして申し訳ありませんでした！」

と、若い夫への気遣いを忘れたことに恥じるように声を上げて詫び続けた。

「ほほほ・・・慎之介のモノから嫌われたのかえ？」

何時の間に其処に立っていたのか、お銀が面白そうに口にした。

「ただ、疲れておっただけじゃ！」

お銀から指摘されて悔し気に口を開いた。

「ほほ・・・そうかえ？」

お銀は慎之介を見下ろしながら着物の裾をそろそろと捲り上げた。

そして、剥き出しになった無毛の股間を慎之介に向かって突き出す様にした。

熱にうかされたような目でその部分を見詰めていた慎之介のモノがムクムクと屹立を始めた。

千鶴は声も上げることも出来ず、力無く横たわっていた男根が逞しく立ち上がる様子を脅威の目で見詰めた。

「ほほ・・・分ったかい？慎之介はお前の様な粗マン相手じゃ、もう満足できない身体になっ

たのさ。・・そりゃ、最初の頃は物珍しさで毎夜のように抱いても、少し時間がたてば私や志乃の様に鍛え上げられたコで無ければ満足出来ないのさ！」

悲し気な目で慎之介を見詰める千鶴に勝ち誇ったように笑い掛けた。

「どうだい？欲しいだろ？」

下腹を牢格子にグリグリと押し付け、剥き出しになった女性自身を慎之介の目に見せつけた。

欲しい・・と目をランランと光らせ、その部分に視点を集中しながら呟いた。

それは麻薬中毒患者が麻薬を見せられた時の様な恍惚とした表情であった。

「イヤー！慎之介様！」

お銀のその部分に魅せられたように痴呆の様な表情を浮かべる慎之介の目を醒まさせようと、慎之介の身体に抱き付き激しく揺さぶった。

「お願いで御座います、お銀様！私にも稽古を付けさせてください！この身体を鍛え上げて慎之介様に満足頂ける身体にしてください！」

お銀を睨み据えて、キツとした表情で叫んだ。

「ほほほ・・良いのかえ？肉体鍛錬の道は厳しいよ・・自分から言い出した事だから途中で辛いとか嫌になったとか言い出したら承知しないよ・・」

「不平は絶対に口にしません！必ず貴女様のような毒女から慎之介様を奪い返して見せます！」

千鶴の思いつめた顔を見詰めて、お銀は全てが自分の目論見通りに進んでいる事に満足したようにニッコリと笑った。

「いけません！千鶴！」

成り行きを見守っていた志乃が格子を握り締めたまま狼狽した声を発した。

「いいえ！志乃様！貴女様からも慎之介様を取り戻して見せます！」

日頃見世物の練習として、汗まみれになって姉弟で交わる姿を見せつけられている千鶴は志乃にも嫉妬したように叫んだ。

その日から千鶴に対しても激しい肉体改造が始まった。

「これを体の中に収めてしっかり食い絞めるんだよ。」と、言われてお銀の操作する張型を食い絞めた。

全ては慎之介をこの身に取り返すためと、耐え難い苦痛と肉体的疲労を堪えて下腹に力を込めた。

千鶴の女体の反応にこの子はスジが良さそうだ・・・と、その部分の性能を確かめる様に責め具をゆっくりと出し入れしながら思った。

どれどれ・・・と、張型を締め付ける千鶴の周りに男達が集まって来た。

お銀から張型を受け取った玄斎が筒具で淫口の内部を捏ね回し、その微妙な内部構造や反応を確かめながら、「ほう、この幼さでここまで鍛え上げられるとは・・・これは志乃殿に追いつくのもそう先では無いかも知れぬの・・・」と、驚きを込めて口にした。

この幼さで破瓜してまだ余り経たないというのに随分と鍛えられたものだと感心した。

これも慎之介に恋して、慎之介を取り戻したいと願う一途な娘心が限界を超えた肉体鍛錬を可能にしているのだと感じた。

「いやー！志乃を放っておかないで！志乃にも嫌らしいことをして！どんな恥ずかしいことをしても良いのよ・・・」

突然、立位に縛り立てられ、股間に瘤を結んだ股縄で縛められていた志乃が、下腹を淫靡に振りながら嗜虐者達に向かって叫び声を発した。

嗜虐者達の視線を呼び込むように股を大きく広げて前に突き出し、股縄の感触に酔う様に秘裂から止めどなく樹液を滴らせながら、「お願い・・・志乃の事を虐めて・・・」と、ゾッとするような艶麗な笑みを浮かべた。

この志乃の突然の変貌に慎之介も千鶴も驚きの目を向けた。

これは、自分に関心を向けさせることにより、既に限界を超えて肉体を酷使している千鶴や慎之介を休ませようとする志乃の身を投げる思いで発した言葉であることをお銀は理解したが、はっきりと被虐願望を口にする事により、これまで潜在的に秘めていた志乃の被虐性向が一気に顕在化し始め、精神的にも肉体的にも男達から虐待されることに快感を覚える女に落魄れる第一歩だと確信した。

千鶴が慎之介を恋う心で、淫靡で過酷な鍛錬を自ら進んで受け続けるように、志乃も被虐の快感に身も心も焼かれて奈落の底に転落して行き、自ら進んで男達の残虐な欲望に身を任せようになるだろうと確信した。

鶴翼の舞

千鶴を攻める手を止めて、男達の獣欲を煽り立てる様に淫靡に腰を舞わせる志乃の周りに男達が集まって来た。

男達の目を釘付けにするように、ゾッとするような妖艶な貌を作って甘い息を吐きながら、全身に甘美な肉をたっぷりとした隠微な女体をクネクネと官能的にくねらせ、止めどなく淫門から秘蜜を滴らせ続けた。

そこからは女盛りを迎えようとする女体の発する、滴るような色香が溢れ出ている。

男達は千鶴から離れ、志乃の妖美な雰囲気を引き寄せられるように、周りに集まった。

それは、花の蜜に集まるアブラムシの群れようであった。

この嗜虐者達を自分の下に誘き寄せ、千鶴や慎之介を休ませるという計略は成功しつつあるように思った。

このまま責め続けられたままでは、幼い千鶴の心臓は限界を超えて破裂してしまうのでは無いかと心配したのだ。

「ほほ・・・そうかい？一人淋しい思いをさせて済まなかったね・・・」

お銀が含み笑いをしながら詫びた。

「だけど、千鶴の調教も続けなければならないからね・・・」

志乃の反応を窺うように言葉を続けた。

「どうだろう？お前が千鶴の調教をするってのは？」

男達の魔手を千鶴から遠ざけるために打った芝居であったが、お銀の言葉に冷水を浴びせられたように青くなった。

「どうだい？そうすればお前も淋しくないし、千鶴も鍛えられるし一石二鳥じゃないか・・・」

志乃の切羽詰まった表情を楽しむように覗き込みながら喋り続けた。

この残忍な嗜虐者達はあるくまでも千鶴の肉体改造を進めようとするだろう・・・そうなれば、幼い千鶴の身体は、最早、保たないかも知れない。肉体を酷使するあまり心の臓が破裂して死んでしまうかも知れない。自分なら男達の目を盗み傷ついた千鶴の身体を労わり休ませながら、幼い身体への肉体負担を減らして調教できるのでは無いだろうか・・・この幼い娘を悪鬼達の手から守るにはそれしかない・・・と、お銀の邪険な視線に晒されながら考えた。

「分かりました・・・私に千鶴の鍛錬をさせて下さいまし・・・」

「姉上！」

自らも後口に野太い異物を突き立てられ、秘肉の鍛錬に呻吟していた慎之介であったが、この成り行きに驚いて口を開いた。

度重なる激しい肉体改造に、半ば意識が朦朧としていた千鶴も虚ろな目を見開いて志乃の方を見詰めた。

両手を頭の上で縛られ天井から吊るされていた志乃の縄が解かれた。

ただし、股間を厳しく割る股縄はそのままであった。

立位で縛り上げられた千鶴の正面に志乃が引き据えられた。

腰を降ろした刹那、股間を割る縦縄が秘裂に深く食い込み、ウッと眉根を顰めた。

正座する志乃の顔の高さの少し下に千鶴の下腹が位置していた。

まだ幼さが残る白く柔らかな腹が何かに怯えるように忙しなく膨らんだり萎んだりを繰り返し、その腹の中心で上下する可愛い臍がいじらしく映った。

その直ぐ下には蕾のまま無理やり開花させられ、今妖しく花開こうとする妖花の様な女の亀裂が、まだ生え揃わない春草越しにうかがえた。

志乃が恐る恐る手を伸ばして、千鶴の腰に触れた。

志乃の指先が柔らかな腰肉に触れた途端、まるで電気に触れたように千鶴の身体がビクンと痙攣し、引き攣った悲鳴が上がった。

「許しておくれ・・・千鶴・・・」

志乃の頬を一筋の涙が流れ落ちた。

志乃はそのまま剥き出しとなった千鶴の股間に顔を埋めた。

それは、柔らかい千鶴の下腹に顔を押し付け、顔を隠すことにより泣き顔を悟られないためであった。

志乃は千鶴の下腹に顔を埋めながら、なんと温かく柔らかいのだろうと感じていた。

「いけません！志乃様！お放し下さい！」

自らの不浄の場所に高貴な姫の顔を埋められて狼狽^{ろうばい}して悲鳴のような声を上げた。

そんな千鶴の狼狽^{ろうたふ}えぶりにも関わらず、両手で千鶴の細い腰を抱きかかえた志乃は益々強く顔を押し当てた。

千鶴の股の付け根に顔を埋めながら、これが我が弟慎之介の愛し、何度も交接を繰り返し、互いの愛を慈しみ合った女の秘部かと思った。

鼻先を幼い花卉に押し当てると、先程来の調教で千鶴の秘裂から流れ出た愛液が馥郁たる香りを発していた。

その妖美な匂いは志乃の正常な精神を次第に麻痺させ、何か得体の知れぬ激情を誘い出す淫

靡な香りを漂わせていた。

志乃はまるで何かに憑かれた様に鼻先で秘裂を押し広げ、その蠱惑的な匂いを鼻の奥深くまで吸い込んだ。

残忍な調教者達による肉体改造でその様な身体に作り替えられてしまったのか、志乃の鼻先の刺激を受けて、じわじわと新たな樹液が滲み始めていた。

女同士の交接と言う常軌を逸した事態に志乃の精神状態も麻痺し始めたのか、その甘美な蜜を更に味わいたく、情熱に駆られるまま舌先を伸ばした。

「ああ！志乃様！お許してください！」

志乃の舌先が敏感な秘裂をなぞり始めたのを感じて悲鳴のような声を上げた。

しかし、その舌先の動きは獣欲に狂った男達のようにガサツなものではなく、傷ついた子猫の傷を舐めることによって癒す母猫のように慈しみのあるものであった。

一旦股間から顔を離したが、更に得体の知れぬ激情に突き動かされ、千鶴の肉の花弁に両指を掛け、左右に押し開いた。

白い肌の間から鮮やかな桜色をした美しい秘奥が姿を現し始めた。

千鶴は志乃の指先により秘裂を押し広げられながら、自分の秘めた花園を愛しい慎之介の姉に直視されることに恐怖の様なものを覚え悲鳴を上げた。

「お許してください、志乃様！お許してください、志乃様！」

羞恥に顔を真っ赤に染めて、激しく振り立てた。

「いいえ！許ませぬ！我が弟の突き立てた女の祠を義姉^{あね}の目の前にしっかりと見せるのです！」

志乃は更に秘孔を覆っていた肉襞を一枚一枚押し広げる様にして、淫門を露わにした。

志乃の目にもその部分は初々しい桜色に染まって、思わず誘い込まれる様な淫情を煽り立てていると感じた。

そして、左右に押し広げられた淫花の中心で、まだ先ほどまで突き立てられていた筒具の名残でうっすらと口を開く秘孔が愛おしく思えて来た。

舌先を窄めると、その肉の祠の中に舌先を滑り込ませた。

志乃の舌先をその部分に感じて、体を引き攣らせて悲鳴を上げた。

志乃は舌を伸ばしてその部分を^{もく}抉った。

女体の中でも最も柔らかで甘美な肉の祠を詣でる陶醉感に浸りながら憑かれたように舌先で掻きまわした。

しかし、その舌先の動きは淫欲を貪るのではなく傷ついた粘膜を癒すような優しさが込められていた。

志乃の優しい舌遣いに千鶴も何時しか官能の炎を上げる様になっていた。

千鶴の肉洞からは止めどなく愛液が溢れ出し、志乃の舌先を潤した。

「ほほう・・・中々やるでは無いか・・・」

二人の女が淫情に煽り立てられ艶めかしく身体を蠢かせる様子に玄斎達も感心したように声を発した。

「女盛りを迎えようとする志乃様とまだ幼い千鶴が舞台上で女同士の愛技を繰り広げたら客も大喜びする事ですやろ！」

「しかし、志乃殿、その方も感じておるでは無いか？」

口唇で千鶴の秘所を愛撫しながらも、股縄を食い絞めた志乃の豊かに盛り上がった双臀がピクピクと蠢き、ざらつく縄の感触を肉欲に飢えた女のその部分が求め、粗い縄目の感触を貪る様にピンと張った縄に秘裂を押し付け擦り付け官能的に尻を上下させ、甘美な世界に浸る様にうっとり目を閉ざし甘い喘ぎ声を発するようになっていた。

秘孔を抉る縄の瘤が湧きだした果蜜によりヌラヌラと濡れ光っている事を発見して篤馬が嬉しそうな声を上げた。

「そろそろ、志乃も股の間に埋め込んだ瘤だけでは物足りなくなって来ているだろうから、これを使わせてやるよ。」

お銀がニッと笑うと、何やら淫靡な形状の筒具を取り出した。

それは、鼈甲により作られた長さ一尺程太さ二寸程の棒状の淫具であり、両端は男性のそれに似た形状をしていた。

「お銀、それは何じゃ？」

篤馬がお銀の手にする物を目にして繁々と見詰めながらたずねた。

「おや？知らないのかい？これは^{あいたいがた}相対型さ。城内でも夜のお務めが叶わない側室や奥女中みたいに男日照りの淋しい女同士で慰め合うために重宝しているものさ・・・」

淫靡な道具を手をポンポンと叩きながら嬉しそうに説明した。

床に布団が敷かれた。それはこれから繰り広げられる女同士の交接のための準備であった。

立位に縛られていた千鶴の縄が解かれ布団の上に横たえられた。

精も根も尽き果てたように辛そうに眉根を寄せながら千鶴が布団の上に仰臥していた。

自由になった両手は、わずかに胸と股間を隠すだけで、これから襲い来る運命を既に従容として受け入れる決心をしたかの様に薄く瞼を閉じて仰向けに横たわっていた。

「それでは、志乃殿お待たせしたの・・・なんじゃ！もうこんなに股の間を濡らしておるではないか！全くスケベな女じゃ！」

篤馬は志乃を挿し入れながらも、貞淑な武家の姫が昼夜を分かたぬ過酷な肉体訓練により被虐の喜びをその肉体で現わす女になって来たことに嗜虐の喜びが沸き上がって来るのであった。

股間の縄を解き、その部分を検分しながら、その愛液の豊富さに驚いたように大げさな声を上げた。

志乃の愛液を吸った縄の瘤はヌメヌメとひかり、粘っこい糸を引いて埋まっていた秘孔から取り去られた。

「どうじゃ？千鶴！お主の義姉御の臭いじゃ！しっかり嗅いでみたいとは思わぬか？」

志乃の花蜜で塗された結び目部分を千鶴の鼻先に押し当てた。

千鶴は、むずかる様に顔を振り立てた。

「お止め下さい！柏木様！」

篤馬の陰湿な行為に堪りかねたように志乃が声を上げた。

「ほら！よく見てごらん、千鶴。良く出来ているだろう。この小さい方がお前の身体の中に埋まる部分でこっちの太い方が志乃の身体に埋まる部分さ・・・」

布団の上に仰臥する千鶴に相対張型を見せつけて説明した。

「志乃はこんなに^{ぶつと}太い物をアソコに呑み込まなけりゃならないんだよ。いくら鍛え上げた志乃でも大変だろう・・・だからお前が志乃のその部分を舌で嘗めて柔らかく揉み解してお上げ・・・」

悪鬼達の計略を知り青くなった志乃が、「いけません、千鶴！志乃は大丈夫です！これしきの張型耐えて見せます！」と悲痛な声を張り上げた。

男達は志乃の狼狽ぶりを楽しみながら手を引いて、千鶴の横たわる布団の上に千鶴と逆方向に仰臥させた。すなわち千鶴の頭の方が志乃の足の方向であり、志乃の頭の方が千鶴の足の方向であった。

「さあ、千鶴これからお前の口と舌を使って志乃のアソコを柔らかく揉み解すんだよ！」

すぐ隣に横たわる千鶴の身体を持ち上げて、仰臥する志乃の上にうつ伏せに重ねて行った。成熟した女体の上に若い女体が柔らかな胸と腹を接して横たわり、千鶴の目と鼻の先には志乃の熟れた陰唇が在り、志乃の目と鼻の先には千鶴の幼い秘裂が存在した。

千鶴は目の前に広がる志乃の女の部分を思わず目にしてしまいハッとした。

其処は男達により面白がって剃毛された部分であり、童女のようにツルツルの肌が目に焼き付いた。飾り毛がを失い、自分より幼く見える股間には自分には無い成熟した女の器官がうずくまっている事を思い知らされた。

脂肪をたっぷりと載せ柔らかく肥大した二枚の肉貝の様な亀裂からは成熟した女の匂いが立ち上っていた。

じっと志乃の女の部分を見詰める千鶴に、「早く始めるんだよ！」とお銀が催促の平手打ちを尻に浴びせた。

志乃の女の中心を見詰める内に、此処が愛しい慎之介様のモノを咥え込み狂ったように愛欲を貪った所か！と、日頃の調教で姉弟で抱き合い激しく求め合う姿が臉に浮かんで来て、女の嫉妬の様な感情がムラムラと込み上げて来た。

その激情に駆られるように志乃の股間に顔を押し当てると、口唇で割れ目をなぞり始めた。

「ああ・・・千鶴・・・」突然の千鶴の激しい舌と唇の動きに驚いたような声を上げた。

千鶴は両手を使って志乃の秘裂をグイッと押し開き、剥き出しとなった秘園に舌先を無我夢中で這わせた。

この女の穴に慎之介様の硬く熱いモノを咥え込みヨガリ狂ったのか？と怒りの様な物が込み上げて来て狂ったように舌先を窄めて肉洞を責め立てた。

「ああ・・・千鶴・・・」と、千鶴の遮二無二の舌先の攻撃に身体を悶えさせた。

成熟した志乃が若い千鶴から責め立てられている光景に、男達は顔を見交わして笑い声を上げた。

千鶴の責め立てる肉の穴からは甘酸っぱい露があふれ出し、唾液と混じって流れ出るそれを吸り上げた。

「ああ・・・千鶴・・・もう許して・・・」思いがけない千鶴の激しい攻撃に恐怖を覚えたようにか細く口にした。

「いいえ！許ませぬ！慎之介様を誘惑するこの様な淫らな穴は、これこの様に罰を受けるのです！」と、なおも嵩にかかった様に責め立てた。

年上の成熟した女を自分の唇と舌で責め廻ることに言いようの無い愉悦感が込み上げて来

て、頭の中が真っ白になって理性も常識も忘れ果て、本能の赴くままに志乃の股間を舐り続けた。

ふと、両手を使って押し広げた女陰の端で可愛い木の芽が包皮の間から顔を覗かせているのに気付いた。本当に感じていなければ屹立するはずの無い肉芽を認めた千鶴は、「まあ！何と淫らな女でしょう！ホトを嘗められながら感じてしまうとは！」と叫ぶように言い、包皮を剥き上げると歯先でそれを噛んだ。

思わずジーンとした痛みが脳髄を駆け上がり「ああー！痛い！」悲鳴を上げた。

勿論それは陰核を噛み切ってしまうほどの強さではなく、熱に浮かされた甘噛みであったが、志乃の性感を著しく向上させ言葉に現わせない快美感が下腹に全体にジーンと拡がった。

千鶴はなおも屹立した肉の芽を舌先で転がしたり口に含んで強く吸い上げたりした。

「ああー、もう許して、千鶴・・・」込み上げる快美感に押し流されうわ言の様に口にした。

「いいえ！許ませぬ！慎之介様を誘惑した淫らな所に罰を与えるのです！志乃様に二度と慎之介様を誘惑しようとしないうちに思い知らせるのです！」と熱に浮かされたように叫んだ。

千鶴の言葉が志乃の心を抉った。

姉弟による交接を悪鬼達から強制され、まともな神経では出来ない事を吾と我が身を淫魔の潜む淵に投げ込み、人として忘れてはならぬ節度を捨て去り、悪魔じみた狂おしい陶酔の中に身も心も没することで我が弟とまぐわって来たのだった。

慎之介との交接が終わり、志乃の心と身体を支配していた淫蕩な狂気から醒めると自分が何をしてたのか記憶が^{おぼろ}朧だった。

千鶴の言う通り、その間自分は淫靡な炎に焼かれ、淫乱な鬼女と化し、淫らな言葉で慎之介を誘惑し、涎を垂れ流す男肉に飢えた浅ましい雌の獣に化身し、淫液を垂れ流す醜い雌穴に慎之介を誘い込み、たくましい肉塊を貪り食っていたのでは無いか？ーと恐怖を覚えた。

おぞましい肉体の一部が、志乃の理性が喪失している間に、自我を持った様に蠢き、淫らな妖気を撒き散らし、弟のモノを何度も誘い込み啜え込んでいた！ーその浅ましい様子を千鶴はじっと目撃していたのでは無いか？と悪寒を感じた。

この自分の義姉に対する淫蕩なふるまいは千鶴自身の身体も燃え上がらせていた。

志乃を跨ぐ股間からは、いつの間にかドクドクと愛液が溢れ出て真下に位置する志乃の顔を濡らしていた。

「ほら！千鶴もこんなに感じておるでは無いか。志乃殿も応戦するのじゃ！」と、志乃の髷を掴んで千鶴の股間に顔を押し当てた。

其処は既に夥しい粘液に溢れていた。

千鶴に責められ不可思議な快美感に包まれていた志乃は春草も生え揃わない幼い娘の陰唇に唇を押し付けた。

「ああー！」志乃の舌先で快楽源を抉られ、既に自分でも訳の分からない興奮状態にあった千鶴が喜悦の声を上げた。

「ああー！お止め下さい、志乃様！」このままでは志乃の口技により絶頂に達してしまうと、怯えたように声を上げた。

「いいえ、許ませぬ！其方^{そなた}が真に慎之介の妻にふさわしい娘か、姉がこの舌先を使って確かめるのです！」と、なおも激しく責め立てた。

柱に立位に縛られた慎之介は自分の後口を襲う張型の違和感も忘れて、喜悦の声を発して悶え合う二人を注視していた。

「千鶴！もう止めよ！姉上！お止め下さい！二人とももう止めてくれ！」と、自分を奪い合う女同士のさや当てにおろおろとした声を上げた。

そんな慎之介の狼狽えぶりにお銀はニッコリと笑って詰め寄った。

「そんな心配することは無いわさ・・アイツらはあれで二人とも結構楽しんでるのさ・・」と、色っぽい目で慎之介を見詰めながら口にした。

そして、自分の後を抉る淫具の刺激に誘発されたのか、それとも実の姉と千鶴の女同士が巻き起こす淫風に煽られたのか、いつの間にか屹立している男のモノに手を添えた。

「全くお前も逞しく成長したものだね・・初めて見た時はまだ皮を被ってて、つくしんぼみたいだったけど、今じゃ傘の開いた立派な大松茸さ・・淫水焼けして黒々と光って女殺しの良いお道具になって来たよ・・」

女形の役者がそのまま務まりそうな程の色白で整った顔を持つ一方、男にしては華奢な身体つきに似合わず、その部分だけ異様に発達した肉の棒を握り締め、熱っぽい目で慎之介を見詰めた。

「これまで色々な男の松茸を育てて来たけど、こんなに大きく開いたのは初めてさ・・よっぽど志乃や千鶴の水が良かったのかねえ・・もっと沢山の女と交わって、女の露を吸い込めば、まだまだ育つだろうねえ・・楽しみだねえ・・」

抒情を秘めた目線でお銀が頬を摺り寄せて来たので、熱っぽい息が慎之介の頬にかかった。唇を奪おうと重ねて来るのを顔を左右に振って避け続けた。

「まだ味わった女の数には私と志乃と千鶴の三人しかないから、お前と同じ時分の玄斎旦那よりはずっと少ないだろうけど、何しろ昼夜を分かたず交わっているからね、交わった回数は同じ時分の玄斎旦那よりずっと多いんじゃないかね。将来玄斎旦那を負かす性豪に成るかも知れないね・・・」と、指先で熱気を帯びた亀頭を弄びながら呟いた。

お銀の手の中で硬く膨張した慎之介のモノの先端からは何時の間にか透明な露が滲み出ていた。

お銀の呟きが耳に入ったのか、志乃と千鶴の裸の果し合いを見詰める玄斎が一つ咳払いをした。

汗まみれになって互いの秘奥を攻め合っていた千鶴と志乃であったが、最初に悲鳴の様な声を発して千鶴が果てた。それにつられるように志乃もガックリと布団の上に崩れ落ちた。

志乃様！

ああ！千鶴！

激しい性交の直後で荒い息を吐き合う二人は、苦しい息の下で、互いに愛しい者を求め合う様に名前を呼び合った。

互いに激しく絶頂を極め、それにより嫉妬や恨みなど一切流れ去ったかの様に二人は至福の表情を浮かべていた。

「さあ、さあ、これでお互いに充分身体も解れたろう？いま相対型を取り付けてあげるからね・・・女同士で指と舌だけで、もどかしかったんじゃないかい？」

淫具を手に猫撫で声を発してお銀が志乃に近づいた。

「ああ・・・もうお許してください・・・」

千鶴との女同士の交接で疲れ果てたように口にした。

「馬鹿言ってるんじゃないよ！さつきのは舌を使っただけの前技で本番はこれからじゃないか。舞台に上がって、本番を前にして前技だけで終わったら、お客は怒り出してしまうよ！」目の奥に冷酷なものをたたえ冷たく言い放った。

お銀の剣幕に志乃は力無く溜息を吐いた。

お銀は二人の疲弊具合を無視して、志乃のその部分の様子を確かめると、手にした筒具をそっと当てがった。

千鶴の指と舌で十分潤わされ、度重なる肉体訓練で大抵の太さのモノなら難なく受け入れられるように改造されていた志乃のその部分は、蠱惑的な花卉を自ら開くように苦も無くお銀の押して出る野太い筒具を含み込んで行った。

「今まで欲しくって仕方なくて、濡れに濡れていた部分だからね・・・ほら！どんどん入って行くよ！」

志乃の秘裂の奥深くに挿入しながら嬉しそうに声を上げた。

お銀の手により埋め込まれながら、志乃は辛そうに眉を顰め、激しく顔を左右に振って、ブルブルと腰を震わせながらアッアッと呻き声を上げた。

それは真に辛いのか、これまでの調教で教え込まれた嗜虐者の欲望を昂進させるための擬態なのか本人も分からなかった。

「何が、アッアッだよ！本当は嬉しくって仕方ないくせに！」

満面に喜色を浮かべたお銀が更に押し立て、とうとう付け根まで押し入れた。

「これは、これは、志乃殿！まるで男に成ったようでは無いか！」

股間からにゅっと巨大な棒状のモノを突き出す志乃の姿に、男達が手を叩いて嬉しそうに声を発した。

深々と突き立てられた凶悪な姿を晒す淫具は、柔らかな媚肉を思い切り左右に押し広げ、元の女陰の姿を最早留めず、新しい淫靡な生殖器官が其処から生え出したように見えた。

剃毛されて隠す物の無い股間から卑猥な異物を突き出したまま、男達の野卑な視線を受けて両手で顔を覆って啜り泣いた。

「さあ！それで千鶴を貫くんだよ！心配しなくて良いさ。千鶴の入る側はお前の方より二割がた細く出来ているから、楽に呑み込めるはずだよ。」

お銀が股間から鼈甲細工の張型を突き出す志乃の手を引いて千鶴の枕元に誘った。

そして、千鶴の目にこれから自分の身体を貫く巨大なモノを見せつける様にしながら、「いきなりこんな大きな物を咥え込まれたら、大事なおマ■■■■が壊れてしまうかも知れないから、先ず滑りを良くしておくんだよ！」と、志乃の肉体を深々と貫く棒具の先端を握って、千鶴の唇に持って行った。

華洞内を隙間なく埋める張型を掴まれて引きずられる鋭い感覚に志乃がアッと悲鳴を上げた。

薄っすらと目を開いた千鶴の目の前に飴色に輝る筒具が在った。

一瞬その凶悪な姿を晒す淫具の大きさと、それが自分の上に跨る志乃の無毛の股間から生え出ている事に驚いた表情を浮かべたが、全ての運命を受け入れる事を決心したように、小さく唇を開き舌を出すと、伸ばした舌先でその淫具の先端をチロチロと舐め始め、次にぶっくりとした赤く艶のある口唇を淫具全体に這わした。

周囲を吹き荒れる淫風に煽られた様に、その舌の動きは次第に大胆なモノに成って来て、舌全体を使って筒具全体を舐めまわしたり、口を大きく開いて亀頭部を含み、頬を窄めて口内全体で洗った。

膣内に隙間なく収められた筒具を通して、千鶴の口唇や舌の動きがビリビリと伝わり、その甘美な刺激に呻き声を漏らして身体をくねらせた。

「ほう、中々上手では無いか・・・」

まだ本格的に口を使って男性器を愛撫する方法を教えた訳では無いが、額に汗を浮かべて必死に志乃の股間から突き出たモノを舐めまわす千鶴の姿に玄斎が驚いたように声を上げた。

「恐らく、志乃や慎之介が口技の鍛錬を受けるのを盗み見て覚えたのでしょうか、中々筋が良さそうだ・・・」

篤馬も千鶴の巧みな舌遣いに感心したように応えた。

真っ赤に顔を染めた千鶴は、鼻を鳴らしながら志乃の股間のモノ全体を丹念に舐め回し、筒具と淫孔の隙間から滲み出る志乃の愛液を舌先で掬った。

千鶴の柔らかな舌先が敏感な粘膜を刺激して志乃の身体がピクリと硬直した。

張型を咥え込む結合部からは次々と熱い樹液が染み出し、丹念に舌先でそれを拭い取った。

「さあ、もう充分だろう。一つに繋がるんだよ・・・」

お銀が志乃の豊かな尻肉を平手で叩きながら促した。

「千鶴が慎之介のデカマラを呑み込むのに相応しい娘か新之助の姉として確かめるんじゃない！」

「許しておくれ・・・千鶴・・・」

志乃がその先端を千鶴の股間に当がった。

千鶴もその時が来たことを覚悟して、協力するように股を開いた。

千鶴の開発途上の秘孔にズブズブと淫具が埋まって行った。

女陰を抉るその大きさに、顔に汗を浮かべた千鶴がハアハアと息を吐いた。

「許して・・・許して・・・千鶴・・・」

志乃から滴り落ちた涙が千鶴の顔を濡らした。

「いいえ、志乃様・・・千鶴は志乃様と一つに繋がれて幸せです・・・」

と、志乃に貫かれながら喘ぐように声にした。

その千鶴の可憐な表情に引き込まれるように思わず志乃は唇を重ねた。

志乃の唇を感じて、千鶴も強く唇を押して出て、舌を迫り出すと互いに舌を絡め合い、口を吸いあった。

その熱の籠った口接に思わず篤馬が、「此女奴ら案外こんな事が好きなようだな。まるで淫靡な舞を踊る様に腰をくねらせおるわ・・・」と感心したように口にした。

「まもなく女盛りを迎えようとする女と、これから花を咲かせようとする娘が舞台の上で一つに繋がったら、客も喜びますやろ・・・」と、応えた。

「折角だから、千鶴の鶴を取って鶴翼の舞と名付けて舞台の演目にしたら良いのではないか。」

「それは良い名前ですね。早速そのようにしましょう。」

お銀も満面に喜色を浮かべて声を上げた。

嗜虐者達の悪巧みも耳に入らない様に志乃と千鶴は歳の差を超えて愛し合う者の様に互いの愛に没頭していた。

自分の膣内に埋め込まれた張型を通して、もう一方の端を千鶴のその部分がグイグイと締めつけるのが伝わって来た。

こんな幼い顔をして、この部分は既に成熟した女と同じ・・・あるいはそれ以上に開発されてしまった事に気付いて愕然とすると伴に慎之介を思う心がここまで仕向けたと思うと千鶴の事が不憫に思えた。

筒具を強く締め付ける頻度が次第に増して来て、額に汗を浮かべ眉根を寄せて苦しそうに喘ぐ千鶴の様子から絶頂を迎えるのも後僅かだと感じた。

その様子は傍で観察していたお銀も気付いており、「ほら！イク時は二人同時にイクんだよ！調子を併せて同時にイカなかったら何度でもやり直しさせるからね！」と、鬼の様な形相で志乃に声を掛けた。

このような壮絶な行為を後何回も繰り返させたら幼い千鶴の心臓は本当に止まってしまうかも知れないと、恐怖を覚えた志乃は、

「待って！千鶴！まだイカ無いで！」と必死に呼びかけた。

最早志乃の声も耳に入らないのか、瞼を強く閉じ、桃色の唇をパクパクさせて喘ぎ続けた。

最早一刻の猶予も無いと感じた志乃は自分も同時にイクべく自分の淫裂に心を集中した。淫孔に埋められた淫具から悔しくも、抑えようの無い怒涛のような快美感が込み上げていた。その激情を掻き立てる様に、自らの掌でたわわな乳房を抱き上げ、揉みしだき始めた。千鶴と一つに繋がったまま、激しく乳房を揉み上げ身悶える志乃の姿に男達は目を見張った。今や誰の目も気にならないのか、甘い声を咽から漏らし、屹立した乳首を指先で扱いた。

うら若い武家の姫と幼い町娘が人目も憚らず、腰を打ち付け合い、嬌声を上げる修羅図に男達は淫情に燃える目で見詰め続けた。

「ほら見てごらん！お前の姉様と恋女房は汗を撒き散らしてヤリ狂っているよ！」

志乃と千鶴の激しい情交が巻き上げる熱風のような淫蕩な嵐の渦中に迷い込んでしまった慎之介の脳髄は甘美な淫魔に犯された様にボーと女同士の愛に燃える二人を見ていた。

志乃と千鶴の様子を観察しながら、お銀は片手を伸ばし、今は火のように熱を帯びた慎之介の男の肉を擦り上げていた。

幼い千鶴の股間目掛け筒具を打ち込む志乃は、今は淫火の^{ほむら}炎に自らの身体を投じて、甘美な喘ぎ声を上げながらもどかし気に身を悶えさせていた。

未だよ千鶴！未だよ！頑張って！と必死に心の中で念じ続けながら自らを燃え立たせるのであった。

志乃の必死の願いに励まされたのか、千鶴も白目を剥き、ハッハッと短い息を繰り返し、その瞬間を堪え続けた。

志乃も体内を駆け巡る淫蕩な血潮に全身を紅潮させ、その時に向かってまっしぐらに進んだ。千鶴の身体がクッと硬直し、短い呻き声が上がった。

志乃も千鶴に双頭の淫具を突き立てながら、ア—！と声を発して身体を仰け反らした。

二人の女は双頭の筒具を通して雷の電流が体内を走り抜けた様な強烈な快感の刺激に打たれ、身体を震わせた。

情事に長けたお銀は二人が演技ではなく本当に絶頂に達したことを理解して手を叩いて喜んだ。

「お見事、お見事、見事に女同士でイッたじゃないか！こんな艶技を舞台で見せられたらお客さんは大喜びするよ！」

「客だけでは無く慎之介殿も感激してイッてしまった様では無いか？」

激烈な射精の余韻に下腹をピクピクと痙攣させる慎之介の姿を発見して、篤馬が大笑いした。

志乃は精魂尽きたように仰向けに横たわる千鶴の上に身体を預けて横たわっていた。

まだ絶頂の余韻に身体をピクピクと痙攣させる二人にお銀は、

「さあ、最後は千鶴の口を吸っておやり。」と、声を掛けた。

お銀に言われるまでも無く千鶴の事を愛おしく思う志乃は千鶴の唇にそっと唇を重ねた。

志乃の目から零れ落ちた涙が千鶴の頬を濡らした。

夜盗

志乃達を幽閉するために造られた特殊な蔵。早朝から夜半に及ぶ過酷な肉体鍛錬で三人の悲鳴と嬌声が木霊していたが、今はひっそりと静まり返っていた。

疲労困憊してぐっすりと寝静まる深夜のその蔵の中に囁き声が聞こえて来た。

「ここは変な蔵だね・・新しい蔵だからたんまりお宝が在ると見込んだが、とんだ目スリだったね・・」

気配を殺して抜き足差し足で歩を進める賊に、疲弊して熟眠する志乃達は気が付かなかった。しかし、夜盗はわずかに月の光が差すだけの薄暗い蔵の二階に造られた頑丈な牢とその中で薄い布団にくるまっただけの裸の男女の姿を認めて、信じられない光景に思わず声を発してしまった。

その異様な光景に気を奪われた盗賊は、思わず進めた左脚が何かに触れるのを感じた。

しまった！と気付いた瞬間、左脚を噛んだ足枷は鎖に引きずられ、一瞬にして片脚逆さ吊の姿勢に夜盗を吊り上げた。

万一の事態に備え、志乃達が逃亡するのを防ぐように暗闇の中に仕掛けておいた罠であった。慎重な盗賊ではあったが、牢の中に閉じ込められた志乃達に気を取られ罠に嵌ってしまったのだった。

頭を下にして天井から高々と吊り下げられながら、必死に藻掻いたが、容易に足枷を外すことは出来なかった。

罠には母屋で寝ている玄斎達にも警報が届く仕掛けになっていたのか、何事か！？と男達がどやどやと蔵に入って来るのが分かった。

男達が手にする蠟燭の灯りの中で盗賊が天井から逆さに吊られているのが分かった。

「ほほう・・・ネズミが罠に掛かりおったわ・・・」

「ワテ所^{とこ}に泥棒に入ろうなんて厚かましい奴や！」

男達は宙吊りの盗賊を取り巻きながら、面白そうにその姿を眺めた。

周囲の燭台に火を灯して回ったので、逆さ吊りの盗賊の姿がはっきりと浮かび上がった。

黒染めの股引きに黒い半纏、頭にはすっぽりと黒い手拭いで覆い鼻の下で結び目を作り、闇に紛れて見えず、人相も分からない絵に描いたような盗人装束であった。

賊は周囲を男達に取り囲まれながら、威嚇するように手にした短刀をメクラめっぽう振り回した。

しかし、実戦慣れした玄斎や篤馬にとって、そのように、むやみに振り回す匕首など威嚇にもならないものであった。

篤馬は暴れまわる相手の腕をいとも容易に掴み、力づくで匕首をもぎ取った。

そして、宙吊のまま上体を身動きできない様に縄で縛り上げた。

吊るしていた鎖がカラカラと緩められ、賊の身体が床に降ろされた。

上半身を厳しく縛められ身動きを封じられた盗賊が床の上に蹲り、その周囲を男達を取り囲んだ。

「お主、女だな・・・」

篤馬が呟くように口を開いた。

盗みに忍び込んだ賊が女と聞いて惣右衛門がエッ！と驚きの声を発した。

確かに小柄で痩せぎすの外観は男より女に近いものがあった。しかし、盗みに入るような人間は、狭い隙間を潜り抜け、敏捷性が求められるため小柄の方が有利であり、男でもこの程度の体格の盗賊は居るものだろうと訝った。

「うるせえー！そんな事知るモンけえ！番屋でも何処でも突き出しやがれ！」

篤馬の問いに盗賊は不貞腐れたように金切り声を発した。

篤馬は宙吊になった賊と揉み合った際に、そして上半身を縄掛けする際に賊の身体に触れ、女では無いかと感じていたのだった。

そして、賊の発した甲高い声により、益々女である事を確信するようになった。

「女かどうか確かめてみる必要があるな・・・」

玄斎が好色な笑みを口元に浮かべた。

正体を知られまいと藻掻く賊からほっかむりの黒染めの手拭いを奪い取った。

其処には長い髪を頭の上に束ねた若い女の白い顔があった。

「フーム・・美形ではあるのぉー・・しかし、惜しむらくは・・」

男達の視線を浴びながら女盗賊は諦めたように項垂れていた。

女はまだ二十代前半のようで、細面の白い顔にすっきりと通った鼻筋、きりりとした目と唇を持ち、たおやかな女性というのとは別の、例えば、芝居で男役を演じられるような美女であった。ただ、惜しむらくは玄斎の口から出た様に左頬に醜い傷跡があり、そこから頬全体に大きな青黒い^{あざ}瘡を持っていた。

まるで芝居の‘蝙蝠安’を連想させた。

男達は、顔を右横から見る限り申し分の無いキリリとした美形であるのに、その醜い傷跡が惜しいと感じた。

「さて、顔だけでは男か女か判らんぞ・・」

「そやそや、今日日女^{きょうび}みたいに見える男も大勢居まっさかいに・・」

好色な欲望を剥き出しにして惣右衛門がニヤニヤ笑いながら口にした。

女の後手縛りだけを残して、上体を縛り上げていた縄を緩めた。

黒半纏と単衣をズリ降ろし、手首の傍まで捲り上げた。

跡には白い細い身体にさらしを巻き付けた胸が見えた。

篤馬が胸のさらしに手を掛けた。

「ああ・・イヤ・・」

盗賊が自分が女である事を認めたように小さく声を上げた。

「ふふ・・イヤか？・・しかしこれを剥ぎ取らねばお主が男か女か判らんからのう・・」

今は盗賊が女であることを確信している玄斎達であったが、猫が捕らえた鼠をいたぶる様に少しずつ女の羞恥を煽って行くのであった。

男達は胸にきつく巻いていたさらしを解いていった。そして、その下から深い胸の谷間が姿を見せ始めた。

「ほほう・・細い身体に似合わず、なかなか豊かな胸をしておるではないか・・」

布による締め付けが解かれ、その下から弾かれた様に姿を見せた乳房に劣情を刺激された様に声を発した。

淫欲に濁った眼で見つめる男達の目の前で上半身を剥き上げられ、女盗賊は次第に女の弱さ

を露呈し始めたように、背を丸めようとして強く俯き、小さく震えながら、小声でイヤッイヤッと呟くような声を発し続けた。

「お主、まだ男に抱かれたことが無いな？」

形の良い乳房の先にチョココンと突き出た綺麗な桜色をした小粒の乳首を目にして玄斎が問うた。

外見から見受ける女盗賊の年の頃なら、もう幾人かの男性経験は在っても不思議では無い。ましてや人倫からかけ離れた裏稼業の荒んだ生活なら同業の男に抱かれたり、自ら進んで男を求めてもおかしく無いはずである。

しかし、不思議と女の身体からはそのような阿婆擦れ女の暮らしぶりはいかがえず、清純な乙女のような雰囲気醸し出していた。

何度も男と交わり、乳を揉まれたり乳首を吸われたりすれば、肥大し色素も沈着するものであるが、女のそれは未通の乙女のように初々しい色を持っていた。

試しに柔らかな乳房を下から持ち上げ、蕾のような可憐な乳首を指にした時、女は電気に打たれた様に激しい反応を示し、男性経験が無いことを確信した。

今や女は上半身の衣類を一切奪われ、改めて高手小手に縛りなおされ、天井の梁から降ろされた縄により立位に固定されていた。

ぷっくりと形の良い乳房の上下には幾本もの麻縄が掛けられ、上下から乳房を絞り出す様に縛り上げられていた。

女の身体を覆うものは黒染めの股引きと地下足袋だけであった。

檻の中の志乃や慎之介や千鶴も騒ぎですっかりと目を醒まし、この様子を固唾をのんで見守っていた。

頑なな態度を示す女盗賊であったが、不気味な男達に取り囲まれて上半身裸に剥かれ心なしか震えているように見えた。

「さてさて、胸の方は成程女の様であるが、股の間の方はどうかの？なにしろ恵比寿屋に泥棒に入ろうかという不届き者じゃ！股の間に太くて長いヒ首を隠し持っておるやも知れんぞ・・・」

縄止めを終わり一段落ついた玄斎が改めて女の裸身を繁々と見詰めて笑いながら口にした。女盗賊は男達の目の前に股間を露出させられるという恐怖に腰を身悶えさせたが、男の力の

前に易々と封じられてしまった。

「止めろー！止めろー！さっさと番屋に引き出せ！」

女盗賊は股引きを脱がされることに恐怖したように叫び声を上げ続けた。

女の悲鳴の様な声も気にせず、男達は股引きを止めていた紐を解き、せかせかと下半身を覆っていた衣類を脱がしにかかった。

「おお！これは？」

「何と！何と！」

男達はズリ降ろした股引きの下から信じられない物を目にして驚きの声を発した。

女は縄で立位に吊るされたまま下腹を剥き出しにされ、その様子を男達の卑猥な目で見詰められたまま羞恥に顔を赤く染め啜り泣きながら俯いていた。

「まさか、モッコ褌とは！」

篤馬が驚きを隠せず声を上げた。

「屋根に上がって人の家に忍び込もうとするのだから、いくら女とはいえ腰巻では具合が悪かったであろう・・・それにしてもモッコ褌とは！」

玄斎が感心したように呟いた。

モッコ褌とは当時の男性下着の一種で、モッコ担ぎと呼ばれる肉体労働の男達が着用する物で、二枚の三角形の布地の頂点を繋いで、残りの二頂点を紐で縛った様な物であり、現在のブリーフパンツに近い形をしている。

「しかし、こうして眺めさせてもらいますと、若い娘のモッコ褌姿も妙にソソルものがありますな・・・」

惣右衛門が涎を垂らさんばかりに口元を緩めて、その部分を注視した。

野卑な男達に取り囲まれ、白い下腹に藍染木綿の三角形の布を身に着けただけの女は羞恥に啜り泣きながら立ち尽くしていた。

男達は、暫くの間、群青色の三角の布地を股間に着けただけの裸の女の姿を眺め続けた。

その唯一身に纏っただけの下着の下には女の丘の盛り上がりがアリアリとうかがえた。

身動きの出来ない立位に固定されたまま、恥ずかしい姿を男達の粘ついた視線に晒す屈辱に女盗賊は羞恥に身を染めながらも歯を食いしばり嗚咽を抑えていた。

男達は穴のあくほど美しい裸体を眺め続けた後、最後の行動を開始した。

篤馬が褌を止めていた紐に指を掛け解き始めた。

「アアーッ！イヤァー・・・」

最後まで身を守っていた布地を剥がされる羞恥に身悶えた。

「ふふ・・・嫌か？人の大事な隠し蔵に忍び込んだ罰じゃ。自分の隠し処を晒すのも仕方無からう・・・」

腹に固く巻き付けて褌を支えていた紐をすっかり緩め終わった。

支えを失った布地は大腿を滑るように落下した。

オオーッ！とその部分を目にした男達から歓声が上がった。

真っ白な太股の付け根には艶やかな黒い春草が慎ましやかに繁茂していた。

篤馬の指先が柔らかな叢に触れた時、女の身体がビクンと反応した。

この時の反応から、この女は男に触られたことが無いと確信した。

両手の指先で叢を押し開き、その奥に隠された秘裂を露わにした。

綺麗な桜色の肉襞からこの女は経験が無いことを益々確信した。

男達の熱い視線がその部分に注がれている事を感じ、女は歯をカチカチと鳴らして羞恥に耐えていた。

「さて・・・この女が何者か詮議しなければならぬのお・・・」

「さいですな、折角揃えた拷問道具も使わず埃を被ってまっから、丁度良い機会でおますな・・・」

この若い女を拷問道具で責め苛む姿を想像して惣右衛門が嬉しそうに声を上げた。

蔵の中に柔肌を打つ鞭の音と甲高い悲鳴が響いた。

高手小手に縛り上げた全裸の女を鋭く背を尖らせた三角木馬に載せ上げ、両側から篤馬と惣右衛門が割れ竹で打擲を加えているのだった。

「どうした？まだ答えぬか！」

篤馬が容赦なく捕らえた女盗賊の身体に鞭を振るった。

「ウッ！ウッ！言うもんけえー！」

激痛に耐えながら女が声を絞り出した。

「白状せぬとなると益々口を割らせたくないものよのう・・・」

目に残酷な光をたたえて割れ竹の先端で女の乳房をグリグリと抉った。

唇を噛み締めながら篤馬の狼藉に耐えた。

割れ竹が女の柔肌を打つたびに汗が飛沫となって飛び散り、白い肌が赤く染まった。

激痛に女の口から激しい悲鳴が上がる様になって来たが、それでも口を割ることは無かった。

とうとう意識が飛び、木馬の上でガックリと身体が崩れた。

転落防止のため天井から降ろした縄が後手に結ばれていたため、木馬から落下することは無かったが、力無く俯いた身体は完全に意識を失っているようであった。

「こら！何寝てんや！起きんかいな！」

惣右衛門が桶に汲んだ水を女の身体に浴びせかけた。

桶には濃い塩水が汲まれており、傷口を刺激する激痛に女は白目を剥いて仰け反った。

「ふう・・・しぶとい女だ！」

篤馬が額を流れる汗をぬぐいながら言った。

「柏木様、まだまだ責めが手ぬるいのとちゃいまっか？どないでっしゃろ、今度は駿河間に掛けまひょか？」

恵比寿屋惣右衛門が文字通り恵比須顔で聞いた。

陽は既に高く登り、二人は既に半日近くも女盗賊を拷問に掛けていたのだった。

その間、蔵の中に用意された様々な拷問道具を使い女を責め続けた。

それは、自白を迫るというより、二人の嗜虐趣味を満たすため、偶々捕らえた女鼠^{たまたま}を次々と責め具を代えていたぶるのであった。

「お願い・・・私を番屋に突き出して・・・」

番屋での審議の方が此処よりも救われると思った女が虚ろな目で哀願した。

「番屋になど突き出すものか、お前は死ぬまで此処から出られぬものと心得よ！」

「ああ・・・もう殺して！殺して！」

と、泣き叫び始めた。

頑固な女であったが、泣き叫び始めた女の様子にすべて口を割るのはもうすぐだと感じていた。

「次は石抱きじゃ！喋りたくなければ責めの数々受けて見よ！」

土間に敷かれた粗筵の上に意識を喪失した女盗賊の裸体が横たわっていた。

その体は全身鞭打ちの跡を残し、血が滲み汗に塗れ、拷問の苦しさの余り失禁した汚水に塗れていた。

「まだ吐かぬとは全くしぶとい女だ！」

悲鳴を上げながらも落ちそうで落ちない女の頑固さに呆れたような声を上げた。

「さて、次はどないしまひょ？」

と、この強情な女をどう攻略しようかと呆れ顔で篤馬の方を向いた。

更にそれから一刻程過ぎていた。

「どうじゃ？白状したか？」

「はい！すっかり白^グ状しました。」

様子を見に来た玄斎が尋ねるのに応えた。

女は拷問具から降ろされ、土間に敷いた粗蕨の上に全裸のままうつ伏せに横たわっていた。身体から一切の縛めはとられていたが、全身が赤く傷つき意識を完全に喪失し死んだように伏せていた。

元々肉の無い細身の体で在ったが、僅か半日ほどの間にゲッソリと痩せこけ、頬も落ち窪んだように感じられた。

「この女、名前は、おセイ。年は二十二。親を早くに亡くし、紺屋町の棟割り長屋で針仕事を営みながら妹と二人で暮らしているとの事です。小さい頃からの男勝りのお転婆娘で、男の子達と木に登って遊んでいたところ、木の枝が折れて真逆さまに顔から落ちたとの事です。幸い命は取り留めましたが、顔に一生消えない傷を負ってしまい、それ以来、自分は結婚を諦め、妹の幸せだけを願って慎ましやかに暮らしていたとの事です。妹の名はおシズ。年は十八。活発な姉と正反対の大人しく内気で優しい性格ですが、紺屋小町と評判になるほどの美人だそうです。」

ここまで篤馬の報告を聞いて、紺屋小町と称される美人と耳にして、興味を覚えたのか玄斎が小さく反応した。

「ところが、この評判を聞きつけて来たのか、赤坂無念流の三人程の乱暴者がおシズを手籠めにしようとした。おシズの悲鳴を耳にした長屋の人たちが駆け付け、散々に狼藉者を打ち据え、退散させたのでおシズの操は守られたようですが、襲われた時、おそらく頭でも打ち、当たり所が悪かったのか、それ以来、目が見えなくなり記憶も無くなってしまったとの事です。近所の町医者やそこいらの漢方の医者で治せる病でも無く、長崎まで行って蘭方の医者に診てもらえば、ひょっとすると良くなるのでは？と言う人の声に、藁にも縋る思いで希望を持ったが、唯一の希望の長崎まで往復の旅費や治療費に一体いくら掛かるか見当もつかない。ざっくり数百両が必要なのでは無いかと言う人もいる。おセイ一人の針仕事では日々の生活が一杯一杯でとても妹を長崎まで連れて行き医者に見せて治療するのだけのお金は無

い。自分が苦界に身を沈めて金に換えようにもあの顔の傷ではおセイを買おうとする廓も無く、それで・・・」

「男勝りの運動能力を生かして闇に紛れて盗人稼業を始め、治療費を稼ぎ始めたということか・・・」

「はい。」

「それに関してはウチの手代を使^{つか}って調べさせましたが、この女の申すことは全て真実の様でおました。」

「その‘何とか小町’と云う妹も確かめたのか？」

興味深げに尋ねた。

「はい、秋芳の城下でも片手で数えられる程の美形でおました。」

「それにしても、猛^も者^きぞろいの我が道場の門弟に町人風情に袋叩きにされて、尻尾を巻いて逃げるような腑抜けが居るかの？」

大勢いる門弟の顔を全員覚えている訳では無いが、それに該当するような者が思いつかず首を傾げた。

「それにしても、気の毒な事であったの。早速その者らを探し出して連れてまいれ！」

玄斎の口にした「気の毒」という言葉が、自分の道場の門弟により傷つけられた娘への責任を感じて言ったのかと思い、二人は玄斎にしては殊勝な事を言うと思いに感じた。

願いは叶えられるべき

おシズを襲った下手人は、すぐに判明した。

犯人は、半次郎、杉作、太兵衛という三人の下士であった。

秋芳藩の制度で、武士は上士と下士に分けられている。

常在戦場を家訓とする秋芳藩では戦力として、少しでも多くの武士を抱えておきたい。

しかし現実問題、限りある藩の財力では余り多くの武士を抱える余裕は無い。そこで藩から扶持を支給する上士と苗字帯刀を許可し武士と同等の権限を持たせるが、扶持の支給は無く自給自足の生活をさせる下士に分けていたのだった。

武士として対等な身分と藩から保証されていたが、上士は下士の事を刀を持っただけの百姓と馬鹿にし、上士と下士の間では抜きがたい反目があった。

下士は自分達は秋芳藩の侍だと藩の権威を笠に着て百姓や町人には横暴に振舞うが、上士からは自分達が百姓や町人扱いされ、いつも悔しい思いを味合わされるのであった。

ところが、江戸時代も末期となり武士の生活も苦しくなると、逆に藩から扶持米を支給されず自由に金稼ぎ出来る下士の方が、金儲けの才覚のある下士の家では、上士よりも贅沢な暮らしを出来る様になり、益々上士の嫉みを買うことになっていた。

この三人も裕福な下士の家に育ち、何時も家の金を持ち出しては遊び惚けている放蕩息子達であった。

この様子を見かねた人から、秋芳藩の藩士なのだから武芸を納めなければいけないと煽てられ、赤坂道場に籍を置いていたのであった。

しかし、元々武芸などに全く興味は無く、道場に上がっても上士の門弟から苛められるだけであり、たまに、申し訳程度に稽古場に顔を出すことはあっても剣を極めようという気はサラサラ無く、何時も三人でつるんでは、武士の地位と権威を無頼に使い遊び暮らしていたのだった。

此処は恵比寿屋の豪壮な中庭。広い庭園の玉砂利を敷き詰めた一郭を幔幕で仕切り周囲の視線を遮った中に三人の放蕩者が引き据えられていた。

正面の床几に玄斎が腰を降ろし、厳しい目で身体を小さく丸め土下座する男達を見詰めていた。

男達は何故自分達が此処に呼び出されたのか薄々気付いており、自分達の犯した罪に対して玄斎からどのような罰を下されるのかとガタガタと震えながら、玄斎の顔を直視することも出来ず、地面に顔を擦り付けていた。

赤坂道場の看板に泥を塗った責任として、切腹を迫られたらと想像すると、自分で腹を切るだけの度胸などまるで無く、恐怖に竦み上がるのだった。

「連れてめーりやした・・・」

玄斎の背後の幔幕が揺れて幕の隙間から堅気には見えない男達が、のそっと顔を見せた。

男達は若い娘の手を引いて中に入って来た。

娘は目が見えない風で、手探りをしながら危なっかしい足取りで歩を進めていた。

これが牝泥棒の妹かと思った。

恵比寿屋は城下でも五本の指で数えられる位の美人と言っていたが、なるほど噂通りの美形であった。

品の良い瓜実顔に青みを帯びた白く透き通った艶のある肌を持ち、目が見えないためか焦点の定まらない黒目勝ちの瞳をくっきりと見開き、桃割れに結った顔は真に紺屋小町と称されるに相応しい。

小柄でほっそりとした身体は強く抱きしめれば折れてしまいそうな^{たお}嬬やかさであったが、逆に男心を憐る風情であった。

姉のおセイの方は、男の恰好をさせれば男役が務まりそうなほど^{いみな}鱗背な雰囲気を持っていたが、妹のおシズの方は正反対の娘盛りの華やかさを醸し出していた。

男達は玄斎の傍らに立つ惣右衛門に、「家の中を探したところ、あの牝泥棒め、ずいぶん稼ぎまわったらしく二百両近くのお金が在りやしたぜ・・・」と、ぼそっと耳元で告げ、娘を手渡して黙って幕の外に立ち去って行った。

男達は惣右衛門が表立って出来ない事を行う時に使役している裏稼業の男達であった。

玄斎はおシズに座るように言った。

目の見えない娘は、あぶなっかしい足取りで玄斎の傍に進み出て玉砂利の上に正座した。

「お前達！この娘を覚えておろう！」

雷の様に響く玄斎の声でわずかに顔を上げて盗み見る様にチラッと娘に目を向けた。

玄斎の前に正座している若い娘は、ひと月ほど前に未遂には終わったが自分達が暴行した娘である事を確認して、益々申し開きできないと観念した。

全身から血の気が失せ、玉砂利の上に頭を押し付けたまま、ブルブルと身体を震わせる三人の下士をジロリと見詰めて、

「相違無いな！」

と、念を押す様にたずねた。

顔面蒼白となり、声も上げることが出来ず、身体をブルブルと震わせて地面に頭を擦り付ける男達に、

「お前達も武士として・・・」

不良下士の男達は、次に「武士として潔く腹を切れ！」と宣告されるものと思い、喉の奥で声にならない悲鳴を上げた。

「・・・やろうとしたことをやり遂げられず、さぞ残念であつたろう・・・この娘に対して存分に思いを果たすが良い！」

男達は自分の耳にした言葉が暫く信じられず、自分の聞き間違いであつたのでは無いかと互

いに顔を見合わせ、次に顔を上げて玄斎の方を見た。

玄斎は厳めしい表情のまま、呆然と自分を見つめる男達に黙って肯いた。

この展開は信じられないものであったが、この後どうなろうと構うものかと、精神的に追い詰められた獣が自暴自棄を起こしたように、投げ与えられた餌に対して淫欲に濁った視線を向けた。

おシズにしても、この場の展開が信じられず、恐ろしい雰囲気には玄斎の前に正座していた膝を崩して逃げ出そうとした。

しかし、おシズが立ち上がって駆け出そうとする前に獣欲に狂った三人の男達はおシズの上に馬乗りになって押さえ付けた。

凄まじいおシズの悲鳴が上がった。

「おお！もう始まっておりましたか！」

篤馬が、全裸の身体を高手小手に縛り上げられた姉のおセイを引き立てて幔幕をくぐって入って来た。

おセイは石抱きの拷問で鋭く尖った算盤板の上に座らされ、重い石を膝の上に載せられるという責め苦を味合わされたため、脛が激しく傷付いており、自分では歩くことは出来ず、牢から此处まで篤馬に引き摺られるように連れてこられたのだった。

おセイは目の前で男達に組み敷かれている妹の姿を見止めて、自分の傷の痛みも忘れて悲鳴を上げた。

今やおシズの着物の帯は緩められ、左右から群がった手により振袖の着物が剥ぎ取られようとする所であった。

必死の抵抗をするおシズであったが、か弱い女の力では三人の暴漢の力には抗しきれず、まるで木の皮を剥ぎ取る様に次々と着物を剥ぎ取られて行った。

晴天の光の中でおシズの白い肌が露わとなってきた。

「アア！妹には何の罪も在りません！責めるならどうか私を責めて下さい！」

悲痛な叫び声を上げながらシズの方に這い寄ろうとするおセイを篤馬が後ろから地面に突き飛ばした。

そして、俯けざまに転がるおセイの上に馬乗りとなって押さえ付けた。

一方、下劣な下士達は歓声を上げて、おシズの最後に残った緋色の腰巻を剥ぎ取っていた。白いぷっくりとした尻が剥き出しとなった。

姉妹は僅か数尺の間を置いて全裸にひん剥かれた身体を男達に組み伏せられていた。

「おシズ！お前をこんな事に巻き込んでしまって、愚かなおねえちゃんを許して！」

後手に厳しく縛り上げられ、拷問による障害で身体も自由に動かすことが出来ない状態で屈強な篤馬に地面に押さえ付けられ、目の前で凌辱されるおシズをどうすることも出来ず悲痛な声で泣き叫んだ。

男達の暴行を受けながらも姉の声が届いたのか、

「おねえちゃん！助けて！」

と、姉の方を見詰め、必死に手を伸ばした。

「ほほう！お前の妹は目が見える様になったし、記憶も取り戻した様じゃの！」

この有様に感動して玄斎が床几から腰を浮かして大声を上げた。

「人の話に聞いたことがあるが、凄まじい恐怖を体験した人間は、その経験を思い出すことを恐れるあまり、記憶に蓋をしてしまい、恐ろしいものを見たくない一心から視覚も閉ざしてしまうことが在るそうじゃ！それが同じ体験を繰り返した事により心を塞いでいた蓋が外れたんじゃない！」

玉砂利の上に押さえ付けられる姉の方を見詰めて必死に助けを求める妹の様子に感心したように声を上げた。

そして、「こうして、儂らで妹の病を治してやったのだから、妹の為に貯めていた治療費を儂らで貰っても悪くは無いな！」

と、手も足も出せず篤馬に組み敷かれるおセイに向かってカラカラと笑った。

おシズから着ているものを全て剥ぎ取った杉作達は、必死に姉の方に伸ばしていた右手を掴んで、仰向けに身体をひっくり返した。

杉作と太兵衛が左右から手と足を掴んでおシズの身体を左右から押し広げた。

男達の目の前におシズの形の良い乳房も股間も露わとなり、薄い春草を通して柔らかな肉貝が透けて見えた。

開け広げられたおシズの股間の前に立つ半次郎のモノは着物上からも分かるほどいきり立っていた。

すっかり頭に血が上った半次郎は、着物の裾を開くと褌をもどかし気に取り去った。

半次郎の毛深い股間からは醜いモノがそそり立ち、何かに期待するように鈴口からは先走りの水が滲み出ていた。

篤馬に押さえ付けられて身動き出来ないおセイの口から絶望的な声が上がった。

きつい処女の媚孔に半次郎は無理やり自分の肉塊を埋め込んで行った。

股間から突き上げる激痛におシズが身を揉んで悲鳴を上げた。

そんなおシズの様子を気にすることも無く、いやそんな哀れな女の姿に刺激されたように腰に力を含めるとメリメリと狭い肉洞に己の分身を埋めて行った。

自分は結婚することを諦め、妹の幸せだけを願って来たおセイは、男達の蹂躪されるおシズの姿を見てハラハラと涙を流した。

妹の幸せだけを願っていたのに、妹をこのような地獄に堕としてしまった罪悪感と絶望感でおセイの身体から力が抜け落ちて行った。

抵抗する気力も喪失し、ぐったりとうつ伏せに横たわるおセイの両足を掴むと思いつき左右に押し広げた。

篤馬の目に拷問により痛々しく傷付いた秘裂が露わとなったが、最早おセイには羞恥を感じる心も失われている様であった。

力無く横たわるおセイの上に篤馬が身体を重ねて行った。

これまで経験した事の無い激痛が股間から込み上げて来て、思わずおセイの口から呻き声が上がった。

「やはり、思った通りお前も処女であったな・・・」

おセイを背後から串刺しにしながら嬉しそうに声を上げた。

未通の肉穴を篤馬の硬直したもので抉られる激痛は激しいものであったが、おセイの意識は暴漢達から代わる代わる襲われる妹の方に集中しており、目と鼻の先に居ながらも助けてやれぬ悔しさに咽び泣いていた。

「姉と妹が同時に処女を失うとは面白い見物じゃ」

暴漢達から突き立てられるおシズと篤馬に責め立てられるおセイの姿を見詰めながら玄斎が笑い声を上げた。

三人の男達は持ち場を交代しながら噂に違わぬ美女を突き立て、左右から乳房や柔肌を揉み上げ、形の良い唇を奪った。

最早、杉作達には道場主の目の前という畏れも忘れ果て、込み上がる肉欲に酔い痴れ、欲望の赴くままに若い美女の身体を食った。

絶えることの無い男達の暴虐の前におシズは悲鳴を上げることも忘れ、虚ろな目を見開いて虚空を見詰めていた。

つい先ほどまで男を知らなかった華洞に疲れを知らない若者の肉塊が猛烈な勢いで出入り

していた。

その激しい腰の動きに破瓜の血や男達が膣内に撒き散らしたおびただしい粘液やらが入り混じって掻き出されていた。

目の前で妹が犯される様子を目撃させられた精神的衝撃か、自失状態にあるおセイの筋肉が弛緩して来たことを、腰を突き立てながら感じていた。

篤馬は下に組み敷いていたおセイの上体を掴んで引き起こすと、胡坐に座った自らの下腹におセイの尻を載せ上げようとした。

おセイの処女の血に塗れた逞しい肉茎が隆々と天に向かって突き立っていた。

無駄肉の無い小柄なおセイの身体を篤馬の膂力で軽々と抱え上げ、双臀を支える両手で左右に押し広げ、白い肉の谷間に恥じ入る様に咲いた小菊を露わにした。

前の穴と後ろの穴は一つの筋肉で結ばれており、前の穴が弛緩すれば後ろの穴も弛緩するものだと、薄っすらと開いた蕾の中心を見て思った。

そして、何かを期待するように先端から先走りの水を染み出させる怒張の先端にその部分をあてがった。

完全に精神的に打ちのめされていたおセイは今の自分の状態も、そして、次に襲い来る事態も分からないのか、虚ろな目で暴行を受ける妹の方を見やっていた。

呆然自失状態のおセイの様子を確認した篤馬は次の瞬間、両尻を持ち上げていた両手を逆に下に向かって突き下ろした。

まるで杉板に釘が吸い込まれるように、おちょぼ口を開いていた小菊の中に篤馬の巨大なモノが吸い込まれて行った。

突然背後から襲い来た激痛におセイの目が裏返った。

これまで経験した事の無い激しい苦痛に、おセイは身体を中心に杭を突き通されたように上体はピンと硬直し、ただ顔だけを苦し気に振り立てた。

激痛にヒイヒイと悶えるおセイの股間から何やら温かいものがこぼれ始めた。

「おやおや！この女よがり過ぎて小便まで流し始めたぞ！」

おセイを背後から串刺しにしながら嬉しそうに声を発した。

一度流し始めたモノは次第にその勢いを増して、胡坐に座る篤馬の上に開股で結合する押し広げられた秘奥から一条の水流となってあふれ出していた。

おセイの良く絞まった尻肉を突き立てながら、自分の脛を濡らす温かい小水に気持ち良さそ

うに笑い声を上げていた。

三人の若者から絶え間なく暴行を受け続け涙も涸れ果ててしまった町娘と、篤馬に前と後ろの処女を奪われてしまい肛虐の苦しさに呻吟する姉の姿を肴に惣右衛門と酒を酌み交わしながら玄斎が嬉しそうに笑い声を上げていた。

豪壮な庭園には、男達の狼藉を受けながら、啜り泣く姉妹の声が何時までも流れていた。

稲葉屋

「そうか？稲葉屋さんもこの十年というものの女手一つで店を守って来たが、^{とうとう}到頭どないもならんようになったか・・・」

手代の報告を受けて喜色を浮かべる惣右衛門に、「どうした、恵比寿屋？バカに機嫌が良いでは無いか・・・」と玄斎が問い掛けた。

「いえね、玄斎様も覚えてらしゃるかどうかですが、十年ほど前に辻斬りに見せかけて稲葉屋の主人と息子を切り殺して貰ったことが在りましたな・・・」

「ふむ、お主の店が藩の御用商人仲間に加えられることに最後まで反対していたと云う男じゃな・・・」

「その稲葉屋が大国柱を失った後も、稼業は衰退しながらも、何とか末亡人が女手一つで切り盛りして来たのでおますが、とうとうニッチもサッチも行かんようになったって事ですわ。」

玄斎もかつて自分が主人を暗殺した店がいよいよ潰れるという話を聞いて、どう返事したら良いか判断に苦しみ口をつぐんだ。

「借金の踏み倒しですわ・・・」

「借金の踏み倒し？」

「薩摩でも尾張様でも何処でもやっている事でおます・・・藩の御用商人は皆、藩に莫大な金を貸しておます。当藩はこれまで義理堅く貸したお金は期日には返してもらっていましたが、まあそれも、他所から新しく借金をして来て古い借金を返済するというやり方の繰り返しでおましたが、その間に借金の額は雪ダルマの様に膨らみ、何時までもそんなやり方が使える訳も無く、更に打ち続く飢饉（天保の大飢饉）の被害は甚大で百姓も大勢飢え死にして、その影響

はいまだ続いており、年貢も減り続け藩の懐も空っぽになり、無い袖は振れず、とうとう踏み倒しに入ってしまったことすわ・・・」

「恵比寿屋、お主の所も藩に莫大な金を貸し付けておったのでは無いか？大損では無いか？」
惣右衛門の莫大な財力を悪事の原因に頼っていた玄斎が心配そうに尋ねた。

「実は、借金を踏み倒す様に藩の重役に入れ知恵したのはワテですわ。」

この事態が嬉しくてならないのか、顔を崩した。

「？・・・」

玄斎には惣右衛門の真意が分かり兼ねてジッと目を見詰めた。

「『損して得取れ』言う事ですわ・・・お侍とは単純なもので、現実には目の前にある金しか金や
思いません。百俵の米は何時まで経っても百俵の米のままで、百両の金は何時までも百両の
金としか思っていまへん。目先をちょっと変えれば金の元になるモノは藩内にゴロゴロ在る
ちゅうのに分かりません。一両で仕入れた物を十両で売ったり百両で売ったりするのが、わ
てら商人でおます。要は今値打ちの無い物でも将来値打ちが出るかどうかの目利きでおます。
借金棒引きの片にそれらの利権を頂いたという事でおますわ。今日千両損しても明日に二千
両と成れば大儲けでおます。目端の利く商人なら誰でもやっている事でおます。それが女の
浅知恵というやつで、お侍と同じような考えでいるから借金棒引きの被害をまともに食らっ
たという事でおますわ。」

ゲラゲラと笑いながら説明する惣右衛門を見ながら、この男は自分の利益拡大と藩内におけ
る存在感の拡大と宿敵の稲葉屋を潰すために策略したのだと判り、一挙何得も狙う商才の逞
しさと悪知恵に舌を巻くのであった。

恐らく、藩による借金踏み倒しを入れ知恵する前に、密かに利権漁りを準備していたのであ
ろう。そして、借金踏み倒しに負い目を感じる藩の重役も今後ますます恵比寿屋には頭が上
がらないようになり、恵比寿屋の求めるままに便宜を強いられる事だろうと予想した。

かつて藩一番の御用商人であった稲葉屋を蹴倒して急成長し、今や藩内では並ぶ者の居ない
地位に登りつめたが、今後益々その力は強くなって行くように想われた。

「もうすぐ、稲葉屋の女将が娘を連れて、これからの^{なりふ}形振りについて相談するため、此処に
やって来ることになってます。面白いでっから、玄斎様も柏木様も立ち会われてはどうでっ
か？」

惣右衛門が以前から稲葉屋の内儀に心を惹かれていたことは、惣右衛門の言葉の端々から知

っていた。この大悪党が稲葉屋の未亡人に対してどのような悪辣な企みを抱いているのかと想像した。

恵比寿屋の客間に稲葉屋の女将のお藤と、玄斎の凶刃に夫共々息子を切り殺されて、たった一人の子供となってしまったお福が腰を降ろしていた。

稲葉屋の母娘の前には惣右衛門がでっぷりとした身体を落とし、その背後には玄斎と篤馬が控えていた。

篤馬は惣右衛門に相對して座る母子を觀察していた。

母親のお藤は四十に手が届きそうな大年増であり、でっぷりと肥満して頬や顎や首筋にもたっぷり脂肪を貯めていた。顔は肥満して丸みを帯びているが若い頃はさぞかし美人であったのだらうと思わせる片鱗は随所に残っていた、今でも同じ年の女と並べればその美貌は際立っていると言えるだろう。そして栄養豊富な食生活で豊かに置いた脂肪は年とも思えね艶々としたきめ細かい肌の白さと柔らかさを形成していた。

一方娘の方は二十歳前後であろうか。今娘盛りを迎えようとするかのように華やいだ雰囲気を出していた。これまで大金持ちの娘として何不自由無く甘やかされて育って来たのか、綺麗に結い上げられた島田髪には色とりどりの簪を刺し、男達を目線を跳ね返すようなツンと澄ました貌には小生意気そうな表情が滲み出ている。

今、姉のおセイと共に牢に閉じ込められて仮借ない肉体改造に悲鳴を上げている紺屋小町と異名を取ったおシズと同じような年ごろに見え、容貌も決しておシズに劣る事はないが、万事控えめで内気な姿を見せるおシズと対照的に、何でも自分が一番と割って入りそうな驕慢さが窺えた。

「それでは、今月末の支払いが八百両、来月末が千両、その翌月が六百両でおましたな？宜しおま、その借財全てウチで肩代わりさせていただきます・・・」

畏まる母娘の前にして惣右衛門が告げた。

途端に不安げな表情を浮かべていた母子の顔がパッと明るくなった。

「有難うございます！これで何代も続いた稲葉屋の暖簾を降ろさずに済みます！」

死んだ主人が恵比寿屋の事を蛇蝎の様に嫌っていたことは、もちろん稲葉屋の母娘は知っていた。そして、主人と息子の非業の死に関しても惣右衛門が絡んでいたのではないかと薄々感じていたのだった。

お藤もお福も亡き主人の意志を継ぐように、これまで恵比寿屋を毛嫌いし、街で出会っても
プィとそっぽを向くように、事ある毎に敵対を続けて来たものではあったが、今回の藩の借金
踏み倒しにより、稲葉屋の経営は一気に悪化し、あちこちに金策に走ったが、傾いた稲葉屋
を支援する者は現れず、最後に藁にも縋る思いで恵比寿屋を頼ったのであった。

自分の夫の暗殺に関与した男では一と疑う惣右衛門に頭を下げることは屈辱以外の何物で
も無かったが、店とこれまで尽くしてくれた従業員を守るためには致し方が無いと歯を食い
しばるのであった。

「あんたらもご主人を失って十年もの間女手一つで良^{よう}やって来はったけど、流石にお疲れで
すやろ？」

夫に代わって店の切り盛りを必死に続けた揚げ句、藩の借金踏み倒しに遭い、苦しく当の無
い金策に走り回って疲れを浮かべるお藤の貌を繁々と見詰めながら口にした。

「これから時代は益々難しくなって来ます。ここは腕利きの大番頭はんに店の運営を任せて
樂をしはったら良いのではおまへんか？」

ガマガエルのような醜い顔の奥の方で濁った目を光らせながら、惣右衛門の言葉に息を吞まれ
たような表情の母娘を交互に見詰めながら言葉を継いだ。

「大番頭はんとは、既に話は通しておます。お二人がこれから気楽に遊んで暮らす所も用意
させていただきました・・・」

惣右衛門の言葉に不安が込み上げて来たお藤が、「まだ店の経営から手を引く訳には・・・」と
言いかけたが、その言葉を断ち切る様に、「そうですか？それならこの融資の話は無かった事
にさせてもらいまひょ・・・あんたらも何代も続いた店を畳んで、従業員を路頭に迷わすの
は辛^{つら}ろおますやろ？」

これまで長年に渡って店の為に働いてくれていた人達の顔が目に見え来て、反論を封じ
られた。

結局、恵比寿屋が稲葉屋を呑み込み、自分を妾にすることが今回の支援申し出の狙いで在っ
たのでは無いかと気付いたが、これまで必死に働いてくれた店の者を路頭に迷わすのは忍び
ず、頭を下げて唇を噛み締めるしか無かった。

これまで街で惣右衛門とすれ違った時など、適当な挨拶の言葉を口にしながらも、ねっとり
と濁った眼で着衣の上から裸体を覗き見るような不気味な視線にゾッとするものを感じた
ものであるが、いよいよ切羽詰まった状態に追い詰められたと思うと死んでも死にきれない
思いに駆られるのであった。

「今日は暑おますな。アンタらもそんな御大層な着物を着ていたら暑おますやろ？少し脱がはったらどうだす・・・」

と、手で顔を扇ぐ仕草をしながらねっとりとした目で二人に言葉を掛けた。

自分達を裸に剥こうとする惣右衛門の下劣な本性を知って、母子は憤怒の表情を浮かべた。惣右衛門の女好きは城下で知らぬ者は無かった。遊女でも店の女中でも女と見れば手あたり次第手を付けるとの噂は耳にしていた。

稲葉屋の暖簾を守るためとはいえ、惣右衛門を頼ったのは浅はかであったのでは？と、自分を責めた。

「さあさ、稲葉屋を生かすも殺すもアンタらの心がけ次第や・・・」

お藤とお福に怒りの視線を向けられても、気にするそぶりを見せず、二人の泣き所を突いた。結局、誰も稲葉屋を支援しようとする者は現れず、店を守るためにはこの憎むべき男に頼るしかないのでは無いかと悲壮な覚悟をするのだった。

しかし、この後、お藤の予想は甘すぎた事をその身を以て思い知らされるのであった。惣右衛門の求める愛人関係とは世間の旦那と妾の関係とは遥かにかけ離れたものであることを二人は知る由も無かった。

「分りました・・・お藤をお好きにしてください・・・」

と、呻くように口にするとスッと立ち上がって、帯締めに指を掛けた。

「おっかさん！」思いつめたお藤の様子にお福が声を上げた。

狼狽えるお福を諭す様に視線を送った。

キュウキュウと衣擦れの音をさせて帯を緩め、ポトリと豪奢な帯が蜷局を巻いて足元に落下した。

高価な留袖を身体に固定していた何本もの紐が解かれ、薄っすらと開いた着物の間から清楚な長襦袢が露出した。

淡い上品な色をした留袖を止めていた全ての紐が解かれ、崩れた縮緬地の着物が滑るように肩から流れ落ちた。

男達は淡い黄檗色（きはだいろ）の長襦袢姿となったお藤の身体を繁々と見詰めた。

でっぷりと脂肪を載せたふくよかな体つきが長襦袢越しに現れ、劣情の籠った視線を身にうけ、羞恥に思わず両手で胸を掻き抱いた。

惣右衛門は長年横恋慕して来たお藤の長襦袢姿に満足気な表情を浮かべると、次にお福の方

に顔を向け、「さあ、お福ちゃんも早よ脱がんかいな。」と、勝ち誇った様な笑みを浮かべて声を掛けた。

自分だけでなく、娘まで裸にしようとする惣右衛門に抗議するように、「お願いします！娘はお許してください！」と、顔色を変えて必死に哀願した。

この悪辣な男が稲葉屋の救済を申し出るには何か下心が有る事は感じていた。それでも長年勤めて貰った店の者を守るためには、この身を犠牲にしても構わない決意でここにやって来たのだった。恵比寿屋から娘のお福も同行するよう言われて、その通り娘を同行させたのは店の為に娘も犠牲にする心積もりが在ったのでは無いかと自分に問うた。

これまで何不自由無く我儘に育てて来た娘に店の為、犠牲になる心積もりが在るかとお福の方をちらりと見た。

「あかん！あかん！お藤さんだけやったら今月末の支払いは四百両で来月は五百両や・・・」と、サラリと言ったのけた。

今月末に八百両、来月に千両の金を調達できなければ、店は潰れることを知っているお福は泣きっ面に顔を歪めて立ち上がった。

そして、啜り泣きしながら母親と同じように帯留めを解き始めた。

若い娘向きの華やいだ金地の帯が解かれ、豪奢に染め上げられた華やかな振袖が脱ぎ捨てられた。

後には緋色の長襦袢だけとなり、若い身体の線を示していた。

惣右衛門は母子の下着姿を高貴な宝物を見るような目で眺め続けた。

「さて、アンタラが何千両も出すだけの身体をしているか隅々まで見せてもいまひょか・・・」淫猥な目つきで長襦袢姿のまま羞恥に頬を染める母娘をジロリと見詰めた。

「ああ、お許してください！」

惣右衛門の淫靡な魂胆を知って、二人は互いに抱き合う様に恐怖と羞恥に身体を寄せ合った。それ以上身体を晒そうとしない二人に業を煮やした様に、玄斎と篤馬が黒々とした不気味な色に変色した麻縄を扱きながら二人に近寄った。

それは、これまで志乃やおセイ達囚われの女を散々責め罵り女の汗と淫液を吸い尽くした麻縄であった。

哀れな母娘は悲鳴を上げ必死に抵抗を試みたが、豪力の父子は易々と二人を後手に縛り上げてしまった。

後手に縛って余った縄が胸の前に掛けられ、長襦袢の上から上下に乳房を縊り上げ、母娘の

胸の発達の違いを強調していた。

「さて、此处であんまり大きな声を出されると店の者にも聞かれて体裁が悪いよってに、お二人にはワテが用意した別宅にご案内しますよって、其処ならいくら大きな声を出してもろてもかめしまへん。」

母娘を高手小手に縛り上げた縄尻を握った玄斎と篤馬が縄を引き絞って二人を立ち上がらせた。

惣右衛門が母娘に歩行を促す様に長襦袢の上から二人の尻をゾロリと撫で上げた。

気味の悪い掌の感触に悲鳴が上がった。

玄斎と篤馬に縄尻を取られて、二人は恵比寿屋の豪勢な庭に連れ出された。

中ノ島を浮かべた大きな池畔を歩む淡い黄色と艶やかな緋色の長襦袢姿が水面に反射し、池に咲く花の様な典雅な姿を映し出していた。

「此处がこれからのお二人の新居でおます。此处なら、いくら大声を上げててもろても泣き叫んでもろてもかめしまへん。既に仰山^{ぎょうさん}お仲間が居てはりますさかい、淋しいことはおまへんやろ・・・」

惣右衛門が文字通り満面に恵比寿顔を浮かべて、秘密の蔵の扉を押し開いた。

扉を全開にして内部の様子を晒す不気味な蔵の佇まいに、お藤とお福は恐怖に顔を見合わせた。

店を守るためこの身を投げ出すことも仕方ないと半ば悲壮な決意をしてやって来た母娘ではあったが、この強欲な男が求めているものは世間一般の妾と旦那の関係とは違うものだということがだんだん判り始め、言いようの無い恐怖が込み上げて来て膝がガクガクと震えた。

「さあ、入るんだ」玄斎と篤馬が怯えて立ちすくむ二人の肩をグイと押して、中に押し入れた。

背後で惣右衛門が扉を閉めて施錠した。

不気味な気配を醸し出す蔵の板敷きの上に母娘は怯えた表情で 跪^{ひざまず} いていた。

「ここなら誰も邪魔に入りません。ほな、早速お体を見せて貰いまひよか！」

惣右衛門が顔を劣情に歪めながら笑い声を上げた。

「うむ、お主が二十何年に渡って恋焦がれていた女の裸と、いよいよご対面という事じゃな！」

女性の好みにおいて惣右衛門と共通する玄斎が顎を撫でながら薄笑いを浮かべた。

「恵比寿屋はこの様に肥満した大年増が好きなのか？」

恐怖に身を小さくして蹲る二人の女を取り巻ながら、篤馬が呆れたような声を出した。

篤馬の関心はでっぴりと太ったお藤より若いお福の方にあり、顔を伏せて啜り泣くお福を無遠慮に見詰めていた。

「若い篤馬様には分かりませんが、この年になると若いプリプリした肌だけやのうて、年季を積んだ柔らかい練れた肌も良くなるもんでっせ・・・なあ、玄斎様？」

玄斎に同意を求める様に尋ねた。

玄斎も満更でない顔つきで肯いた。

「この二人はワテが段取りしたんでおまっさかいに、ワテが最初に頂きませ。」

今にも二人に襲い掛かりそうに劣情を剥き出しにした悪党親子に釘を刺した。

「うむ、良かろう・・・」

流石の玄斎も惣右衛門の言葉に同意するしかなかった。

「ほな、その大事なお身体を検めさせてもらいまひよか・・・」

劣情に声を掠れさせながらお藤に迫った。

淫靡な炎を目に溜めながら劣意剥き出しで迫る惣右衛門にお藤は恐怖に悲鳴を喉を詰まらせ後ずさった。

惣右衛門に協力するように玄斎が後ずさりして距離を取ろうとするお藤の身体を背後から抱きしめた。

そして長襦袢を止めていた紐を緩めた。

ヒィヒィと短い悲鳴を上げて悶えるお藤の身体から何とも言えぬ熟れた女の体臭が立ち昇って来た。

惣右衛門が下着の襟を掴んで、肌襦袢ごと左右に押し開いた。

縄目により縊り上げられていた白い二つの大きな乳房がこぼれ落ちた。

「おおー！想像してた通り大きな乳や！」

露出した大きな乳房に感激の声を発した。

「うーん！柔らかくてまるで糯の様や！」

薄気味悪い手で鷺掴みにされ、嫌悪に顔を顰めるのも構わず、その柔らかな感触を楽しむように撫でまわした。

「この歳になってもシミ一つない雪の様に白い肌や！それにねっとりと柔らかくて指に吸い付く様や！」

夢中になってお藤の両の乳房を揉みしだきながら感激した声を上げた。

そして、両の乳房を掴み上げ絞り立てて乳首を剥き出しにすると、まるで子供の様に野苺のような乳首に舌を這わせ、口に含んで音を立てて吸い上げたりした。

惣右衛門のざらつく舌の感触にキッと口を結んで耐えるお藤の姿が在った。

「ああ・・・おっかさん・・・」

野卑な男から蹂躪される母の姿をお藤が不安げに見守った。

暫く豊満な乳房を楽しんで満足した惣右衛門は、お藤の背後に回ると、正座するお藤の背を思い切り蹴飛ばした。

堪らず、お藤は尻を高く擡げたまま顔面から床に倒れ込んだ。

横に倒れ込まない様に腰を支えた惣右衛門は長襦袢の裾を掴むと腰巻ごと思い切り捲り上げて尻を丸出しにした。

存在感の在る柔らかな大きな尻肉と柱の様に太い大腿が惣右衛門の目に映った。その姿形に何故か餅つきの臼を連想した。

ムッチリと肉を置いた大腿の透き通る様に白い肌の下には赤や青の血管が透けて見えていた。

惣右衛門は自分の前に曝け出された女体の宮殿の有様を繁々と観察していた。

自分の羞恥の中心部を男の目に晒す屈辱に、顔面を床に打った痛みも忘れて羞恥に悲鳴を上げた。

「どや？ 旦那を亡くして十年間の寂しい思いをしていた所や・・・」

たっぷりと肉を置いた白い双臀を撫でまわしながら、興奮に息を弾ませた。

惣右衛門のいやらしい掌で尻を撫でまわされる気味の悪い感触にイヤイヤと身体を震わせた。

必死に閉じ合わせた大腿の間から黒い痴毛がのぞいていた。それは真っ白い雪原に顔を出す春を待ちわびる草の様に映っていた。

お藤の下はさほど毛深い方では無く、かといって薄い方でも無く、^{かなた}容良く繁茂していた。これも惣右衛門の好みに合致していた。

中には毛深く肛門の周りまでびっしりと剛毛を生やしている女もいるが、一時的に欲情をそそる景色ではあるが、長く愛するには味消しになってしまう。そんな時には綺麗さっぱりと剃り上げてしまうのだった。

お藤の厚い臀肉を思い切り左右に押し開くと、歳の割の色素の沈着の無い白い会陰が出現した。

イヤらしい男の手により尻肉を搔き拵られヒィ！と悲鳴が上がった。

羞恥に顔を赤く染めブルブルと腰を震わすのも構わず、惣右衛門はその部分の検分に夢中であつた。

毛深い体質ではなく、淫裂の左右の柔らかな媚肉にその部分を修飾するように慎ましやかに陰毛が群生するだけで、肛門の周りには痴毛の密生は無く、薄紫の清楚な花の蕾が白い窪地の中心でひっそりと花を咲かせているように見えた。

「十年もの間じっと我慢してたんかいな？」

何時の間にか指先で固く閉じられた秘裂の上を撫でられ、ヒッと悲鳴を上げた。

「この熟れた身体や、我慢しよ思ても我慢なんか出来へんだやろ？」

夫の死後じっと堪えて来た女の本能をこの男の指先は掘り起こそうとしているのでは無いかと恐怖を覚え頭を激しく振った。

実際、女扱いに慣れた惣右衛門の指先は的確に女の泣き所を攻め続けた。

惣右衛門の弄^{もよぶ}る指先で固く閉ざされていた雌肉がジワジワと熱を帯び湿り気を帯びて来るように感じた。

お藤の身体の変化に気を良くした惣右衛門は指先の攻めを一層激しくした。

「夜な夜な胡瓜や茄なんぞ使こうて自分で慰めとったんと違うかいな？」

「ああ・・・違います・・・」惣右衛門の指による悪さを受けながら喘ぐように答えた。

実際、お藤は夫の死後貞節を守り通し、自慰の経験も無く、ましてや男と交わったことなど無かった。

その硬く守り通して来た女の信念が今惣右衛門の手技により揺らごうとしているのでは無いかと恐怖にも似たものを感じるのであった。

お藤の秘肉の両側に指を掛けた惣右衛門は女陰の肉襞を思い切り左右に押し広げた。

十年間封じ込めて来た女の証が扉を破られ外気に触れるのを感じて引き裂けるような悲鳴を上げた。

取り巻く男達は剥き出しとなった鮮やかな紅色を帯びた雌穴を覗き込んで感嘆の声を発した。

「ほらほら、お福ちゃんも見てみい。ここが二十年前にお福ちゃんが潜り抜けた穴やで！」

惣右衛門は高手小手に縛り上げられたまま傍で啜り泣きしていたお福の島田に結った髪を掴むと剥き出しにした母親の股間を覗き込ませ、勝ち誇ったように高笑いした。

「アアッ！お許してください！」

お藤の喉から絞り出すような悲鳴が上がった。

散々会陰の周りを刺激して忘れていた肉の記憶を思い出させていた憎むべき男の指先がズブリと内奥に突き立てた瞬間であった。

「ああー、^{ええー}良い気持ちや！温かくって柔らかくてじっとり湿ってて・・・おや？何やらえ一句いがしてきましたで・・・」

中指を根元まで突き立てせかせかとその熟れた内部を掻きまわしながら、年増女の極上の内部を堪能していた。

歯を噛み締め堪えようとしても腰はブルブルと震え出し、巧妙な惣右衛門の手技により忘れていた女の喜びを引きずり出されようとしていた。

「ほら！見てみい・・・死んだ旦那のモンとどっちが大きい。」

惣右衛門がトネリコの木を削って作った張型を苦悶するお藤の目の前に突き出した。

惣右衛門の狼藉に対する憤怒と屈辱感で顔を真っ赤にして堪えていたお藤であったが、鼻先に突き付けられた男性自身を巧妙に模した禍々しい薄黄色の筒具を見詰めると、最前からの巧みな手技により、自分でも気づかぬ内に掻き上げられ始めた、とうの昔に忘れていた肉の喜びを無理やり目覚めさせられそうな恐怖を覚えてゾクッと身体を硬直させた。

これまで残忍な男達の手により囚われの女達の無念とそして歓喜の雌汁を幾度も吸って来て不気味にまだら模様に変色した淫具は淫靡な妖しさを醸し出していた。

惣右衛門により掻き立てられた女の淫情はそれを求めている事に気付いていた。しかし、娘の前で良妻にして賢母としての模範を示さねばならぬ理性が必死に女の本能を押さえ付けていた。

お藤の目に淫具を見せつけながら、惣右衛門はこれをその部分に咥え込ませれば、この女はこれまで押さえ付けて来た欲情の全てを曝け出すと確信していた。

「ほたら、行くでえ・・・」

惣右衛門の指によりじっとりと湿ったその入り口に責め具の先端を押し当てた。

「アアーッ！お許してください！」

それを身に受け入れたら浅ましい女のサガを露わにしようとする恐怖を覚えたお藤が泣き

叫ぶように声を発した。

「何がお許しくださいや・・ワテは長年孤閨を託^{かこ}って来たアンタをお慰めしよ言うだけや・・」
惣右衛門が握り締めた筒具に力を込めた。

トネリコの棒は鮮やかな色に染まった媚肉を左右に押し開いてズブズブと内部に納まって行った。

「おお！入って行きよる！入って行きよるで！」

お藤のその部分の甘美な抵抗を楽しむようにジワジワと挿入を続けた。

ああ、ああ・・と低い呻き声を上げながら、長年の封印を破って押し入って来た淫具の感触に後ろ手に縛られた掌を開けたり閉じたりを繰り返しておぞましい感覚に耐えた。

屈辱と羞恥と新たに体の奥深くから込み上げて来た感覚に興奮してお藤の身体は赤く染まり、熱く熱を発して全身がびしょりと汗ばんでいた。

長い責め具を緩やかに突き立てていたが、先端が何かに当たり最奥まで達した事を感じた。手を離すと、その部分からまるで鬼の角の様にトネリコの棒が突き出し、一方の端が羞恥にフルフルと震えていた。

「見てみい！お前の所^{ところ}の母^{かか}様はこんな太い播粉木を見事腹の中にしまい込みよったで！」
と、淫具を股間深く突き立てられた母親の姿を娘に見せつけた。

「ああーっ！いやー！」

これまで女の鑑として尊敬の目で見っていた母親の無残な姿を見せつけられ号泣し始めた。

「さて、このまま突き立てたままでは埒が開かな・・今掻きまわしてやるからな！」
淫具を秘裂に突き立てられモジモジと身悶えるお藤に嬉しそうに声を掛けた。

そして責め棒の端を握り締めると緩やかに操作を始めた。

「ああ、お許しください・・お許しください」

熟れた柔肉にそれを埋め込まれてゆるゆると動かす卓越した惣右衛門の技巧に堪え切れない様に啜り泣いた。

お藤の哀願の言葉は今まさに降伏しようとする女の呻きと気付いている惣右衛門は媚肉の感触を確かめる様に時には浅く時には深く攻め手を早くしたり遅くしたり自在に突き立てた。

その間に固く鎖されていた女の城門は次々と敗れ去り、崩れ落ちて開いて行くのを感じ取っていた。

長年の思いを遂げたという興奮で額に汗を浮かべて筒具を出し入れしていたが、お藤の漏ら

す涕泣に次第に甘い啜り泣きの声が混じって行くのに気付いていた。

あれは二十年以上前この地に流れて来て、右も左も分からない頃、偶然街で仲睦まじげに連れ添って歩く稲葉屋の主人とその妻の姿を目にして、何と美しい女だろうとウツトリと見詰め、この様に美しい女を妻とする稲葉屋の主人に暗い嫉妬心を覚えたものであった。それ以来稲葉屋の女将であるお藤の事を恋慕し何時か自分の物とすることを夢に見続けて来たのであった。

惣右衛門が娼婦や店の女を抱くことがあっても妻を娶らなかったのは、常にこの稲葉屋の女将の姿が心の中でチラついていたかも知れない。

その女が今や自分の繰り出す責め具の前に女の本能を剥き出しにして啜り泣いているのかと思うと、長年に渡って自分の心を独占し苦しめて来た女に対して復讐を果たしているような痺れるような快感を覚えるのであった。

「どや？^{えー}良いやろ？^{ええ}良い^{ゆー}言ってみい」

惣右衛門の操作する責め具を咥え込んだ肉の狭間からジワジワと樹液が滲み出て来るのを見詰めながら声を掛けた。

今や苦痛とも快感とも知れぬ激しい激情に突き動かされ眉根を苦し気に顰め啜り泣くだけであった。

その狂おしく股間から込み上げる淫靡な刺激は夫を失って以来封印して来た肉の記憶を蘇らせるものであった。

今やお藤の女の祠から湧き出る泉は夥しい量となっており、責め具を操作する惣右衛門の目を見張らせた。

筒具を深く食い込ませ引き上げる動作を繰り返す度にジュボジュボと恥ずかしい音を響かせていた。

母親の乱れる様を見せつけるように篤馬がお福の首根っこを掴むと顔をお藤の股間の間近に引き寄せた。

淫らな女の生態を曝け出す母親に貞淑な母親としての虚像を打ち碎かれ、イヤー！イヤー！と悲痛な声を上げて泣き叫んだ。

お藤はそんな娘の悲鳴のような声も聞こえないのか、迫り来る快感の津波に襲いたてられ

「もう・・・もう・・・」と^{うわごと}譫言の様に呟いていた。

淫具で攻め続ける惣右衛門は、お藤の切羽詰まった状況を淫靡な目で見詰めながら、「もうイキそうかいな？そやけどまだイッたらいかんで」と、口の端を歪めながら告げた。

「イク時はワテのを其処に咥え込んでイクんや！言うとかくけどワテのはこんな棒切れよりずっと太いで！」と、着物の裾を捲り上げ興奮して硬く屹立したモノをお藤の目に見せつけた。

お藤は自分に止めを刺すことになる醜い肉塊を熱に潤んだ目でじっと見つめた。

惣右衛門はお藤を後手に縛っていた縄を解いた。

自分を縛めていた麻縄が解かれても既にお藤には劣意に燃える男に抗う気力も体力も残されていなかった。ぐったりと横たわるお藤から、せかせかと長襦袢を脱がし肌襦袢と腰巻を剥ぎ取った。

そこには足袋一枚を残し雪白の全裸像を晒すお藤の姿があった。

男達は床に布団を敷き、その上に最後の一線で寸止めされたお藤の裸身を載せ上げた。

既に劣情に煽られ興奮の極みにあった惣右衛門は、身に着けた衣類を脱ぎ取るのももどかしく素っ裸になると、布団の上に仰臥するお藤の両足首を掴んで思い切り左右に押し開いた。お藤の股間を大開きにさせたまま、惣右衛門は夫以外目にした事の無いはずの秘園に顔を近付け間近から検分した。

先程まで淫具に責め立てられていた肉の祠はまだぽっかりと口を開けたままで、生々しい鮮紅色の内部を示していた。

絶頂を迎える寸前にその肉洞を占拠していた甘美な棒を引き上げられたため、熟れた女体はそれを恨むようにパクパクと入口の筋肉を痙攣させ、閉じることを忘れた秘孔からはドロドロと粘い樹液を溢れさせ濃厚な雌の匂いを立ち上らせていた。

惣右衛門は魅せられたように股間に顔を寄せると、鼻腔一杯熟女の臭いを吸い込み、舌を伸ばしてピリピリと舌尖を刺激する愛液を絡め取った。

すっかり頭に血が上った惣右衛門は最早我慢できず、極限まで膨張したモノを薄っすらと開口する秘孔に押し当てそのままズブズブと腰を降ろして行った。

二十年間の思いが結実する瞬間であった。

最早どうすることも出来ないと悟ったお藤は眉根に皺を寄せ固く瞼を閉ざして「あなた、許して・・・」と口にした。固く閉ざした瞼の間から一筋の涙が零れ落ちた。

長年恋焦がれていたお藤の肉体は惣右衛門が想像した通り、いやそれ以上に柔らかく妖しく惣右衛門の肉塊に絡みつき夢中にさせた。

夫を失って十年以上孤閨を託っていたが、その期間使われる事の無かった女の器官は十年前の若さをそのまま保っているように感じられた。

荒い鼻息で腰を打ち付ける度にお藤の柔らかな肉がワサワサと揺れ、身体を重ねる惣右衛門の身体を気持ち良く撫でた。

今やお藤も甘美な涕泣を漏らしながら惣右衛門に肉体を預けていた。

布団の上では二匹の淫獣と化した二人が性欲の赴くまま身体を絡み合わせていた。

「見よ！お主の母親の乱れようを」

篤馬が背後からお福を抱きしめ、長襦袢の上から若い女体を楽しみながら言った。

お福は信じられない思いで喜悦に浸る母親の姿を見詰めていた。

そこには貞淑で謹厳な母親の姿は無く、ただ肉欲に狂う醜い女の姿しか無かった。

そして、その淫らな様子が背後から胸を揉み上げたり股間を摩る篤馬の掌の動きに、いつの間にか呼応して、じつとりと股間を濡らし始めていたが、信じられない状況に落とされた本人は気付いていなかった。

「どや？良いか？」

惣右衛門に突き立てられ、氣息奄々としたお藤が「あー！良い！」と、叫ぶように口にした。

「イク時は二人同時に息を併せて行くんやで！」

全身汗まみれの惣右衛門が荒い息を吐きながら言い放った。

最早まともな意識も喪失したお藤は、まるで瘡^{おこり}にでも罹った様にガクガクと首を縦に振って応えた。

惣右衛門の腰使いが一層激しくなった。

肉洞と肉棒が擦れ合わさり、淫液を弾き飛ばす肉擦れの音が淫靡に蔵の中に木霊した。

アアーッ！イヤァッ！お藤の悲痛な声が響いた。

惣右衛門もそれに呼応するように堪えに堪えたものをお藤の胎内に猛烈な勢いで射出した。

まるで二十年の想い具現化するように何時までもドクドクと流し込んでいた。

すっかり放出を終えた惣右衛門は疲れたようにお藤の豊満な体の上に倒れ込んだ。

憎い男の体重を感じながら、白々と意識の戻って来たお藤は心の中で図らずも裏切ってしまった亡き夫に詫びた。そして娘の前で浅ましい女の姿を晒してしまった事に慙愧の涙に咽んだ。涙に霞む目には娘の顔をまともに見ることは出来なかった。

ところが、肉洞内に残したままの惣右衛門の肉塊が再びムクムクと力を取り戻し始めた事を感じて、ひいと悲鳴を上げた。

放出を終えて一度は軟化した惣右衛門の男のモノであったが再び熱く硬く膨張を始めていた。

お藤は惣右衛門の底無しの精力に恐れを感じた。

惣右衛門は、驚きと恐怖の表情を滲ませるお藤の顔を間近から見詰めながら、「二十年も想うて来たんや、一度や二度イッたくらいでは満足出来まへんで・・・」と、いやらしく口の端を歪めた。

この底無しの精力を持つガマガエルの様な顔をした男に、何か人間では無い不気味な化け物に抱かれているような恐怖を覚えて必死に逃れようと身体をくねらせた。

「何を腰を振ってまんのや？今度はアンタが上や」

必死に逃れようとするお藤を抱きしめ、仰臥する自分の身体の上に載せ上げた。

お藤の脂の載った柔らかな肉体がまるで温かい掛け布団の様に感じられた。

必死に逃れようとするお藤であったが、実際には激しく極めた絶頂の影響で身体に力が入らず、股間に杭を打たれて固定されてしまった状態であった。

惣右衛門は下から易々と肉棒を突き上げお藤の女を蹂躪し続けた。

ただ見物するしかない玄斎は、淫靡な男女の交接にすっかり興奮状態となっていた。

惣右衛門が突き立てる度にパクパクと収縮を繰り返す可憐な菊花にじっと目を奪われていた。

これまで何百人もの男女の肛門に突き立てて来た玄斎には、その部分を一目見れば一後口にも名器と言う言葉が当てはまるなら一名器か名器で無いか見抜く自信があった。

そして、惣右衛門に腰の動きに煽られて、今日の前でピクピク蠢く菊の花に似た隠花が実に美味そうに映った。

「恵比寿屋！お主は女のケツメドには興味が無かったはずじゃな？」

お藤を下から責め立てる惣右衛門に声を掛けた。

「ええ、そないでおますけど・・・」

「それでは、この女のケツメドを頂いても文句は無いな？」

劣意に燃え上がる玄斎の顔を見上げて、ほんと溜息を吐くと、「ほんまに仕方無いお人や、ほなどうぞ・・・」と両手でお藤の尻たぶを大きく押し開き、雪白の谷間に開花した肛孔を露わにした。

肛虐の興奮に狂った玄斎は着ているものをかなぐり捨て醜く屹立したモノをお藤の肛門に押し当てた。

玄斎の熱鉄の様に硬化したモノを自分の排泄口に感じて、イヤァッ！と悲鳴が迸った。

お藤の断末魔の悲鳴を気にすること無く、むしろ女の哀れな声に刺激された様に玄斎は腰に力を込めた。

女のその部分の筋肉は前の部分の筋肉と一つで繋がっている。惣右衛門により散々いたぶりを受けて軟化した筋肉は何の抵抗も無く玄斎の巨大なモノを呑み込んで行った。

自分の長大なモノをズブズブと突き立てながらお藤のその部分の出来の良さに目を見張った。

まるでもう一つの女性器の様に自分のモノを温かく包み込み、前の部分には無い力で締上げた。

柔らかく柔軟な筋肉は口をいっぱいに拡げて玄斎のモノを頬張り、大概の女なら初めて玄斎のモノを受け入れた時は裂けてしまうものであるが、この女の練れた秘孔ではその心配は無いように思われた。

イヤァッ！イヤァッ！と男二人に前後から巨大なモノを突き立てられお藤は悲鳴を上げ続けた。

「恵比寿屋、お主ケツ穴に興味が無いのなら、この娘の後を頂いても良いか？」

お福を後ろから羽交い絞めにしながら篤馬がたずねた。

玄斎から肛門を突き立てられ悶絶する母親の姿を見せつけられ、自分もそのような目に合わされるのだと思って悲鳴を上げた。

「あかん、あかん、最初の男はワテや！ワテがお福の花を散らした後にしなはれ！」

と、口にしたが、篤馬の不満そうな表情を見て言葉を継いだ。

「どうしても我慢出来へんと言うのなら身体に触るくらいはかめしまへんで。」

そうか、仕方ないな・・・と一人呟くと悶々とする気持ちを指先に込める様にピチピチとしたお福の身体をまさぐった。

長襦袢の胸のあわせの間から手を差し入れ弾力のある若い乳房を弄んだ。

指先に固くしこった物を感じた。

篤馬は頬を膨らませると、「お前も母親に似て淫らな女よのう・・・こんなに乳首を尖らせているではないか・・・」と、笑い声を上げた。

「あぁー違います！」

「何が違うものか、ほれ、よく見てみよ・・・」

長襦袢の両襟に指を掛けると下の肌襦袢ごと思い切り左右に押し開いた。

上下から麻縄で縊り上げられた固い乳房が露出した。

「ほれ、よく見てみろ！こんなに乳首を尖らせておるでは無いか！」

指先で固く尖った桜色の初々しい乳首を弾いて笑った。

「上はすっかり興奮しておる様じゃが、下の方はどうかの？」

着物の裾を巻くって指を固く閉じ合わせた股間にこじ入れた。

「アアーッ！お許してください！」

秘部を男の手で撫でられる処女の羞恥に甲高い悲鳴が上がった。

「やや！まるで沼の様では無いか？腰巻までぐっしょりと濡れておる。これでは気持ち悪からう？手を縛られて使えぬゆえ拙者が脱がして進ぜる。」

胸の膨らみだけでは無く、乙女の秘奥まで露わにしようとする篤馬の言葉に悲鳴を迸らせた。

そんなお福の身悶えにも関わらず、腰巻の紐を緩めた篤馬は腰から奪い取ってしまった。

後には緋色のはだけた長襦袢を辛うじて身に纏うだけとなってしまった。

母親に似て真っ白い大腿の間に艶のある漆黒の春草が繁茂していた。

母親より娘の方が毛量が多いように感じた。

篤馬は両足をお福の脚に絡ませて押し開き、開花した股間の中心に指を這わせた。

これまで憎み蔑^{きばす}んでいた男と母親の痴態が巻き起こす淫風に巻き込まれてしまった様に無意識の内に秘所をビショビショに濡らしてしまっていた。

秘孔より漏れ出た淫液は、繁茂する若草をネットリと濡らしていた。

粘つく樹液に濡れた痴毛を掻き分け、熱く熱を帯びた秘裂に指を這わせた。

人の手の触れた事の無い秘園に男の指を感じてお福の身体がビクッと震えた。

その部分も秘園から溢れ出た樹液でびしょりと濡れていた。

母親の淫らな姿を目にするだけでこんなに濡らしてしまうとは感じ易い娘だと、指先でなぞりながら思った。

異常な事態に巻き込まれ自分では自分の身体が燃え上がっていることは意識できないでいるだろうがこの女には母親に似て淫蕩な血が流れているとも感じていた。

今や強制されずとも目は母親の淫らな姿に釘付けとなっており、母親の感極まった呻き声と呼応するように秘奥から泉のように熱い雫を迸らせていた。

秘孔を覆う薄い膜の隙間から指を中に押し入れた。

血走った目で母親の姿を見詰めながらも自分の未開拓の地に男の指を感じたのか、小さく悲鳴を上げて身体を硬化させた。

篤馬は一方の手で乳房をユサユサと揉みたてながらもう一方の手で処女の秘園を楽しんだ。
指先に神経を集中して極上の内部を探索した。

以前に、こうしてまだ未通の志乃の内奥をまさぐった事があるが、志乃に勝るとも劣らぬ華洞だと思った。

但し、志乃は武家の娘としての謹厳さと慎ましやかな恥じらいを常に維持していたが、この女は町娘らしい奔放な性を持っているように感じていた。

お藤は男二人に板挟みにされるという、これまで味わったことの無い状態で責め立てられ、まさに氣息奄々という状態であった。

惣右衛門が押して出れば玄斎が引き、惣右衛門が引けば玄斎が押して出るなど息の合った攻めを繰り返していた。そして、男二人の掛け合いを掴み身体の準備をしようとするところを逆手に取って、同時に深く埋めたりして悲鳴を上げさせた。

薄い膜一枚を隔てての色事に長けた二人の名人の繰り出す技にお藤は堪えようもなく煽り立てられ、意識も朦朧となり訳の分からない悲鳴のような呻き声を発して身悶え続けた。

「お内儀、十年ほど前にお前の亭主と息子は辻斬りに遭って命を落としたことがあったろう・・・その犯人が儂じゃ。」

二人の男に挟まれて苦悶するお藤の耳元にそっと吹き込んだ。

今、自分は自分の夫と息子を切り殺した男に尻穴を犯されていると聞かされて、思わず身体を硬くした。

「そして、その亭主と息子を切り殺すように儂に指示したのが恵比寿屋じゃ・・・」

薄々夫と息子殺しに惣右衛門が絡んでいるのではないかと疑っていたお藤は事件の真相を暴露されて息を呑んだ。

そして、その下手人二人に前と後ろから突き立てられている事実にも狂いそうな衝撃を受け、自分を蹂躪する二人の悪鬼から逃れようと身を悶えさせた。

「玄斎様、そんな事言わんでも・・・」

下から腰を使いながら惣右衛門が抗議するように言った。

「どうせこの二人はもう陽の下に出ることは出来ぬのじゃろう。教えておいても良からう・・・」
と、激しく腰を振り立てながら、自分が殺害した男の妻を征服する快感に勝ち誇った様に笑い上げた。

「そんな昔の事より今は楽しんだらどうだ。もうすぐイキそうなんだろう？ ほらほらどう

じゃ？」

お藤に悪事を吐露した玄斎は胸の^{つか}痞えが取れたように一層激しく腰を動かした。

夫と息子の仇になす術もなく犯される悔しさ悲しさも、今や体の芯奥から込み上げる激しい快美感の嵐に押し流されそうであった。

「ほらほら、お主の母親は又イキそうだぞ！」

お福の身体を弄びながら、耳元で囁くように言った。

篤馬に捌られるお福も今や虚空に目を泳がせ、全身にびっしょりと汗を浮かべて荒い息を吐いていた。

お藤の絶頂に近いと感じた惣右衛門と玄斎は互いに目で合図を送り一層激しく腰を蠢かせた。

ギエー！というような低く大きな声を上げて堪らずお藤が絶頂に達した。

それと同時に絹を引き裂くような悲鳴を発してお福も身体を硬直させた。

「ふふ・・・母親の絶頂に併せて自分もイクとは器用な娘だ」と、笑った。

力を失ったお福の身体が背後から抱きしめる篤馬の手をすり抜け、まるでぼろ布のように崩れ落ちた。

男二人に責め上げられ絶頂に達してお藤は口から泡を浮かべ完全に意識を失っていた。

死んだように横たわるお藤の身体を退かすと、淫液に濡れた男根もそのままに立ち上がった。

そして、股間の醜いモノをブラブラさせながら虚脱した表情を浮かべるお福に近づいた。

「これ！起きんかいな！次はお福ちゃんの番やで・・・」

虚ろな目を向けるお福の頬をピシャピシャと叩いた。

「何時でも嵌められるようにお福の身体を柔らかく揉み解しておいたぜ」

「それは、どうもおおきに、有難さん・・・」

篤馬の言葉通り大きく開け広げられた股の間の奥からはドクドクと愛液が流れ出て、その柔肉を置いた周囲をぬらぬらと光らせていた。

お藤の濃厚な熟女の匂いと異なり、爽やかな処女の匂いが立ち上っていた。

顔を近付けて舌で撫でまわして、その果蜜を吸り上げ、処女の匂いと甘い味を堪能した。

意識はいまだぼやけているようであるが、気味の悪いざらついた舌で撫でまわされ、本能的にイヤイヤと首を振り立てた。

激しく二度射精をしたというのに、惣右衛門の股間のモノは新たな犠牲を目にして、命を吹

き込まれたかの様に再びムクムクと鎌首を擡げ始めた。

母親の絶頂の姿とそれと拍子を併せたような自分の絶頂の影響が強かったのか、いまだ虚ろな状態で、自分に狙いを定めて襲い掛かろうとする大蛇の頭をボンヤリと見詰めていた。

それは逃れられない自分の運命を悟った者の様に見えた。

新たに敷かれた布団の上に後ろ手に縛ったままのお福を押し倒した。

そして、そのまま身体を重ねて行った。

乙女の膜を引き裂かれる激痛にお福の意識は一気に蘇ったが、惣右衛門の剛力にがっかりと抱きしめられ逃れる術は無かった。

開通したばかりの雌穴に惣右衛門は繰り返して剛刀を突き立てた。

脳髄にキリキリと響く激痛にお福は泣き叫び母親に助けを求めた。

お藤も娘の悲鳴に意識を取り戻し、痺れて自由に動かない身体に鞭打って蹂躪されるお福の傍ににじり寄ろうとしたが、玄斎に手を取られ引き寄せられた。

そしてそのまま胡坐を掻いて座る玄斎の上に背中を預ける形で載せ上げられた。

背面座位の形で玄斎から背後から突き立てられながら、お藤には娘が目の前で凌辱される様子を見守るしか無かった。

「見よ、お前の娘は幼げな顔に似合わず、あのようにヨガリ狂っておるぞ！」

お藤の柔らかい豊満な乳房を揉みしだきながら背後より告げた。

背後から突き上げられるお藤の目からは止めどなく熱い涙が溢れて視界が歪み惣右衛門に押しひしがれる姿を見ることは出来なかった。

「許しておくれ、お福、お前を悪鬼どもの犠牲としてしまった不甲斐ない母を許しておくれ・・・」

玄斎の逞しいものを女陰に埋められながら、心の中で娘に詫び続けた。

その後長時間に渡って、激しく腰を振り立て続け満足した惣右衛門は激しい声を上げてお福の中に白濁した液を噴射してやっとお福の身体を離れた。

床に崩れ落ちたお福は凌辱の激しさを物語る様に身を揉んで号泣していた。

「それでは、約束通りお福の後の初物を頂くことにしよう・・・」

待ち兼ねたように篤馬が腰を上げると後手縛りのままのお福をうつ伏せの姿勢で布団の上に載せ上げた。

そして、両手で腰を掴んで持ち上げるとお福の肛口に怒張したモノを突き立てた。

そのわずか下では惣右衛門が放出したばかりの男の精とお福の身体から滲み出た愛液が混じり合い泡を浮かべて流れ出ていた。

「そこ違う！そこイヤー！」

既に肉体は疲労困憊し満足に動かせる状態では無かったが、思ってもいなかった個所に篤馬の太い肉茎を押し当てられ、腰を振り立て悲鳴を上げて逃れようとした。

しかし、そんな儚い抵抗も篤馬の目を楽しませる尻振りの舞としか映らなかった。

尻穴の窪みに亀頭の先を押し付けたままグッと腰を押し出した。

ギエーッ！と断末魔の悲鳴が上がった。

玄斎に背後から責め立てられながらお藤は娘の悲鳴に耳を覆いたくなくなった。

都合三度に渡って欲情の丈を放出した惣右衛門は淫液に塗れてテカテカと光る肉塊をブラブラさせながら背面座位で責め立てられるお藤に近づいた。

「ほれ！見てみい、お前のと娘のとワテのが混じったネバネバや。お前の口で綺麗にしてもらおか」

と、妖しく濡れ光る陰茎をお藤の前にズイと突き出した。

悲しく目を閉ざし涙を溢れさせるお藤に督促するように、肉茎を掴んで亀頭の先で鼻先や頬を撫でまわした。生臭い不快な臭いがお藤の鼻腔を突いた。

娘をこのような地獄に巻き込んでしまった罪の意識が心を苛み抵抗の意識もとうに消失してしまったお藤は、おずおずと舌を伸ばすと自分の夫と息子を殺した仇の醜怪な肉塊をチロチロと嘗め始めた。

そのお藤の態度に気を良くしたように、「そや！次はその綺麗な口をアーンと開けて口の中に含むんや！」

惣右衛門の命令に従ってまるで自分を罰するように、赤く紅を引いた口を大きく広げ、ムカつく匂いのする肉塊を口の中に迎え入れ、舌を使って丹念に清め始めた。

「そや！その調子で舌全体を使^{つこう}って汚れを洗うんや！」

二十年に渡って恋焦がれていた女を今自由に責め立てていると思うと、完全な征服を達成した感激でお藤の口内で又々肉塊が膨張を始めていた。

「おやおや！また新しい女が入ったのかい？」

二階で囚われの女達の肉体改造をしていたお銀が階下の物音に気付いて降りて来た。

「ああ、お銀さんかいな、また新しい女達や、あんじょう調教の方頼むで！」

お藤に口腔の奉仕を強要しながらお銀の方を向いて声を上げた。

「その若い方なら珍芸を仕込むことも出来るだろうけど、この大年増の方はいくら私でもね・・・」

「何もコイツに珍芸を教えろとは言うてへん、男が喜ぶような床あしらいの技を教えてやったら良^えいんや！」

と、お藤の奉仕を受けながら上機嫌で声を上げた。

ふーん・・・と、一つ息を吐くと「それじゃ、まだ遣り掛けの仕事が在るからね・・・」と、言い残して階上に上がって行った。

勝利感と征服感に包まれた惣右衛門のモノはお藤の口内で元の大きさを取り戻していた。

顎が外れそうな大きさに咽んで口から吐き出そうとするのを、そうはさせずとお藤の髪を驚掴みにすると思ひ切り喉の奥にねじ込んだ。巨大な亀頭で喉を塞がれ呼吸が止まり目を白黒させて悶えた。

お藤の苦悶の表情を目にして、喜悅の表情を浮かべた惣右衛門は窄めた口に益々激しく抜き差しを繰り返した。

深く突き立てられる度に呼吸を封じられ、今やお藤は意識を喪失しそうになっていた。

ぐったりと力を失い、ただ突き立てられるままになっていたお藤の凄惨な姿に残忍な欲情を掻き立てられた惣右衛門は睪丸に残されていた最後の精液を放出した。

喉奥深くに粘っこい男の粘液を注ぎ込まれて、一瞬お藤の目が裏返った。

「吐き出すんや無いで、全部美味しそうに飲み干すんや！」

突然放出された物に目を白黒させて咽ぶお藤を吐りつけた。

惣右衛門の叱咤を受けて、意識も定かでないまま喉を上下させて粘調な液体を飲み下した。

胸奥から込み上げる不快な臭いに嘔吐しそうになるのを必死に堪えた。

「そや、そや、口を窄めてチンポの中に残っている最後の一滴まで吸い上げるんや！」

頬を窄めて吸引し、鈴口に残った残液まで舌尖を使って絡め取り吸い上げるように指示した。

お藤の舌尖で清められていく分身から込み上げる快美感と自分に敵対していた稲葉屋の女将と娘をここまで凌辱したという勝利の美酒に脳髄は痺れ切った。

今日ここで男達から受けた常軌を逸する暴虐に心身共に衰弱し、今また口内いっぱいに拡がる惣右衛門の獣じみた男の臭いにお藤の頭脳は惑乱しきっていた。

先祖代々守り続けて来た稲葉屋を乗っ取られただけでなく、自分の夫と息子まで殺した仇の男根を口を使って清めている惨めさに対して、怒りや屈辱感は失せてしまっており、自分がしっかりしていなかったから、娘まで巻き込んでこんな事になったんだと自戒の念が込み上げて来て、自分自身をに罰を下す様に一心不乱に口を使い続けた。

背後からお藤を突き立てる玄斎もお藤の身体の変化に気付いていた。

自分の夫と子供を殺した男達に対して完全に降伏することになってしまった惨めさ悔しさが、女の弱さ儂さを表^{おもて}に引きずり出し、自分がかくもか弱い女であった事を無理やり自覚させられたことにより、女の本性が覚醒し始め、身体が男の肉体を求めて疼き始めているのだろうと想像した。

玄斎の肉塊を咥え込んだ華洞からはジクジクと温かい蜜が滲み出し、妖しく律動を始め肉茎を洗った。その気持ち良さにお藤の女の中に激しく放出した。

胎の中に玄斎の吐出を感じて惣右衛門の陰茎を口に頬張りながらウツと身体を硬直させた。

「ほら！お前も母親のように口を使って汚れたモノを綺麗にするんだ」

散々お福の腸の中で暴れまわり思いの丈を射出したばかりの篤馬であったがまだ荒々しい攻撃性は失せておらず、心にうけた衝撃の大きさと顔を布団に埋め嗚咽するお福の首根っこを掴んで命じた。

涙に潤んだお福の目に、今しがた放出したばかりで、まだ隆々と天を向く肉塊が映った。

それは男の愛液や精液やお福の血や腸内の残留物に塗れ異様な臭いを発していた。

「嫌です！」と、異臭を発するモノから顔を背けた。

「嫌か？嫌でもやらせるぞ！」

お福の頑なな態度に残酷な感情が込み上げて来た篤馬はお福の鼻を摘まんで呼吸を封じた。

息苦しさで口を開いた瞬間を逃さず、口内に肉棒をグイッとねじ込んだ。

忽ち口内に異様な臭いが拡がり、意識が遠退きそうになった。

「そうだ・・・母親を見習って綺麗に舐^{ねぶ}り上げるんだ！」

お福は舌に力を込めて侵入してきたモノを押し出そうと試みたが、所詮嗜虐者を喜ばせるだけであった。

両手でお福の頭を支え、激しく前後に振り立て肉茎を出入りさせた。

悲鳴を上げようにも口は篤馬の巨根に封じられていた。

頭を激しく振られ、口の中に割って入る肉茎の異臭に気が遠くなりそうになった。

その時、口内で篤馬の男の精が弾けた。

口腔奥深くに発射された粘っこい液体に喉を塞がれ呼吸が苦しくなり咽んだ。

「何をしておる？母親の様に美味しそうに飲み干すのじゃ！」

咳込みながら放出されたものを吐き出そうとするのを叱りつけた。

そして、「さあ、舌を存分に使って綺麗に洗い清めるのじゃ！」と、再び口の奥深くにねじ込んでいった。

生意気盛りの娘ではあったが、男の暴力の前になす術もなく咽び泣きながら敗北していくのであった。

三人三様に哀れな母娘の身体を堪能した男達は酒を煽りながら小休止をとっていた。

そして、男達から蹂躪され尽くしたお藤とお福は全裸のまま死んだように布団の上に伏せていた。

後手に縛り上げていた縄は既に解かれていたが、ピクリとも身体は動かず、口からも股間からも男達が残していったものが流れ出ている。

しらじらと意識を取り戻し始めたお藤の霞む目に残酷な男達が楽し気に酒を酌み交わしている姿が映った。

お藤の意識が回復したことに気付いた惣右衛門がニコニコしながら話しかけた。

「おう、お藤さん、久しぶりに男に抱かれて随分と楽しんだみたいやないか？こっちも感謝してもらいたいくらいや！・・・ところで、お疲れのところ申し訳ないが、最後にもう一働きしてもらいたいんやが・・・」

顔は愛想の良い笑顔を浮かべているが、目の奥に残忍な光をたたえる惣右衛門にゾッとするものを感じた。

「何・・・難しい話やない・・・」

怯えた表情を浮かべるお藤に笑みを浮かべながら囁んで含める様に話し続けた。

「お二人が恵比寿屋に出かけたまま帰って来んでは、店の者も心配するやろ。そやから稲葉屋の手代の前で、お二人はこれから恵比寿屋の世話になることと、店の経営は大番頭に任せるとの別れの挨拶をしてもらいたいんや。内の者が稲葉屋に向かったとこや、もうすぐ大番頭はんが、稲葉屋の皆を連れて此処にやって来ます。」

惣右衛門の嬉しそうな声を聴きながら、嗚呼、自分は何て浅はかであったのだろうと、思い知らされた。

藁にも縋る思いで憎い恵比寿屋を訪れたが、結局長年守り育てて来た稲葉屋は取り上げられ、自分達は夫や息子の仇から辱めを受けることになってしまった—と、自分の浅慮を呪った。打ちひしがれるお藤の目の前に、巻き紙を投げてよこした。

「こうして、借別の挨拶文も考えておいたで。稲葉屋の皆が来るまでの間に覚えておくんや！」

お藤の手にする紙片には、長文の挨拶の言葉が書き記されていた。

文字を目で追うのがやっとで懊悩するお藤にはそれを全て記憶する能力は残されていなかった。

「覚えたか？」と、言うとお藤の手から挨拶文を奪い取った。

「さて、そろそろ稲葉屋の者も集まり出した様やし、準備してもらおか。」

外の気配に気を配りながら口にした。

「店の者を見て気が動転して暴れ出したらいかんさかい、両手を縛らせてもらおか。」

玄斎と篤馬が麻縄を扱きながら二人に迫った。

男達に蹂躪され体力を使い果たした二人には残酷な父子に逆らう力は残されておらず、易々と高手小手に縛り上げられてしまった。

全裸の上から縛り上げるという事はこのまま、全裸のままで慣れ親しんだ手代達の前に引き出すつもりでは無いかと、惣右衛門の残酷な真意に気付いて青ざめた。

怒りが込み上げて来てキッと惣右衛門を睨みつけたが、素知らぬ表情で笑顔をたたえているだけであった。

「さて、準備が出来た所で、一つ仕込みをして置きまひょか・・・」

相変わらずニコニコと笑顔を浮かべる惣右衛門が何やら木箱を持ち出して来た。

蓋を開けると中にはギヤマン（硝子）の筒と木栓で封じた大きな陶の容器が入っていた。

子供がおもちゃを手にするように、嬉しそうに、そのガラス筒を持ち上げると、

「紅毛人の慈英夢須から貰った最新式の絵寝間でおます。前の絵寝間は金属製で先が尖ってて注意せんとおいどを傷付けてしまう恐れがありましたけど、今度のはギヤマン製で先も丸くなっておりますさかい、少々乱暴に差し込んでも傷付ける心配がおまへん。それに透明やさかい中のお薬の様子が判ります。これに同じく慈英夢須から貰うた下し薬（グリセリン原液？）を詰め込めば鬼に金棒でおます。」

と、得意そうに説明した。

既に何度か囚われの女達に浣腸を施した経験のある、玄斎と篤馬の父子は興味津々でそれを

見詰めた。

両手を後手に縛られた母娘が玄斎達に尻を向けて立たされていた。

「ほら！もそっと脚を開かんかいな！」

直立する女達に脚を開くように惣右衛門が尻を撫でながら命じた。

屈辱をかみ殺してそろそろと股を開き始めた。

惣右衛門はウキウキする思いで開け放たれた二人の股間をのぞき込んだ。

そこには男達に凌辱された跡がありありと残されており、大腿にも流れ出た淫液の跡が残されていた。

篤馬が陶の容器から薬液を吸い上げ、ガラス製の筒具を手にお藤に迫った。

「此处や、此处！此处に突き刺すんでっせ！」

惣右衛門が興奮に息を詰まらせながら、お藤の尻肉に手を掛けて左右に押し開いた。

開け広げられた双臀の間に男達の凌辱の跡を残す傷付いた菊花が佇んでいた。

篤馬は浣腸器の嘴管の先端を^{あやま}過たずその中心に押し当てた。

浣腸の経験など勿論無いお藤は又しても淫具をその部分に押し込まれ凌辱されるのか—と、歯を噛み締め、淫具が侵入する激痛に耐えようとしたが、キリキリとした痛みを伴い肉を押し広げて侵入して来る巨大な責め具と違い、意外に細い管の大きさの為痛みを覚えることも無くホッと安堵の息を吐いた。

しかし、それも束の間、腸内に埋め込まれた管の先から何やら生温い液が体内に流れ込んで来ることに異様な感覚を感じた。

その気味の悪い感触にアッアッと身体を身悶えさせた。

隣ではお福が心配そうに母親の様子を見詰めていた。

「お待たせしたの。次はお福の番じゃ！」

新たに薬剤を注入したガラス容器を手淫な笑みを浮かべて篤馬が迫った。

惣右衛門が同じようにお福の尻を押し開いた。

でっぷりと肥満した母親と違い腸管も細いのか、篤馬に狼藉された肛孔は一部が避けて血が滲んでおり、全体が腫れている感じであった。

篤馬はそれに構うことなく、痛ましい肛門に嘴管を突き立てた。

「ああー！イヤ！気が変になります！」

腸内に浣腸液を注入される気味の悪い感触にお福は悲鳴を上げて身悶えた。

そんなお福の乱れぶりを楽しむように、カツンと音がするまで押し棒を押し切り浣腸液を全

て体内に注ぎ終えた。

体内から込み上げる未経験の感覚に二人は立ってられず蹲踞の姿勢に腰を降ろした。

最初の名状の出来ない怪しげな違和感は、やがて腹全体を搔き笔るような痛感に変化して来た。それは、排便を希求する腹の反応であることが二人には分かった。

「さあ！それでは稲葉屋の皆もお集りのようやし、挨拶に出て貰おか。」

外のざわざわとした人の気配に稲葉屋の店の者が集まった事を感じた惣右衛門が手を叩いて促した。

このまま、全裸のままで手代達の前に引き出される事に恐怖を感じたお藤たちは、「このままの姿で店の者の前に出るのは余りにも惨めすぎます！せめて何か身に纏うものを掛けて下さい！」と、泣き叫ぶように声を上げた。

全裸のまま母娘を稲葉屋の店の者たちの前に引き出し、敗北感を思い知らせてやろうと思っていた惣右衛門は聞こえぬ素振りで二人の縄尻を取って蔵の外に引き出そうとした。

その時、篤馬が口を開いた。

「待て恵比寿屋！これまで扱使^{こまつか}って来た女中や偉そうな態度で接して来た手代達の前にこのような惨めな姿を晒すのは可哀そう過ぎる！如何に栄枯盛衰が世のならいと言えど酷過ぎるとは思わぬか！お藤やお福の気持ちにもなって見よ！」

突然割って入った若い侍に助けを求める様に母娘は見上げた。惣右衛門に交じって自分達を残酷に蹂躪した男であるが、今はこの若者の善意に縋るしかない、微かな希望を抱いた。

「そう言われましても・・・」

篤馬が助け舟の様な大仰な言葉を発する時には、必ず裏に陰湿な考えが有る事を知っている二人は面白そうに次の言葉を待った。」

「そうじゃな・・・着物を羽織らせるのが恵比寿屋の意に沿わないと言うのなら・・・」

少し思案する表情を浮かべた後、名案を思い付いたとでも言うかのようにポンと手を叩くと、「この豪奢な袋帯を巻いて出るといのはどうじゃ？この様に高価な物を身に纏っておれば勇氣も湧き立ち、恥ずかしさも立ちどころに消え去るであろう！」

篤馬の言葉にお藤たちは顔を青ざめさせた。

袋帯だけでは麻縄に上下から縊り上げられ、これ見よがしに前に突き出した乳房も男達から散々辱められた股間も隠すことが出来ない。それどころか豪奢に輝く帯は一層胸と股間を照らし出し、卑猥さを強調するのでは無いか！

男達は有無も言わず母娘を立ち上がらせると腰に帯を巻き始めた。

硬い帯により乳房が下から持ち上げられるように前に突き出していた。

男達に帯を巻かれる間にも二人の腹はのっぴきならない状態となっていた。

浣腸液が腸内を搔き筆り、グー、グーと腹が鳴った。

この恥ずかしい腹の音は男達にも聞こえている筈であるが、男達は素知らぬ素振りで作業を続けていた。

「さあ！出来たで！」

男達は裕福な商家の女が纏う高価な袋帯を裸身に纏っただけの二人をしげしげと見詰めた。やはり袋帯は恥ずかしい部分を隠す役割は全く果たしておらず、逆に艶々と輝く豪華な布地が卑猥な様相を強調していた。

袋帯の上に重く垂れさがったお藤の乳房と硬い帯に下から突き上げられ前に突き出したお福の乳房が対照的に映った。

そして、帯の直ぐ下では隠しようも無く、惣右衛門達に蹂躪されたばかりの股間が淫猥な姿をまざまざと見せていた。

「ほたら、行こか！」

惣右衛門が二人の縄尻を一つに握り締めて歩行を促した。

「待って下さい！せめてその前に厠に行かせて下さい！」

腸内から込み上げる苦痛は耐えがたいほどになっており、腰をブルブルと震わせ油汗を流しながら哀願した。

「何や！アンタらウンコがしたいんかいな？」

わざととぼけて苦痛に呻吟する母娘に問い掛けた。

ウンコなどと言う下品な言葉を口にすることも出来ず、二人は顔を赤く染めながら激しく首を縦に振った。

「あかん！あかん！最前から皆がお待ちかねや！別れの挨拶が終わったら糞でも小便でも好きなだけやらしたるから、今は挨拶が先や！」と、蔵の扉を押し開いた。

明るい陽光が開け放たれた扉から差し込んだ。

恥ずかしい格好で外に連れ出される羞恥よりも今は腸を搔き筆る苦痛の方が二人を責め苛んでいた。

恵比寿屋の豪壮な庭の広い池畔に大番頭に引率された稲葉屋の女中や手代が集合していた。池の手前は50人ほどの人間が楽に待機できる広さがあった。

人々は稲葉屋の使用人であり、朝方恵比寿屋に出掛けたきり帰って来ない女将とお嬢さんを心配しているところを、大番頭に率いられて恵比寿屋まで大勢で訪れたのだった。

店の者達は稲葉屋の極度の経営不振を知っており、このまま稲葉屋は倒産してしまうのではと不安を感じていた。

皆口々に、店の今後に対する不安や女将たちがどうなったのかとの心配を小声で口にして、ざわざわとさざめき合っていた。

その時池の向こう側の林の奥から人の影が現われた事に気付いて、ざわめきが一瞬静寂に変わった。

「アッ！女将さん！お嬢さん！」

「お^{いたわ}しや！」

大きな池であったが、対岸に引き立てられて来た二人の女の顔や表情は十分に読み取れる距離であった。

恵比寿屋の主人に縄尻を取られ、全裸の身体に今朝出かけた時に着用していた豪勢な袋帯を纏っただけの惨めな格好で高手小手に後ろに手を縛られた悲惨な姿を晒していた。

恵比寿屋の主人の背後には何故か武士の風体の親子ほど年の違う男が従っていた。

一人は六尺以上の大男であり頭は綺麗に剃り上げられており、錦絵に描かれる大入道を連想させた。そしてもう一人は日に焼けた壮観な顔をした若侍であった。

お藤とお福の母娘は店の者に裸身を晒す羞恥か全身が青ざめ腰をブルブルと震わせている様子が池を挟んで伺えた。

二人は股間を引き絞る様に、内股に歩幅を小さくして歩んだが、歩みを進める度に二人の股間からは男が残した粘液が大腿を伝って流れ落ち、自分達がここまで来る間にどれだけ酷い狼藉を男から受けたのかと想像し、恵比寿屋の主人を怒りに燃えた目で睨み付けた。

稲葉屋の使用人達は自分達の女主人の悲惨な姿に悲痛な声を上げ女中たちは涙を浮かべた。ただ惣右衛門から意を受けている大番頭だけが、笑いを嚙み殺して、目で惣右衛門に会釈を送った。

惣右衛門は二人を使用人達と相對するように池の畔に立たせた。

高手小手に縛った縄の余りで乳房の上下を二重三重に縛り上げ、母娘の乳房を縊り出していたが、お藤の熟れ切った柔らかな乳房は袋帯の上に重たく^お押し掛かり、一方若いお福のプルンとした乳房は硬い袋帯に持ち上げられこれ見よがしに前に大きく突き出していた。

豪華な袋帯のすぐ下には何物も隠す物の無い雪白の下腹が晒されており、ピタリと閉じ合わ

された大腿の間に、お藤の透けて直ぐ下の貝類の合わせ目が窺えそうな慎ましやかな繁茂と、母親とは逆に年若いお福の濃密な艶々とした茂みが露呈していた。

この様に本来人目に晒すはずの無い恥ずかしい所が隠すすべも奪われ、明るい陽光に照らされ池の対岸からもくっきりと眺め見ることが出来た。

稲葉屋の店の者達は、この痛ましい姿をまともに見ることは出来ず、顔を背けたり目を固く鎖していた。

一人、大番頭だけが、此^こ奴^{いつら}女^{まで}らは艶やかな着物の下にこんないやらしい体を隠していたのか一と、好色な視線で二人を見詰めた。

池の反対側で嘆き悲しむ男達は悲痛な声を発しながらも、いつの間にか好色な思いが込み上げて来て、この蠱惑的な女体をチラチラと盗み見していた。

女中たちも同性として、二人の裸身に対する興味は抑えきれず、泣き声を上げながらも人目を憚りながら盗み見していた。

女主人と娘の惨めな姿を稲葉屋の従業員に見せつけて一息ついたところで、惣右衛門が別れの挨拶をするように促した。

惣右衛門は対岸に向かって大声を発すると、これから女将が皆に大事な事を伝えるので良く聞くようにと云う意味の事を口にし注意を促した。

惣右衛門の言葉に稲葉屋の全員の視線が対岸の母娘の裸身に集まった。

常日頃接して来た使用人達の視線が自分に注がれている事は分かったが、今のお藤にとっては、早く別れの儀式を終わらせて厠に飛び込みたいとの思いが先立ち、腰をモジモジさせ脂汗を浮かべながら、最初の言葉を口にした。

「皆さん、今日まで稲葉屋の為に骨惜しみなく働いてくれて有難うございました・・・」

お藤は使用人から見詰められる羞恥と内臓を掻き毟る苦痛と闘いながら、惣右衛門から渡された別れの挨拶を思い出しながら口にした。

「声が小さいがな、そんな小さな声では向こう岸に届きまへんで。もう一回やり直しや！」と、やり直しを命じた。

その間にも腹痛は一層激しくなりお藤を責め苛んでいた。

「皆さん、今日まで稲葉屋の為に骨惜しみなく働いてくれて有難うございました・・・ウッ！」

と、再び別れの挨拶を繰り返し始めた。

大きな声を出そうと腹筋に力を込めるとグルグルと鳴る腹に圧力が掛り、思わず漏らしそうになり、ウッと呻いて、肛門をぎゅっと引き締めた。

込み上げる排泄の欲求でまともな意識を失いそうな中で、惣右衛門から見せられた挨拶文を必死に記憶をたどりながら口に続けた。

「現在稲葉屋の蔵には金が無く非常に厳しい状況ではありますが・・・ウッ！」

「どうか安心して下さい・・・アアッ・・・此処にいる恵比寿屋様のご主人様からお金を融通していただけることになりました・・・アア！」

腹から込み上げる激痛により挨拶の言葉が時々途切れた。

「ですから、今後も稲葉屋は安泰です。皆もこれまでと変わらず店の為に働いて下さ・・・ヒィ・・・」

迫り来る便意で意識は朦朧となり自分が何をしゃべっているか分からなくなりそうであったが、ぐっと堪えて言葉を継いだ。

「私達母子は・・・恵比寿屋様のご主人様のご好意に甘え、本日から恵比寿屋様に御厄介になる事に決めました・・・ンン！・・・ですから、今後店に戻ることは無く・・・ヒィ・・・稲葉屋の経営から・・・退きますが・・・ウウッ・・・今後は其処にいる大番頭が店の経営を引き継ぎますので・・・皆・・・アアッ・・・大番頭の指示に従い・・・ンン・・・長く続いた稲葉屋の暖簾を守って行って下さい・・・グググ・・・」

稲葉屋の店の者たちが驚いて大番頭の顔を見上げた。

最初からこの事を知らされている大番頭は落ち着き払って驚いて顔を上げる使用人達に軽く会釈した。

お藤の別れの挨拶はこの後も続いたが、極限状況の中で見せられた長文の挨拶など丸暗記できるはずもなく、時々飛ばしたり自分の言葉で話したが、その都度惣右衛門は意地悪くやり直しを命じた。

それは、単に正確な挨拶をさせることが目的では無く、その瞬間を迎えるまでの時間稼ぎであった。

非情に流れ去る時間の中で、最早かつての使用人に裸体を見られる羞恥も、屈辱的な挨拶の言葉を口にする惨めさもどうでもよくなっていた。脂汗を流し腰を震わせながら、ただ早く厠に飛び込みこの苦痛から逃れる事だけを願った。

「アアッ！もう！」

堪え性の無いお福がいつ終わるとも知れない別れの挨拶に耐え切れなくなくなり悲痛な声を発した。

「お福！我慢するのです！」

娘の切羽詰まった様子にお藤も狼狽えた声を上げた。

「そうか？もう我慢できぬか？此処で漏らしても良いぞ・・・」

と、篤馬が池畔に立つお福の身体を回れ右させると池に向かって股を割り尻を突き出すへっぴり腰の姿勢を取らせた。

そして、今にも腰を抜かして倒れ込みそうな身体を支えた。

アアー！見られてる！最後に少しでも残された理性により、これまで使役して来た店の者に生々しい女の狭間を晒して排便することに激しい羞恥を覚え、最後の一线を踏み止まらせた。ただ少しでも身体を動かせば今にも暴発しそうであった。

池のこちら側の稲葉屋の者達の目には開け広げられた双臀の狭間で男に挟られ腫れた小菊が忙しなく伸張と収縮を繰り返し、ピクピクと痙攣している様子がまざまざと映った。

「お福！お福！耐えるのです！」母親の悲痛な叫び声も届かず、庭中に響き渡るような音を立てて必死に閉ざしていた肉の門が破れると、溜まりに溜まったものが池に向かって放出され始めた。

その瞬間見守る使用人達の間から悲鳴のような声が沸き上がった。

集められた稲葉屋の者達の狂おしい叫び声が渦巻く中で次々と便塊を放出し、放物線を描いて池の中に沈んで行った。

バシャバシャと激しい水飛沫を上げて、水面を叩く排泄物の音に、餌を投げ込まれたと思った鯉たちが集まって来て池に沈んだ汚物を争う様に口に含んだ。

「ほほう！日頃贅沢な物を食っている大家のご令嬢の物は糞と言えども鯉達にとってもご馳走の様でござるな！これから毎日鯉達に餌を与えたらどうじゃ？」

と、池をのぞき込み笑い上げた。

悲鳴の様な声を上げて泣き叫ぶ稲葉屋の手代達の前でブリブリと排便を続ける娘の無残な姿にお藤は大粒の涙を流していた。

排泄を終わり腸内が楽になったお福には急に心の隅に追いやられていた羞恥心が込み上げて来た。そしてかつての使用人達の前で在りうべき醜態図を晒した事実打ちのめされ、そのまましゃがみ込むと号泣し始めた。

哀れな娘の姿を目にしてお福の心の中で何かがガラガラと崩れ去って行った。

「ああ・・・もう耐えられません！」

自分達母子は恵比寿屋の前に完全に敗北した事を認め哀願した。

「ほう！お福の様にここで恥を晒すと言うのか？」

お藤の身体を支える玄斎が問い返した。

「はい・・・」

敗北感に打ちのめされたお藤が短く応えた。

最早、お藤の心には夫の仇である惣右衛門に操を奪われた悔しさも、店の者の前で大恥を晒す惨めさも残っていなかった。ただ腸を括る苦しさから逃れたい思いだけが支配していた。そして、娘の様に股を開いて池に向かって尻を突き出した。

その瞬間、凄まじい音を発して菊花を破って汚物の放出が始まった。

「ああー！女将さん！」

再び稲葉屋の使用人達の間から悲鳴のような声が上がった。

しかし、店の者達は悲痛な言葉を口にし、掌で目を覆いながらも僅かに開いた指の隙間から目をランランと光らせ、かつての自分達の上に君臨した女主人の落花狼藉の姿を盗み見していた。

ひとり大番頭だけが笑いを噛み殺してお藤の惨めな排便姿から目を逸らすことなく見続けた。

後から後からお藤の後口を割って汚物が池に投げ込まれていた。

水柱と波紋の広がる水面下に鯉達が群がって争って便塊を漁った。

人々の見つめる中で排泄を続けながらお藤は、今朝からの運命の変転に天を呪って嗚咽した。一体自分達に何の罪咎が在ると言うのか？何故夫殺しの男達に娘共々凌辱されなければならないのか？何故夫とともに守り通して来た稲葉屋を取り上げられなければならないのか？何故店の者達の前でこのような大恥を晒さなければならないのか？何故？何故？何故？

激しく号泣しながら、尻を池に突き出し、排便を続けるお藤に「今更、泣いても遅おます。店の者の前でこんだけ大恥を晒したら、もう恥ずかしくて家に帰ることも出来ませんやろ。ここは諦めてワテの囲われ者に成るしかおませんやろ。」

と、勝ち誇った様に笑い声を上げた。

「それにしても何ちゅう臭いや！おお臭！」と、大げさに顔を顰めて鼻を摘まんだ。

薄ら馬鹿

「ああ・・・千鶴・・・千鶴・・・」

柱に立位で縛り付けられた慎之介が腰をブルブルと震わせ掠れた声を出していた。

慎之介の前に正座した千鶴が慎之介の股間に顔を埋めていたのだった。

千鶴の口を使った性技の上達ぶりを確認するため、先ほどから慎之介のモノをしゃぶらせているのだった。

「どうだい？良いかい？」

調教の成果を見守る様にお銀が二人の傍にピッタリと寄り添い腰を屈めて、頬を窄めて口内で慎之介のモノを一心不乱に扱き続ける千鶴の動作を観察していた。

すっかり上達した千鶴の舌捌きに今にも快楽の止めを差されそうな状態に追い込まれた慎之介は自分の淫らな体液で愛する若妻を穢すことを恐怖して眉根に深く皺を寄せ激しく顔を左右に振り続けていた。

「もうイキそうなんだろう？良いんだよ、千鶴の口の中で果てても・・・」

今は苦痛と化した激烈な快楽に懊悩する慎之介の顔を見上げながら口にした。

「千鶴、千鶴、止めてくれ・・・もうだめだ・・・」

腰を震わせながら最後の瞬間を堪えようとする慎之介の呻くような声を聴いた千鶴は、愛する慎之介に喜んで貰えるよう、心を込めてお銀から鍛えられた口技を始めたのに逆に慎之介を苦しめる結果となってしまったことを後悔した。そして、その苦しみを早く終わらせるためにも一刻でも早く自分の中に慎之介の熱い情熱を受け入れなければならないと感じるのだった。

「良いんですよ！慎之介様の熱いモノを千鶴の口の中に沢山下さい！」

と、啜っていたモノを離して慎之介を見上げて艶然と微笑んだ。

その声に止めを差された様に、張り詰めていた怒張が一瞬痙攣し、白濁した粘液を放出した。慎之介の射精したものは千鶴の鼻柱を叩いたが、直ぐに口を開いてそれを啜え残りを口内に受けた。

慎之介の男のモノがビクビクと痙攣し、口の中に拡がって行く熱い情熱を咽を上下させて飲み下した。

「ほおー！大したものだ、この娘は口だけでとうとう慎之介を追い込んだよ！」

間近でその様子を見続けていたお銀が感激したように声を発した。

「さあ、教えた通り舌を使って後始末をするんだよ！」

お銀に命じられるまでも無く、慎之介の熱情を口の中で受け止めた千鶴は、言いようの無い

至福感に満たされ、腫を潤ませ、丹念に舌を使って口内に咥え込んだままのモノを拭い尿道に残った最後の一滴まで吸り上げた。

「しかし、こう女が沢山増えては、慎之介一人では回らないね・・・」

と、見世物小屋の出し物を考えながらお銀が溜息を吐いた。

「それなら、良い話が在るぞ！」

逞しい全裸像を晒す篤馬が、これまた全裸に剥かれたおセイを伴って現れた。

後手に縛り上げたおセイを背後から突き立てて、無理やりお銀の傍まで追い立てて来たのだった。

朝からずっとこの調子で飯を食う時も飲み物を飲む時もおセイの肛口に突き立てたままで身体を離すことが無かった。

何時間も篤馬の太い怒張に抉られ続け、その部分は何時しか痛みも忘れてジーンと痺れ続けていた。

「もう、お許してください！身体をお放し下さい・・・」と、背後から責め続ける篤馬に哀願するのだったが、「拙者は其方のケツメドが気に入ったのじゃ！此処の女の中で一番じゃ！もう片時も離れたくないのじゃ！」と、背後から責め立てながら笑った。

こうしてどこに行くのも一緒の状態で一つに繋がったまま蔵の中を歩き回っていた篤馬であるが、お銀の嘆きを耳にしてやって来たのだった。

「以前におシズを手籠めにした杉作達三人の下士が居たろう。アヤツめ等が舞台上で男役をやりたいと申して来たのじゃ。」

妹の操を奪った男達が又現れるのかと思って、後口を抉られながらおセイの身体がピクリと震えた。

「ふーん、舞台上に上がって人様の目の前で恥掻き芸の相手役なんかやりたがる男なんて居るんですかねえ？」と、訝し気に応えた。

「あいつ等は武士と威張っていても剣の腕はからっきし、かと言って他に誇るべき特技も無く、何時も人から馬鹿にされて悔しい思いをし続けていたのじゃ。ただし、一つだけ自慢できることが在るというのじゃ。あいつ等は、これまで女遊びに明け暮れて来て、遊女達から女殺しの豪刀だとか底無しの精力だとか煽てられ、すっかりその気になっておる。舞台上に上がり自慢の名刀を振って女達をキリキリ舞いさせて客が驚く姿を見たいと、言うておるのじゃ。」

「ふーん、そんなに旨く行くんですかねえ？まあ、男役も少ないことですし、連れて来て下さいな。」

「相分かった！」と、力強く返事した。

「それにしても、こうして裸でいると身体が冷えて来るのお。何やら小便がしたくなって来おったは。このままお主の中にしても良いか？」

と、背後からおセイの身体を抱き締め両手で乳房を粘っこく揉みたてながらそっと耳元で囁くように言った。

「イヤー！」篤馬の恐ろしい言葉に悲鳴を上げたが、直腸深く突き立てられた男のモノの先端から熱湯が流れ出し、腸内全体に満ちて行くのが分かった。

三人の不良下士がお銀の前に立たされていた。

お銀に命じられて、三人は裾を開いて陰茎を露出させた。

お銀は目の前に開陳した三本の肉棒をためつすがめつ眺め渡し、一つ一つを手にとると、その大きさや硬さを確かめる様に掌の上でポンポンと弾いた。

そして、一番端に立つ半次郎のモノを突然口に含んだ。

あっ！と、声を上げたが、お銀の口技の巧みに、アッという間もなく突き抜ける快美感に引き込まれ、忽ち身体は震え出し、数秒と持たずお銀の口内に発射してしまった。

「何だい？もうイッてしまったのかい。全くだらないねえ」

と、口の周りを手で拭いながら呆れ顔で言った。

次に三人を下半身剥き出しのまま床の上に寝かせた。

その上に裾を捲り上げたお銀が跨った。

男のモノを掴み自らの女陰に挿し入れると腰を上下させ始めた。

お銀の極上の膣内で、かつて経験したことの無い妖しい肉の蠢きに煽り立てられた男達はこれまた数秒と保たず果ててしまった。

「全く、何が女殺しの豪刀だよ！こんなだらしくちゃ話にならないね！」

紹介した篤馬も成り行きを見守っていた玄斎も首をすくめた。

この男達にとっては唯一の自慢出来る事と自信を持って臨んだのに、お銀の言葉に沽券をズタズタにされ、しょ気返って床に腰を突いていた。

生まれてこの方人から馬鹿にされ通しで、唯一の自慢できるものとして信じていた女泣かせ

の技も無残に踏みにじられ、呆然とする中で何とか自尊心を維持しようと、あれこれ頭の中で考えを巡らしていた半次郎がボソッと呟いた。

「俺はアンタの求めている男を知っているかも知れない・・・」

半次郎の呟きを耳にした太兵衛も、「そうだ！アイツなら出来るかも知れない！」と、声を上げた。

「何かアテが在るのか？」

三人の口ぶりに興味深そうに玄斎が問うた。

「いえね、庄屋の家の三男で捨太郎と云う奴が居るんですがね・・・いったい誰に似たんだかコイツが馬鹿で、ただの馬鹿だけじゃなくて相撲取りみたいな大男で力も強く、アッチの方も滅法強い。一日何度でも何時間でもまぐわっていられて、女が悲鳴を上げても終わらない。」半次郎の言葉にふんふんと肯いた。

「何しろ馬鹿で性欲だけは異常に強いから、ちょっと目を離すと直ぐに村の娘を襲って手籠めにしてしまう・・・さすがの庄屋も諦めて蔵の中に檻を作って押し込めているんですが、俺たちなら蔵を破って此处に連れて来ることは可能です。」

「しかし、誘拐して来たら庄屋も騒ぎ立てるのではないか？」

「いえ、名前の通り親としては捨ててしまいたい息子ですから、とは言え殺してしまうことも出来ず、大飯を食らうだけの穀潰しですから、居なくなっても村娘を襲って騒ぎさえ起こさなければ、逆にホッとするのではないですか？」

杉作の言葉に、「それではやって見よ！」と、声を発した。

階下では惣右衛門が全裸で後ろ手に縛り上げたお藤を責め立てていた。

蔵の壁から向こう側の壁まで太い綱を渡し、そのざらつく縄を跨らせて歩ませていた。

「ほら！何を休んでますのや！早よ歩かんかいな！」と叫んで手にした竹棒でお藤の尻を打ち据えた。

竹棒が脂肪をたっぷりと置いたお藤の丸い尻の上で跳ね甲高い音が蔵の中に響いた。

ヒィー！と悲鳴が口を吐いて上がった。

お藤の跨ぐ縄には途中幾つも瘤が作っており、歩くたびに陰唇を意地悪く責め上げた。

瘤が陰核を擦る度に鋭い痛覚が背骨を貫き、淫門を通過する度に抉られる様な刺激を受けた。

秘裂を搔き毟る刺激に耐え切れず、歩みが遅くなると、「歩くんや！歩くんや！」と容赦なく尻肉を竹棒で叩き続けた。

陰唇を擦り付けて歩く縄が汗とは違う粘っこい液で塗れている事に惣右衛門が気付いた。

「何や、アンタ！こんな事で感じてるのかいな？本当にスケベな女やな！普段は貞淑そうな顔してるけど、亭主と一緒に時は二人でこんなイヤらしいことして遊んでたのと違うかいな？」と、死んだ稲葉屋の主に嫉妬したような表情を浮かべた。

「こんなふしだらな女はこうしてやる！こうしてやる！」

と、二本の竹竿を手にして重たく熟れた乳房を上下から挟みグリグリと扱き上げた。

上下から乳房を押しつぶされる激痛に悲鳴を上げた。

勿論自分は夫に対して貞淑な妻であり、他の男から視線を向けられても意識することも無く、夫に肉欲を求めることも無く、何時も夫を陰で支える良妻であると信じて来たが、ここ数日のあまりに大きな変転が自分を狂わせ、人から辱めや苦痛を与えられる事に身体が反応し始めているのでは一と、思わずゾッとする思いに駆られるのであった。

「初めてアンタを見た時からワテはアンタに惚れてしまったんや！この二十年というものアンタの顔が目浮かんでワテを苦しめ続けたんや！そやからアンタはワテを長い間苦しめた罰を受けるんや！」と、ガマガエルの様な不気味な顔に泣き笑いの表情を浮かべて狂ったように虐待し続けた。

拷問の苦しさに気を失ったお藤が、次に意識を取り戻したのは床に敷かれた布団の上であった。

後手に縛った縄はそのままで仰向けに布団の上に横たわっていた。

仰臥するお藤の両足首を惣右衛門が握り締め思い切り左右に押し開いていた。

その広げられた両脚の中心を惣右衛門が目をランランと光らせ注視している事に気付いてひい！と悲鳴を上げた。

「可哀そうに、こんなに傷付いて！痛かったやろ！」と、拷問に傷付いた雌芯を繁々と眺め続けた。

そして、次の瞬間、顔面を傷付いた股間に押し当てた。

お藤の悲鳴と身悶えにも関わらず、両足をはっきりと握り締めたまま陰唇を舐め始めた。

傷付き腫れあがった肉襞の上を惣右衛門の舌が前後した。

「ワテはアンタに惚れとるんや！アンタはワテの女神様や！アンタの為なら何でもできるで！」と、喚く様な大声を上げ、舌を窄めて肉壺に埋め、柔らかい内部を搔きまわした。

気持の悪いざらつく舌を華洞に埋められ、男根を挿入れたように身悶え悲鳴を上げた。

「ワテはアンタが好きや！アンタの身体には何処も汚い所は無い！ワテは玄斎様の様にケ

ツメドを犯す趣味は無いけど、こんな事も出来るで！」と、両足を掴む腕を更に差上げ腰を捲り上げる様に持ち上げると、剥き出しとなった肛門に唇を押し付けた。

ヒィィ・・・！と引きつった悲鳴が上がった。

そんなお藤の悲鳴と身悶えに関わらず、惣右衛門は其処に唇を押し当てると、まるで皺を延ばすように菊花の皺の一本一本を丁寧に嘗めた。

前の秘められた花園を愛するのと同じように後ろの秘められた井戸の部分執拗に舌先で愛撫した。

惣右衛門から口唇を使った愛撫を受けながら、「この男は狂っている！愛憎という言葉が在るが、この男は自分に対しての狂気の愛情とそれと正反対の憎悪の感情を抱いている。この愛と憎が交じり合っ一つに成る事は無く、その一つ一つが斑模様の一つの大きな塊を形造り、愛と憎の醜い棘に覆われた塊が自分を両極端から責め苛んでいる！」と、感じていた。丹念な舌先の技でお藤の肛口が柔らかくなって来たのに気付いた惣右衛門は舌先を思い切り体内に埋め込んだ。

激しい悲鳴を上げ身体を震わせながら、惣右衛門の舌先が直腸内に侵入して来ることを感じ、その激烈な刺激で目の前が濃い靄に閉ざされた様に意識が白くなって行った。

「ふーん、此奴がアンタ達の言ってた薄ら馬鹿かい？」

杉作達により庄屋の牢から連れ出され、ここまで連れてこられた大男を見ながら声を上げた。

「そうさ、名前は捨太郎と云う女とヤル以外に能力の無い薄ら馬鹿さ」

お銀は捨太郎の身体を繁々と見まわした。

背丈は六尺近くあり、玄斎に次ぐ背であったが、筋肉質で無駄肉の無い玄斎と比べ、相撲取りの様にでっぷりとした体形をしていた。

捨太郎の巨体に皆が関心を示しているので、半次郎が得意そうに説明した。

「御覧のように身体はデカくて、その上怪力、相撲取りにでもなったら大関も狙えたかも知れないが、何しろ馬鹿だから使い道が無い・・・」

女体の調教場でもある秘密の蔵の其処此处では、慎之介も交じって女達が自らの秘所に淫具を突き立て、その込み上げる刺激に身体を振るわせ鼻を鳴らし嬌声を上げていた。

玄斎父子や惣右衛門が捨太郎に興味を持って集まったため、女達には自習と称して自分で自分の身体の開発をさせていたのだった。

自習と言えどもその成果は後で確認される事になるので、その恐怖に女達は手を抜くこと無

く、自分の弱所の改善や未開発の快感部分の開拓に脂汗を浮かべて臨んでいた。

蔵の中の其処彼処で行われている淫具により自らの手で責める呻き声や、嬌声を発する女達の巻き上げる、噎せ返るような淫風に煽られたのか、目は其処此処に泳ぎ、だらしなく開いた口からは涎が筋を引いて垂れていた。

大きな体は薄汚い浴衣一枚を纏っただけで、見苦しくはだけた裾前からは、まるで大きな石でも入れたようにモッコリと膨らむ汚れた禪が突き出していた。

その禪の盛り上がり具合から、その下にどのような巨大なモノが隠されているか容易に想像できた。

お銀は男の禪を捲り上げ、屹立したモノを目にして目を見張った。

まるで焼き魚の様に黒く斑に染まったソレは太さ長さとも玄斎と遜色無いか、あるいは凌駕しているのでは無いかと思われた。

勃起して直角に突き出しているモノを両手に握り締め、その硬さを確認し、鼻を近付け男性器の発する臭いを嗅いだ。

長い間風呂に入っていないため膾えた臭いが鼻を衝いた。

ムカつく臭いも気にせず、突然お銀はそれを口に含んだ。

痴呆の様な表情を浮かべつつも、お銀の行動に驚いた様な顔を浮かべた。

お銀は持てる口技を駆使してそれをしゃぶり続けた。

涎を垂れ流し、だらしのない顔をしていたが、お銀の妙技の前に奇妙な声を発して快感に歪むように感じられた。

お銀は口一杯に頬張りながら、いくら舌先で責め上げても容易にこの男は落ちないと感じた。隆起したモノから口を離したお銀は、「此奴中々良いお道具をお持ちじゃないか」と一言口にし、裸になって床に仰向けになる様に言った。

お銀の言葉が理解できないのか、杉作達が言葉を掛け介添えし床に横たえた。

まるで熊のように毛深く、特に腹から股間にかけて長く縮れた剛毛が繋がっていた。

男は衆目の前で裸身を晒しても羞恥を感じることは無いようであり、剛毛の密生の中から逞しい肉茎が天に向かって突き上げていた。

お銀は着物の裾を捲ると、男の上に跨った。

剥き出しにした無毛の陰部を男の顔に擦り付け反応を見守った。

先程来のお銀の行動が眠っていた男の性衝動を目覚めさせつつあるのか、お銀の女の匂いを鼻腔一杯吸い込んだ男の股間のモノは又一段と膨らんだように感じられた。

男の荒い鼻息をその部分に感じ、お銀も身体が燃え上がって来るのを感じていた。

あっ・・・と声を上げてピクッと身体を震わせた。

男の顔面に腰を降ろすお銀の陰唇から滲み出た樹液を男は舌を延ばして掬い取った。

男の舌の動きが次第に激しくなって来るのを感じていた。

ああ・・・良い・・・と思わず声を上げそうになった。

この様な知能では、誰も性技について教えた人が居るはずもなく、恐らくこの男の本能として自然に持っている能力だと想像した。

それなら、この男は女と性交するだけの肉体、生きた性交用人形と同じでは無いかと恐ろしい感情に襲われた。

男の顔から股間を浮かすと、屹立するソレに向かい、股間の中心に押し当て、ゆっくりと腰を沈め始めた。

ああー太い！ジワジワと腰を降ろし、肉茎の大きさを確かめていたお銀であったが、鍛え上げられた女肉をいっばいに押し開き侵入して来るソレは過去に経験の無い大きさであった。そして灼熱の岩の様に熱く硬かった。

膣内にそれこそ紙一枚入る隙間もなくピッチリと食い込んだ男の肉塊は、まるで火に炙った岩石を押し込まれたように感じた。

又、長さと言い雁の形と言い、肉洞内の女の急所に的確に当たっているように感じた。

男のモノを下腹に収めたまま、腰を上下してみた。

お銀の鍛え上げた女陰に擦り上げられても射精の兆候は見られなかった。

「お前達、中々良い物を見つけて来たね！これは大した物だよ！馬鹿だから客に受けるためのお愛想の台詞や体位せりふの変更の段取りは覚えられないだろうけど、演技としての白黒じゃなくて真剣勝負の白黒なら十分務まりそうだね。客も在り来たりの打ち合わせ済みの艶技を見せつけられるよりも台本無しの男と女の真剣勝負の方が喜ぶしね・・・」

杉作達三人の方を見てほほ笑んで口にした。

さて、この捨太郎という馬鹿が使い物になるかならないかの試験は終わった一と、腰を浮かして身体を離そうとした時、突然捨太郎が下から両腕を伸ばしがっちりとお銀の腰を掴んだ。そして、お銀の下腹に巨大な陰茎を突き立てたままゆっくりと腰を上下させ始めた。

「何をするんだよ？もう良いんだよ！終わったんだよ！」

慌てたお銀が男の覚醒を促す様に顔をピシャピシャと叩いた。

そして、そこに在る捨太郎の目を見てゾッとした。それはさつきまでの精薄者の焦点の定ま

らないドロンとした目では無く、肉欲に飢えた猛獣の目が変わっていた。

恐怖を感じたお銀が悲鳴を上げて逃げようとするのを怪力で抑え込んだ。

そして、お銀の狼狽ぶりにも関わらず激しく腰を振り立て始めた。

慌てた太兵衛達が、まるで猛獣使いが暴れる猛獣を抑えつけようとするかのように、捨太郎にしがみ付き二人を引き離そうとしたが、まるでうるさい蠅を追い払う様に払いのけた手により三人はいとも簡単に吹き飛ばされてしまった。

最早獣欲に目覚めたこの怪力の男からお銀を助けることは不可能と誰もが思った。

玄斎の膂力をもってすれば、捨太郎と互角に対峙できるかも知れなかったが、玄斎は顎を指先で撫でながら、お銀の狼狽ぶりを面白そうに見詰めていた。

お銀は何時の間にか捨太郎に組み敷かれ、まるで暴漢に襲われる少女のように悲鳴を上げていた。

お銀に覆いかぶさる捨太郎の腰の動きが早くなった。

男の荒い腰づかいと暴行に晒される膾の感覚が、忘れていた肉の記憶を呼び覚ましつつあった。

一体自分が男から強姦され泣き叫んでいたのは何時の頃であつたろうか？と、記憶を辿った。

その絶望的な悲しみを乗り越えて、自分の身体を鍛え上げ、何時か逆に男をキリキリ舞いさせてやるんだと心に誓って、今日まで来たのではなかったか？

誰も助けに入らない孤立無援の中で捨太郎から襲われる状況は、幼い頃の大人たちの嘲笑の輪の中で強姦され、泣き叫んでいた自分の姿に重なった。

大人の女となったお銀には捨太郎の激烈な攻撃が単に痛みだけでなく、妖しい快美感を伴うものであることが分かっていた。

このまま甘美な桃源郷の中に身を投げ入れ落下微塵にこの身を碎いてしまいたい―と、ふと願望した。しかし、それは人から嘲られ蔑まれていた少女時代に逆戻りすることだとの心の奥底からの叫ぶ声を聞いて気を取り直した。

そして、自分の身体を弄ぶ猛獣の様な男と直接対決する勇気が沸々と湧いてきた。

それは、自らの身体を男を蕩かす淫蕩な坩堝と化した女と性に狂った猛獣と化した男の生身の肉体を駆使した真剣勝負であった。

本能の赴くままに女肉を貪る猛獣と男の淫情を手玉に取って弄ぶ女調教師の戦いであった。二人は互いに上になったり下になったり様々な体位を展開し、汗まみれになって肉弾戦を繰り広げた。

結い上げられていたお銀の髪はおどろに乱れ、長い髪が顔の半分を覆っていた。

首を振って乱れた髪をさっと後ろにやると、お銀の方から激しく腰を使い捨太郎を責め上げた。

身体から発する熱に耐え切れず、お銀は身に纏っていた服を全て脱ぎ捨てた。

乳白色の豊満な胸が見守る男達の前に露わになった。

二人の腰の運動により柔らかな乳房がブルンブルンと踊る様に跳ね上がっていた。

その露出した乳房を捨太郎は両手で握り締め、揉みしだき、口に含んでお銀に悲鳴を上げさせた。

これまで一方的に責められていたお銀が突然逆襲を始め、その攻撃が攻めあぐね始めたのを見計らい捨太郎の方から再び反撃が始まるなど二人の鬼気迫る肉弾戦に取り巻く男達は驚異的な目で見詰め続けた。

二人の汗と淫液が飛び交う男と女の格闘は既に半刻（おおむね1時間程度）に迫ろうとしていた。

お銀と捨太郎を取り巻く輪になって、男と女の真剣勝負を見続ける男達は、いつの間にか囚われの女達を見張る事も忘れ、固唾をのんで勝負の行方を見守り続けた。

男達から肉体鍛錬の自習を命じられた女達も、身動きもできず、ブルブルと身体を震わせながらも二人の交合の様子に目は釘付けとなっていた。

女を中心部を突き続ける捨太郎の硬い肉塊が女肉の中で弾むたびに脳髓をズンズンと刺激していた。

すっかり疲労困憊したお銀はこのままでは自分がイッてしまうと恐怖を覚えた。

しかし、鍛え抜かれたお銀の肉洞に深々と埋める捨太郎のモノも後少しで爆発しそうな兆候を示している事が感じられた。

お銀は残された体力を振り絞って、これまで身に着けて来た技術を全て動員して捨太郎のモノを扱き上げた。

二人が絶頂に達したのはほぼ同時であった。

二人はけたたましい叫び声を発して果てた。

これまで檻に入れられて女との交接が絶たれ睾丸内に溜まりに溜まっていた白濁液がドッと吹き出し、お銀の膣内に収まりきれず股間から溢れ出ている。

頂点を極めた満足感でお銀の身体を抱きしめていた力が緩んだ隙にヨロヨロと身体を逃がした。

解放され、荒い息を吐き、流れ出た汗を手拭いで拭きながら、「お前達、本当にとんでも無い化け物を連れて来たもんだね！」と、疲労困憊し憔悴しきった貌で杉作達を睨んだ。

「でも、これだけの化け物なら使い道も在ろうってもんだよ。白黒の男役にはぴったりかも知れないね。この男の底抜けの精力には客が腰を抜かすだろうよ・・・そうだね？最初はお藤とお福の母娘とこの野獣男を掛け合わせてみようかね」と、乱れ切った髪をかき上げながら口にとすると、

「こんな化け物イヤーッ！慎之介様が良い！」と、お福が悲鳴を上げた。

この牢に閉じ込められてから慎之介に興味以上の関心を寄せるお福が本音を口にした。

ハッとしたように千鶴がお福の方を見た。

「慎之介、お前も随分とモテた物だね・・・」と、面白そうに慎之介の方に視線を送った後、お福に振返って、「でも駄目だね！そんなに慎之介に抱かれないなら珍芸の一つも身に着けるんだね。此処にいる千鶴を見てごらんよ、慎之介恋しさで、もう珍芸を三つも身に着けてしまったよ・・・」と、笑った。

「分りました！これからは心を入れ替えて珍芸の修行に励みます！だからこんな化け物は堪忍して！」

お福の悲痛な声に千鶴がキッとお福を睨みつけた。

「しかし、困りましたな、こがいなバケモン放し飼いにしておくことも出来ません・・・」惣右衛門が心配そうに声を出した。

「可哀そうだが、檻に閉じ込めておくしか無いな。」

「しかし、檻は余裕をもって造ったつもりでしたが、四つしかおまへんし、もう追加で作る余地もおまへん」

一つ目の檻には慎之介と千鶴の若夫婦が、二つ目の檻にはおセイとおシズの姉妹が、三つ目の檻にはお藤とお福の母娘が閉じ込められていると説明した。

「そうなると一人住まいの志乃殿の所に同居して頂くしか無いな・・・」

玄斎の言葉に志乃がヒェと悲鳴を上げた。

「志乃殿もとうに結婚していてもおかしくない年頃、この薄ら馬鹿を亭主に迎えられても良いであろう・・・」と、青ざめる志乃を見詰めながら笑った。

「姉上！」

「志乃様！」

今晚からこの精力絶倫の野獣のような男と志乃が一つの檻に閉じ込められる事になると聞いて、慎之介も千鶴も涙声を上げた。

突然の事態に恐怖に狼狽える志乃に向かってお銀が、「心配しなくても良いさ、あんたの檻に入れる前にはこの垢塗れの男を綺麗に洗って上げるよ！」と、陰険な目で笑い上げた。

「そうと成ったら、祝言の準備をしないとイケませんな！」

惣右衛門が嬉しそうに言葉を発した。

「そしてアンタらは未届け人や！」

おセイ達囚われの女と杉作達不良下士を見て笑った。

「ああ・・・志乃様！」

「姉上！」

慎之介と千鶴が悲痛な声を上げた。

祝言と初夜

蔵の中に奇妙な宴会場が作られた。

女達は抵抗しないよう全員後ろ手に縛られ床に正座していた。

全裸のまま高手小手に縛られ、前に回した縄で乳房の上下を二重三重に縛られ縄に縊り上げられた前に突き出した様々な乳房が一行に並んでおり、五人の女の乳房の大きさや形の違いがありありと見えた。

この女達の群れの中で慎之介の平らな胸が奇異に映った。

花嫁とされた志乃だけが上座に敷かれた座布団の上に正座していた。しかし、全裸で後ろ手縛りの姿は他の女達と変わらず、唯一の違いは、胸から上を白粉で白く塗られ唇には紅を引かれるなど丹念に化粧を施されている事と、櫛や笄を沢山挿した優美な高島田に結われた頭に角隠しを載せているだけだった。

志乃の隣には捨太郎が胡坐をかいて座っていた。花婿然と惣右衛門の着古した紋付き袴を着用していたが、惣右衛門とは身体の大きさが格段に違うため、着物の前から腹が飛び出し、珍妙な姿であった。

馬鹿なりに隣に座る美女を自分の物に出来ると理解しているのか、笑い声の様な意味不明の言葉を発し、だらしなく口を開き涎を垂れ流しながら、チラチラと志乃の方を見ていた。

花嫁花婿を上座に据え、上座から下座に向かって左右に玄斎達が並んで座っていた。杉作達も二人の結婚の未届け人として、この左右の列に加わっていた。

あまり頼りにはならないが、この怪物が突然暴れ出した時の為の猛獣使いの役を期待したのかも知れない。

下座には志乃と対面するように慎之介も含め囚われの女達が詰めていた。

綺麗に化粧を施され、優雅に高島田に結い上げられた志乃の顔を見て、何と美しいのだろうと心を打たれた。

しかし、本当の婚礼の宴ならば優美な花嫁衣裳を身に纏っている筈が、全裸で高手小手に縛り上げられ、その上、隣には獰猛な熊のような男が鎮座している現実に胸を押しつぶされそうになった。

この化物のような男の人身御供とされた志乃に同情して皆啜り泣いていた。

その背後では、お銀が陰険な笑みを浮かべて座っていた。

玄斎がだみ声を張り上げ、奇妙な祝詞^{のりと}を上げていた。

玄斎達の言うところの婚礼の宴が進んでいた。

男達はこの妙齢な武家の姫と熊のような巨体の馬鹿男の奇妙な祝言に笑い声を上げ、裸の女達を肴に酒を煽っていた。

「これで、お前はん達も立派な夫婦^{みょうと}や、ただこの新郎は色んな女の相手もせならんさかい時々浮気するで！我慢できるか？」

媒酌人のように志乃の隣に座り、すっかり酒のまわった惣右衛門が嬉しそうに笑い声を上げた。

「それを言うなら新婦の志乃殿も色々な男に身体を預けねばならん浮気女じゃ！」

と、篤馬も酒に酔った顔に笑みを浮かべて応えた。

「真に二人とも色狂いの似た物夫婦で御座いますな！最後に夫婦固めの仕上げとして三々九度の杯を交わすんや！」と、上機嫌で声を上げた。

「しかし、志乃殿はこの様に両手を後ろに縛られておる。どうするつもりじゃ？」

「先ず志乃様に捨太郎のモノをしゃぶって頂いて、染み出た物を啜って貰えば宜しい。そのお返しに捨太郎は志乃様の股の間から滲み出た物をしゃぶって貰えば、立派な夫婦固めの三々九度やおまへんか？」

「おお！それは良い考えじゃ！」酒で顔を赤く染めた篤馬が笑い声を上げた。

半次郎たちが三人掛で捨太郎から袴を脱がした、
剛毛の密生する下半身には白い禪を残すのみであったが、隣に座る志乃の身体から発する典雅な香りに誘発されたのか、既に何かを期待するように逞しい肉塊が禪を突き上げていた。
「さあ！志乃殿、いよいよ三々九度の夫婦固めの式じゃ！先ず捨太郎のモノを食わえて滲み出る美酒を啜るのじゃ！」

篤馬が角隠しを被った志乃の首根っこを掴んで捨太郎の股間に押し付けようとした。
捨太郎も、状況を理解しているのか、自分で禪を横にずらした。その下から巨大な肉茎が姿を現した。

志乃も捨太郎とお銀のまぐわいを遠目に見て、捨太郎のそのモノの大きさに驚かされたが、今日の前に見せつけられ思わず恐怖に身が竦んだ。

供に天を戴かざる憎い仇に乙女を奪われ、凌辱の限りを尽くされ、更に実の弟とも交接を強要され、何とかこの強制された悲惨な事態を全うするため、自分は男の生き血を吸う淫婦なのだと言の心に言い聞かせ、自らの心に淫風の嵐を巻きたて、その嵐の中に身を投げ込み我を忘れることにより、男を我が身に受け入れて来たが、最近では男の淫器を見、淫靡な臭いを嗅ぐだけで自然に淫蕩な嵐が心の中に渦巻き始め、この身体の中に淫乱な血がドクドクと流れ始めるような恐怖を感じる様になっていた。

捨太郎の醜怪なモノを見詰める内に最初の恐怖心を押しのけ、淫らな女の本性が、「それを欲しい」と、心の隅で囁き始めるのが聞こえていた。

捨太郎の肉茎の発する獣じみた男の臭いが鼻を衝いた。その臭いにまるで麻薬を嗅がされたようにまともな神経は薄れて行き、意識しない内に股間の女の部分からジワジワと熱い樹液が染み出し始めた。

最初は篤馬に首を押さえ付けられ、強制されて捨太郎の股間に顔を持って行った志乃であったが、突然自らその悪臭を放つモノに顔を向け、その熱く滾る肉塊の先端に鮮やかに紅を引かれた優美な唇を押し当てたので周囲から驚きの声が上がった。

捨太郎の熱を帯びた巨大な亀頭部に唇をクネクネと押し当てる様子に、男達の歓声が上がった。

白く塗られた顔から独立したように見える赤い唇が捨太郎の黒褐色の肉塊の上を這いずり回る様子に、男達は赤い淫蕩な魔物が男肉を求めて彷徨う姿に見えた。

男達の驚きと好色な視線に晒されながらも、今の志乃の心の中には桃色の霧が沸き上がり、

その暖かな霧に身を包まれ、男達の笑い声も遠くの世界のように感じていた。

今や淫蕩な世界に没した志乃は、舌を延ばして肉茎の裏筋を舐め、鈴口に舌先を這わせてしみ出た体液を吸った。

ツンと舌を刺激する捨太郎の男の体液が益々志乃を淫脈な世界に誘った。

無意識の内に顎を大きく開け、黒ずんだ亀頭を咥え込んだ。

突然の志乃の大胆な行為に驚きの声が上がった。

それは顎が外れそうな程巨大なモノであったが、何かに憑かれた様に夢中で舌を動かし頬を窄めてしみ出るものを吸い上げた。

絶世の美女の口技に煽り立てられたのか、捨太郎の表情が変わり息が早くなって来た。

角隠しを冠った頭を両手で掴むと深く股間に押し付けた。

太くて長い陰茎が喉を扼し、呼吸が止まる苦しさに喘いだ。

そんな志乃の様子に構わず、両手で掴んだ志乃の頭を激しく前後に振り立てた。

真^ま面^めな意識を喪失してしまった志乃は、激しく出入りする肉塊を舌先で扱き続けた。

突然捨太郎が奇声を発して腰をビクビクと痙攣させた。

「おお！見よ！志乃の奴、口だけであの精力絶倫の薄ら馬鹿から搾り上げよったわ！」

「先走りの水だけ吸えば、三々九度として良しと考えておましたが、まさかここまでやりよるとは！」

「お銀の肉体訓練も大したものじゃ！最早口技に於いてはお銀と並んだのではないか？」

「ささ、新婦として新郎が放出したモノを残らず飲み干すのじゃ！」

捨太郎から大量に口内に放出され咽ぶ志乃に声を掛けた。

「次は新郎が新婦の流す露を吸り上げれば三々九度の夫婦固めは終わりじゃ。」

杉作が捨太郎の耳に何やら囁きかけた。

捨太郎は杉作の言葉は理解できるのか、のそっと身体を起こすと、乱暴に志乃の身体を仰向けに押し倒した。

そして両足首を掴むと思いつき左右に押し広げた。

志乃の頭の中を占めていた淫欲の霞が少しずつ晴れ、意識を取り戻しつつあったが、両足を掴んで股間を露わにしようとする捨太郎の巨体を間近に発見し、悲鳴を上げ、脚に力を込めたが、捨太郎の腕力の前には抗しきれずキリキリと脚を開いていった。

「おお！志乃殿も充分に濡れそぼっておるではないか！」

ぐっしょりと花蜜に濡れる志乃の無毛の股間が露わとなって歓声が上がった。

これ以上無いほど左右に押し広げると、まざまざと姿を現した女の中心に顔を押し当てた。

捨太郎のがさつく唇を柔褰に受け、ウッと声を上げ身体を仰け反らした。

捨太郎はそのまま舌を伸ばし、溢れ出た蜜を吸り始めた。

捨太郎の肉質の厚い舌が志乃の柔褰の上を這い回り、窄めた舌先が淫孔を抉った。

志乃の心に再び淫蕩な霧が掛かり始め、正常な意識が薄れて行った。

今や志乃の花園からは、濃厚な愛液がドクドクと流れ始め、花に群がる虫のように捨太郎が吸い続けた。

舌先で蜜を掬うピチャピチャという音が響いた。

志乃の心を覆っていた桃色の霧の中で、突如雷鳴が轟き、強い電流に打たれたように身体を硬化させた。

「ふふ・・・舌だけで志乃殿をイカすとは捨太郎も大したものじゃ！」

捨太郎に責められ股間をしどけなく開いたまま余韻に浸る志乃を見詰めて声を掛けた。

「これで三々九度の儀式は終わった。晴れてお前たちは正式な夫婦じゃ！一つ檻の中で末永く睦まじく暮らすが良い・」

捨太郎から与えられた快感が凄かったのか、未だに秘裂から樹液を滴らせ身悶えさせていた。

そんな甘美な余韻に浸る志乃に捨太郎が身体を被せていった。

意識が朦朧とする志乃であったが、メリメリと膣孔を引き裂くように侵入して来る異物の痛感に悲鳴が上がった。

「おお！三々九度が終わったばかりで、もう初夜か？」

「一つ檻の中に放り込み、水入らずで仲良く繋がらせてやろうと思っていたのに、イヤハヤ気の早い男じゃ！」

肉欲に狂った捨太郎は猛烈な勢いで志乃の身体を突き続けた。

巨大な肉塊が志乃の柔肉をグィと押し込み、次に周囲の柔褰を引きずり出す光景に目を見張った。

お銀の様に捨太郎と正面から対峙するだけの経験も無く、捨太郎の激しい攻撃をまともに受けて志乃はヒイヒイと悲鳴を上げて身悶えていた。

「流石に誰かと違って、若い美女とあっては捨太郎も逸っておる様じゃの・・・」

「ふん！年増の醜女ぶおんなで悪う御座いましたね！」

玄斎の言葉拂りに、お銀が鼻白んで応えた。

見世物小屋

恵比寿屋の広大な庭の一郭の竹林を切り拓いた更地に世俗の見世物小屋に似せた建物が建
られていた。

惣右衛門は、ここで不定期に囚われの女達を引き出し珍芸の見世物を開いていたのだった。
ここに招待されるのは藩の重役や仲間の商人達であり、惣右衛門は女達を使って淫らな出し
物を演じさせたり、その後女達に招待客の相手をさせる等の接待を行っていたのである。

その日招待されたのは惣右衛門と気脈を通じる御用商人仲間であった。稲葉屋の経営を引き
継ぎ、実質的に主人におさまった大番頭も加わっていた。

御用商人達は閉じられた幕の前で本日の出し物について期待しながら仲間同士でガヤガヤ
と談笑していた。

毎回惣右衛門は彼らを招待する度に趣向を凝らした猥褻な出し物を提供したが、彼らの最も
気に入っていたのは、志乃と慎之介の繰り広げる珍芸であり、彼の演目としての実の姉弟に
よる白黒であった。

まるで錦絵から抜け出して来た様な色白の美小姓と武家の姫としての典雅な気品に満ちた
美女との迫真の肉と肉の絡みの舞台に期待を昂らせるのであった。

仲間内で酒を酌み交わし、本日の出し物への期待が高まった頃、惣右衛門が姿を現し、幕の
前に立った。

「本日は良^よくお越し下さりました。本日の主演は慎之介と志乃やおまへん・・・」

志乃と慎之介が出ないと知らされ少しがっかりしたような声が上がった。

「その代わり、今日舞台に上がるのは皆さんも良くご存じの人でおます。」

自分達が良く知っている人と耳にして、訝し気に惣右衛門の方を見上げた。

幕の裏手の準備が整うのを気にしながら、惣右衛門の心に、今日の演者を観衆が見た時、そ
して惨めな姿を日頃顔見知りの男達に見られた時、双方はどのような反応を示すだろうかと、
心の中には淫虐などす黒い雲が広がって行った。

そして、この淫虐な舞台を更に盛上げる為に先ほどまで行っていた準備の様子を思い出して
口の端を淫靡に歪めた。

「ほら、舞台に上がるには、お下の毛を剃り取って其処を丸出しにするのが決まりや！志乃や千鶴やおセイとおシズを見てもいい。皆^{みんな} ツルツルやろ！」

惣右衛門が剃刀を手にお藤に迫った。

お藤とお福の母娘は全裸のまま両手を頭上に縛り上げられ、その縄は天井の梁を通して、立位に固定されていた。

そして両足首にも縄が縛り付けられ、左右に引いた縄により扇の様に開かされ、太股の間の豊かな肉付きの部分が隠しようもなく開け広げられていた。

自分の夫と息子を殺した憎い男の前に女の羞恥の部分を晒す憤怒と恥辱にお藤もお福もフルフルと震えていた。

「お待たせしましたのう・・・それでは、ワテがお藤さんの下を剃らせて頂きます。」

惣右衛門が剃刀を手にお藤に迫った。

「それでは、儂は娘の方を当らせて貰おうか・・・」

と、玄斎も剃刀を手にした。

「ああ・・・お止め下さい！お許してください！」

夫と息子を暗殺した首謀者と下手人が自分達の恥ずかしい毛を剃り取るという行為に、惣右衛門の計り知れぬ陰虐さに恐怖を覚え、身も世も無げに哀願するのであった。

「お藤さんのココの毛も今日で見納めや・・・」

開股縛りにされたお藤の前に惣右衛門がどっかと胡坐をかいて座った。そして目の前に位置するお藤の艶やかな茂みを繁々と見詰めた。

柔らかな肉付きの下腹と大腿が重なる三角点に繁茂する黒草は細く繊細で普通の熟女より毛量も少なく、その茂みを通して奥のぷっくりと柔らかく盛り上がった肉の貝が透けて見えそうであった。

惣右衛門は、そんなお藤の品を感じさせる飾り毛を気に入っており、剃り上げるのは惜しいと感じていたが、一方ではそれを奪い取り、女の正体をまざまざと露出させられた時、この女がどのような羞恥を晒すか期待が込み上がって来るのも感じていた。

それで、剃刀を手にしたまま名残惜しそうにジロジロと鑑賞していたのであった。

「おや！此処に白いのが一本在りましたで！アンタも女手一つで苦労しはったんやな！」

と、漆黒の下草から一本の白く変色した毛を発見し、指先で摘まんでプッと引き抜いた。

突然陰毛を抜かれた痛みに顔を顰めて悲鳴を上げた。

「さあさ・・・此処を綺麗さっぱり剃り上げたら童女みたいに若返って、もう白髪の手など心配することはありませんで・・・」

と、柔らかな毛を指先で撫で回し、毛の流れと逆方向に掬い上げたり、左右に押し分けて女陰を露わにしたりして翳った。

「おや？何か匂って来た様な？」

惣右衛門を嫌悪する心を裏切って、陰湿で執拗で、そのくせ女の泣かせ所を熟知した指先翳りに根負けしたようにお藤の女陰が熱を持ち始め、恥ずかしい雌蕊の匂いを立ち上らせ始めていた。

「ああ・・・良^えい匂いや・・・」

両手の指先で陰毛を掻き分けられ、露出した秘匿されていた花園に鼻を押し当て、熟した女の濃厚な匂いを鼻腔一杯吸い上げながらウツトリした声を上げた。

「ああー！何時までもこないな事してる時やおまへん！もう、お客が入り始めている頃や！」

と、水捌けを手を下草を濡らし始めた。

「しっとり柔らかくて剃りやすそうな毛や・・・」

と、水に塗れた艶やかな毛を撫でながら剃刀を手にした。

「父上！別に水捌けを使う必要は御座いませぬ！」

お福の股間に水捌けを這わそうとする玄斎の篤馬が声を掛けた。

「しかしお福の下毛は母親に似ず多毛で剛毛、水に浸して柔らかくせねば剃刀が通らぬであらう？」

「それなら、お福に水を作らせれば宜しかろう。この前、抱いた時の感じから、この若い瑞々しい身体は非常に濡れ易い身体と見ました！」

と、懷から一本の張型を取り出した。

「お福！これを見よ！これはお前の母^{かか}様がヨガリ狂われた張型じゃ！これで存分に楽しんでみよ！」

と、張型を握り締め人の字型に縛り上げられたお福の目に見せ付けた。

「ああっ！嫌で御座います！」

これまで幾多の女の情念と淫液を吸い上げ斑に変色した禍々しい物を目にして恐怖の色を浮かべた。

「何の、何の、お前が色恋が好きな奔放な女であることは判っておる。これ迄も店の金を持

ち出して遊び歩いていたのだろう？」

流石に男に身体を許した事は無かったが、店の金を持ち出して、流行の着物を買って、友達と一緒に芝居見物や茶屋で遊び歩いていたのは事実だけに、お福の抵抗が止んだ。

「ほら、お前の母様が存分に楽しまれて夢見心地に浸った逸物でお前も夢見心地に浸れば良いのじゃ。」

と、言うとき張型の先端に唾を吐き掛け、扇の様に広げられた中心部に当てがった。

「アアーッ！イヤ！イヤ！」

体内に押し入って来る異物の感触に叫び声を上げた。

「何の、何の、何が嫌なものか、一度男の味を知った身体は正直なものじゃ！ほれ！この通り旨そうに呑み込んでゆくわ！」

フー、フーと荒い息を吐きながら、かつて自分の母親を狂わせたモノをジワジワと受け入れていく。

その肉の花びらを押し開き沈み込んで行く様子に、「お前には元々男を求める淫乱な血が流れておる。武家の姫として厳格に育てられた志乃殿と違って、町家の我儘娘として奔放に育ったお前は自制するものが無い。今に男が欲しいと喚き散らして、自ら腰を差し出す様になるわ！」

やがてそれが根元まで埋め込まれた事に気付いて、「まだ女に成ってから幾日も経たぬと言うのに、早々この業物を呑み込んでしまったわ！おシズなど未だに難渋していると言うのに！やはりお前の身体は男を求める様に出来ているのだ！」

篤馬は深々と突き立てたモノを緩やかに操作しながら、如何に淫蕩な女であるか、お福の耳に注ぎ続けた。

「柏木様、もう客も集まり出した頃だす！手短にお願いします！」

篤馬がお福を相手に悪い癖を出し始めたのでは無いかと心配して、剃刀を走らせながら声を掛けた。

「分っておるわ！剃り良いように汁を出さしておる処じゃ！」

篤馬の言葉通り、筒具を握る手をビショビショに濡らす様に雌汁が滴り流れていた。

「若くて瑞々しい身体だけに水気も多いわ・・・ほら、こうして乳房を揉んだらどうじゃ？」

と、片手でゆるゆると淫具を操作しながらもう一つの手で若くて張りの在る乳房を揉みたてた。

母親のお藤の豊満な乳房はまるで付き立ての餅の様に柔らかく手に吸い付く感じであるが、

娘の方は、もうすぐ熟す果実のような張りのある乳房だと思った。

これ位流せば充分だろうと筒具を引き揚げて、溢れ出た淫水を春草に塗り付けた。

漆黒の茂みがぐっしょりと濡れた。

「お待たせいたしました、それでは、父上どうぞ」と、剃刀を手にする玄斎に持ち場を譲った。

「全く娘のくせに母親以上の茂みを繋らせおって。ませた娘じゃ！」

剃刀を当てながら言葉でお福を罵り続けた。

剃刀の通った跡には白桃の様な肌が露わになった。

ゾリゾリと肌を罵る剃刀の気持ちの悪い刺激に、ヒッヒッと小さく悲鳴を上げながら身体を震わせた。

その頃、惣右衛門はお藤の下の毛を粗方剃り上げ終わっていた。

「そら！お藤さん、綺麗になって来たで！まるで子供の頃に帰った様な気分やろ？縦一文字に切れ込んだ切れ口が良く見えるで！」

と、仕上げに掛かりながら上機嫌で声を掛けた。

「ほれ！見てみい！可愛いもんやおまへんか？」

と、手鏡を持ち出してその部分を照らしてお藤に見せ付けた。

無意識に目にした剥き出しにされた女の部分の悲惨な様子を目にして顔を背けて硬く目を閉ざした。

「何を目を逸らしてますのや？こんなオボコみたいに可愛いのに。今まで此処を綺麗に剃り上げて若返った自分を亭主に見せた事はおまへんか？」

顔を背け目を硬く閉じ、口を結ぶお藤に、「さよか？亭主も見た事無いんかいな。ワテが初めてゆう事かいな？これは良い目の正月や！」と、笑い掛けた。

「そう言ってる間にお福の方も剃り上がったみたいや！二人並んでみい！」

男達は母子を立位で開股に縛っていた縄を解いて、二人を並んで立たせ、その部分について口々に評価して笑いあった。

「そやそや・・・これを忘れたらいかん！」

惣右衛門が太めの麻縄と何やら粘っこい液体の入った容器を持ち出して来た。

意図を察した玄斎父子も手伝って、手早く二人の女の腰に一巻きさせると臍下で結び、グイッと下に向かって引いた。そして、女の中心の位置を確認して結び球を作った。瘤が作られた縄は惣右衛門が用意した不気味な液に浸され、縄目の奥までたっぷりと染込ませた。それは、女を発情させるためにお銀が調合した秘伝の催淫液であった。大きな鉢の中にはトロロ

をおろして作った様にも見え、あるいは精液のようにも見える粘稠な液がたっぷりと満たされていた。

「縄に塗るだけや無く^のて、此処の奥にもたっぷりと塗り込んでおいて上げまひよ。」

お藤を責め懲る事に異常な執念を燃やす、惣右衛門が三本に揃えた指先でたっぷりとトロロ汁の様な液を掬い取ると、そのままお藤の肉の穴に練り込んだ。

突然侵入して来た惣右衛門の指に狼狽して声が上がり、たっぷりと柔肉を置いたお藤のしみ一つ無い白い尻がユサユサと揺れた。

媚孔を掻き分けて侵入して来た三本の指がワサワサと蠢き、女洞の奥深くの柔襞の隙間まで丹念に媚薬を塗り込む痛切な感覚と、女洞の粘膜の奥深くまで浸透して来るような気味の悪い粘稠な薬剤の感触に呻き声を上げて腰を振った。

隣では篤馬がお福の淫芯奥深くまでトロロ汁を塗り込んでいた。

「こんだけでは足りんやろ？もっともっと塗り込んで上まっさかいにな・・・」

惣右衛門はお藤の膣内を粘っこい液で一杯に満たす勢いで、容器の中にたっぷりと入れられた汁に指を伸ばした。

「ああー！何してんや！出したらあかんがな！」

お藤の秘裂から指を離れた隙に、塗り込めた媚薬が肉孔から滴り落ちるのを見て眉を吊り上げた。

「ホンマに絞まりの緩い女や！もっとおいどに力を込めてきつく穴を閉じんかいな！」

と、怒鳴り声を上げると激しくお藤の良く張った尻肉を殴打した。

惣右衛門に平手で激しく打擲されて澄んだ高い音が響き、柔らかな尻たぶがブルブルと震えた。

惣右衛門の暴虐に逆らう心も折れて、「ああ！御免なさい！」と、泣き叫ぶように謝り続けるお藤であった。

その後何度も催淫液を掬い取って塗り込めた後、「さあ、出来たで！この瘤で蓋をしとけば、もう流れ落ちんやろ！」と、臍下から垂れ下がった縄を手に口の端に笑みを浮かべた。

催淫液をたっぷりと吸い込んだ縄は女達の股間にキリキリと食い込み、縄の瘤は過たずその部分を抉った。

母娘は秘裂を切り裂く麻縄の痛みと、粘っこい汁の異様な感触に身体をブルツと震わせた。

「それでは、お客も揃^{そろ}った様やし、お連れしましょうか・・・」

二人を改めて高手小手に縛り上げ、縄尻を引いて歩行を促した。

股間を割るざらついた縄と秘芯を扶る瘤が歩行を開始した二人に突然刺激を与え、思わずウツと呻き声を発して身悶えた。

歩みを進める毎に股間の縄が責め苛んだ。そして、気味の悪い液を塗り込められた粘膜部分がジワジワと熱を帯びて来るのを感じていた。

恵比寿屋の邸内に造られた小屋は市井の見世物小屋をまねて作っているの、歌舞伎や能の舞台に比べるべくも無いほど狭く、客席も二十人ほどが座れば鮎詰め状態であり、全員立ち見にしても五十人くらいが限度であったが、その分客席と舞台の間隔は近く、客が手を伸ばせば舞台の女に触れることが出来るほどの距離であり、舞台の上の女の息吹が聞こえるくらい緊密感があった。

桃花の謡う卑猥な端唄が流れ出し、それを皮切りにお囃子が始まった。

賑やかなお囃子に併せて幕が左右に拡げられた。

そして、舞台の中央に悄然と立つ女の姿を見て、客達から響^{どよめ}きが上がった。

「あれは、稲葉屋の女将とお嬢さん！」

一糸も纏わぬあられもない姿で舞台に立たされる二人の女は口に手拭いをキリキリと絞った猿轡を厳しく噛まされ、頬肉に食い込む手拭いにより醜く顔は変形しているとは言え、間違いない日頃見知っている稲葉屋の母娘であった。

異様な光景に客席は水を打ったように静まり返った。

幕が開いて視界に現れた観客席を埋める来場者の顔を見て、お藤とお福も青ざめた。

口に堅く食い込んだ猿轡が悲鳴を封じてた。

身を屈めて少しでも惨めな体を隠そうとするのを背後から支える黒子姿の男達が防いだ。

黒子により背後から羽交い絞めにされ藻掻くお藤とお福の身体は麻縄により高手小手に縛り上げられ、背中から前に回した縄により乳房の上下を二重三重に巻かれ蠱惑的な乳房を上下から縊り上げていた。

お福の白い瓜の様な未だ硬さの残る乳房は上下から搾り上げる縄により縊り出され前に突き出していた。

一方お藤の方は柔らかく豊満な乳房は縄の間から垂れ下がり、藻掻くたびにフルフルと揺れ動き、男の官能を刺激するような扇情的な姿を晒していた。

そして、二人とも下腹の肉に深く食い込んだ腰縄の中央から一文字に引き下ろされた太い縄により、淫唇の間に荒々しい麻縄が深々と食い入っているのが分かった。

噂では、一時期稲葉屋が潰れそうな状態に追い込まれたことが在り、経営判断の過ちを自覚した女将は、その反省から大番頭に経営の実務を委譲し、自分達は手を引いて店には出なくなったとの事であった。それ以来、女将達を目にすることは無かったが、まさかこんな所に居ようとは！

通常この席に招かれるのは店の主人だけであるのに、今回稲葉屋の大番頭が招かれている事に奇妙な印象を持ったものであるが、もしや本日の出し物と関連していたのでは無いかと想像して、大番頭の方を振り返った。

大番頭は素知らぬ表情で舞台に立つ女将と娘の方を見詰めていた。

「本日の演者は皆さん良^よくご存^{ぞん}じの稲葉屋の女将のお藤と一人娘のお福でおます。先般、藩による御用金返済の百年繰り延べにより、皆さんエライ苦勞されはった事やと思いますが、稲葉屋さんも一時は店を畳む寸前まで行ったのでおます。そこでワテ所^{ところ}でお金をお貸ししたところ、お二人ともエライ感謝されはって、ワテは別に気にせんでも良^よいと言^いったんですが、それでは申し訳ない。今は返す金が無いので身体を張ってお礼したいーと熱心に言いますんで、それならと言う事で、今回出演をお願いした次第でおます。皆さんも常日頃良^よくご存^{ぞん}じのお二人ダスさい、今日は気兼ねや遠慮無^なく楽しんでいっておくれやす。」

舞台の下に立ってペラペラと得意そうに挨拶する惣右衛門の言葉を鵜呑みにする者は誰も居なかったが、振り返って考えれば最近では恵比寿屋から卸される物品が売り上げの大きな柱と成っている事は事実であった。

今回の藩による借金踏み倒しの際も、恵比寿屋から卸される品物が無ければ、稲葉屋などのように店が潰れかねなかった。

しかし、これは言葉を代えて言えば、何時の間にか恵比寿屋に殺生与奪の件を握られている事に他ならなかった。

ほんの二十年ほど前に何処かから流れて来て、この城下に住み着き、商いを始めた頃は歯牙にも掛けないような存在であったが、今では恵比寿屋から商品を卸してもらえないと、営業に甚大な影響を与えるまでに成っていた。

恵比寿屋と稲葉屋が長年に渡って対立していた事は知っていたが、自分達は、かつては、どちらにも組せず、中立の立場で在ったが、今はすっかり恵比寿屋に絡め取られてしまった事を改めて思い知らされるのだった。

今回の藩による借金踏み倒しの際も稲葉屋と友誼を通じていた福田屋は誰の支援の得られ

ず潰れてしまった事を思えば、恵比寿屋に敵対することは危険であると思われた。

舞台の上で惨めな姿を晒す稲葉屋の母娘を目にすると、恵比寿屋惣右衛門に齒向かえば、自分の妻や娘はこの様な目に遭うぞ一と、無言の威圧を受けている様に感じ、もうこうなれば、毒食らわば皿まで一と、惣右衛門の機嫌を損ねないよう、彼に協力し哀れな母娘を責め罵る側に回った方が得であると、太々しい覚悟を決めるのであった。

その様に腹を括って、舞台の上に立つ二人の麻縄を纏っただけの全裸の女を改めて見返すと、日頃の良好な付き合いも忘れ去り、男の下劣な本性が沸々と沸き上がり、淫欲に濁った眼で見詰めるのであった。

舞台上のお藤とお福は、男達の野卑な目が自分の女の部分に注がれている事を感じ、少しでも視線から隠そうと股間を締めてモジモジと腰を悶えさせた。

その時、アッと呻き声が漏れた。

羞恥に身を振り、下腹を身悶えさせる度に、秘裂を深々と抉る股縄が、女の源泉を意地悪く刺激するのであった。

腰を振って少しでも股の付け根を隠そうとする二人の扇情的な藻掻きを見詰めて、稲葉屋の大番頭がおやっと思った。「此女奴らは前に見た時は其処に毛が在った筈だが・・・」

目を皿の様にして二人の無残な姿を見詰めていた誰かが、「お藤さんもお福ちゃんも生まれつき其処に毛が無いんですか？」と、質問した。

これに惣右衛門が笑いながら答えた。

「折角舞台に立つんやさかい、お客様には自分の女の部分を隅々まで見て欲しいと、二人から熱心に頼まれましてな、舞台に上がる前に綺麗に剃り上げたんでおます。」

その具合を良く見せたったらどや一と、二人を背後から支える黒子に声を掛けた。

黒子は二人の尻を舞台の床に降ろさせると、背後から両足首を握り締めて思い切り左右に捻げた。

アッという女の悲鳴とオオッという男の声が同時に上がった。

両脚を背後から斜め上に向かって持ち上げられ、股間を扇の様に開かされ、下腹を男達に向かって突き出す姿勢を取らされた女達のふくよかな大腿の間には在るべき春草の茂みは喪失しており、毛羽立ち荒くれた縄が振り合わされて作られた二つの瘤が女の羞恥の部分を塞いでいた。

「此女奴ら、外では貞淑そうに気取っておりましたが、裏では暇が在れば男を引っ張り込むは、自分で張型を突っ込むは、どうしようもない助平母娘だんねん！そやから今日舞台に上

がるのが楽しみで楽しみで最前から身体が疼いて股の間を濡らしてまんねん！良く見ておくれやす！」

惣右衛門の口上に観客の目が二人のその部分に集中した。

女達は舞台に上がる前に強力な催淫剤をたっぷり塗りと塗り込まれており、深々と股間を責め立てる縄と淫孔を繋ぐ瘤により、羞恥に乱れる心を裏切って身体は感じ始めていたのだった。女達が男の視線を避けて身を揉む度に、股縄は感じやすい部分を摩擦し、媚薬の効果を高めていた。

無毛の股間と溢れ出た淫液によりヌラヌラと濡れ光る秘裂を男達は目を血走らせて見詰めていた。

観衆の男達は声を上げることも出来ず、目の前に提供された母娘の生々しい景色に見入っていた。

シーンと静まり返った見世物小屋の中には、お藤とお福が羞恥に吸り泣く声と、生唾を呑み込む音だけが響いた。

背後の黒子により股間を全開とされたまま、三人目の黒子が舞台に登場して股間を責める縄を緩め始めた。

キリキリと締めあげられ秘芯を襲っていた股縄の圧力が減少し始め、女達は少しホッとした表情を浮かべた。しかし、それは新たな恥辱の始まりに過ぎなかった。

秘孔を封じていた瘤が外され、封印を解かれた肉の洞窟が男達の目に露わとなった。

男達の野卑な目が二人のその部分に集中した。

お藤とお福は男達の獣の様な視線をその部分に感じ、其処がまるで火で炙られたように熱く感じて、顔を赤く染め激しく頭を振り続けていた。

解きほぐした縄のその部分を塞いでいた瘤から淫孔の間に粘り糸の橋が架かっていた。

「何や！二人とも随分と股の間を濡らしているやないか！」

催淫剤の影響により秘裂からはドクドクと淫らな樹液が溢れ出ており、淫靡に濡れ光る股間を指さして大声を上げた。

「さいでおます！これが先ほど申しました二人が如何に色気狂いか示す証拠でおます！此女奴ら日頃澄ました貌をしていますけど、本当はイヤらしい事が大好きな助平女ですねん！母親のお藤は亭主を亡くしてからと云うもの、身体が疼いて仕方無^ろくなって、店の若い丁稚を閨に引き込んで、嫌がる丁稚に無理やり関係を迫っておったんですわ！それを見ていた娘の

お福も母親のマネして自分の部屋に男を引き込むようになったんですわ！今では二人とも片時も男無しでは過ごせん助平女に成ったんですわ！二人にこの舞台の話をしたら、是非出させて欲しいとせがまれましたな・・・そやから今日はこの色情狂の二人に功德を施すつもりで、精タイヤらしい事をして二人を喜ばせて上げて下さいな・・・」

惣右衛門の出鱈目話に二人は涙を溢しながら違う違うと首を振った。

黒子が最前列の客に、ついさつきまで女の股間を締めあげていた縄を手渡した。

男は手渡された縄を手に秘裂に食い込んでいた部分の湿り具合を確かめたり、女の樹液を塗された瘤の濡れ具合を目を近付けて観察したり、鼻を近付けて臭いを嗅ぐ仕草をした。

一通りの検分を済ますと、隣の男に女の恥辱を記録した縄を手渡した。こうして次々と男達の間には恥ずかしい縄は廻されて行き、淫らな痕跡が検分されて行った。

お藤もお福もこれまで見知っていた商店主に、自分の恥辱の証拠を検分されて行く様子に、間近から直接股間を見詰められ臭いを嗅がれるような嫌悪感と羞恥を感じ、堪え切れずに咽び泣いていた。

「此女奴らはまだ珍芸の修行中で、志乃や千鶴の様に立派な芸を披露できる所まで行ってまへんので、今回は簡単な恥掻き芸で勘弁しておくんなはれ。」

惣右衛門が背後から両足を掴んで股を開かせている黒子に目で合図した。

黒子達は両足を扇の様に開かせていた手を離し、床に着いていた女達の尻を持ち上げるようにした。そして中腰の姿勢を取らせ、両太腿に手を添えて観客に向かって大きく開かせた。相撲で云う蹲踞の姿勢を取られ、大きく開いた大腿の間からは秘奥がまざまざと覗き見られた。

「お前ら、今日は朝から御不浄箱を使^{つこ}って無いから一杯溜まっているやろ？」と、舞台の下から囁きかけた。

女達は檻に閉じ込められている間は、排泄は不浄箱にするように躑けられている。排泄に使用した不浄箱は綺麗に洗浄され又元に戻されるのであるが、何故か今朝は不浄箱が見当たらなかった。寝ている間に檻から持ち出されたものと思われたが、恥ずかしくて不浄箱の事を口にすることが出来なかったのだ。

昨晚寝る前に排泄してから、今日の昼過ぎまで排泄していなかったので、膀胱はパンパンに張り、尿意は限界に達していたが、下の毛を剃り上げられ、剥き出しになった秘奥に催淫薬を塗り込まれ、瘤付きの股縄を締めさせられて、顔見知りの商店主の前に引き出されるという異常事態に、下腹を込み上げる苦痛を忘れていたのであったが、惣右衛門の言葉で突然思

い出した。

そして、一度下腹の緊張を意識すると耐え難い苦痛となって二人を襲い始めた。

「ほら、苦しいんやろ？此処でしはったら宜しい・・・」

と、二人の下腹の張り具合を確かめる様に撫でまわした。

一人の黒子が二つの朱塗りの箱を持って現れた。

漆塗りの箱には金泥で“おふし”、“おふく”と二人の名が記されていた。

それは、二人を閉じ込めた檻から消失した不浄箱であった。

黒子は母娘の開け広げられた股下に不浄箱を置いた。

「ほら！お前は^まん達の愛用の御不浄箱を持って来ましたで、何時もの様にそれにノビノビとしはったら宜しい！」

お藤とお福は不浄箱を跨いだまま、耐え難い尿意に腰をブルブルと震わせていた。

観客の目に、剃毛され剥き出しとなった柔らかな肉を置いた股間の佇まいがアリアリと映った。

日頃見知った男達の目に秘奥を晒す羞恥に、思わず大腿を閉じようとするが、背後から女の身体を支える黒子により、再び元の様に両足を開かされ、男達の淫欲に燃える視線の前に晒すことになるのだった。

アアーッ！イヤ！突然二人は猿轡の下で悲鳴を上げた。

背後から支える黒子が、何処から小水が噴き出すのかよく見える様に肉襞を左右に押し広げ鮮やかな鮭肉色の花園を観衆の目に露わにした。

アアーッ・・・このまま此処で排尿すればどれだけ楽になるだろう・・・と、苦悶する意識の中で思った。しかし、商店仲間の男達の前で落下微塵な姿を晒すことは耐え難い屈辱であった。不浄箱を跨いだまま、最後の瞬間を堪えて腰を震わす女達に惣右衛門が、早くしろ！と、言う様に睨み付けた。

「ほら！早く出さねえか！もうションベンが出そうで仕方ないんだろう？お客の前でしゃがんでするのはイヤだってのかい？男みたいに堂々と立ってしたいってのかい？」

お藤を背後から支える黒子がそう言うと、不浄箱の上に跨るお藤を無理やり立たせようとした。お藤は必死に首を振り、身体を藻掻かせて否定の意志を示した。

切迫する排泄の欲求とこの男達に逆らったらどんな酷い折檻を受けることになるか分からない—という恐怖が込み上げ、母娘は、ほぼ同時に緊張を緩めた。

その瞬間、おおーっ！と、どよめきが上がった。

女の花園の奥深く淫靡に咲く肉孔と並んで穿たれた泉の吐出口から一条の黄色い液が迸り始めた。

普段は肉の襞により閉じられている部分であるが、背後の黒子により左右に捲り上げられていたため、その射出口と流れ落ちる液体の様子は客の目に隠しようもなく映った。

黒子に抱きかかえられながら羞恥に腰を震わせ身悶え続けたが、一度堰を切った水流は最早止めることは出来ず、人々の嘲り笑いの中で、奔流となって流れ続けた。

滝の様に流れ落ちる水は箱の底を叩き、飛沫となって舞台の床を濡らす光景に観衆は目を見張った。

大きく開かれた股の間の秘めた奥から一条の水流となって不浄箱の中に注ぎ続ける美熟女と華やいだ美人の姿を血走った目で見詰め続けた。

舞台の上に顔を突き出し、飛沫が掛かるのも構わず目をランランと輝かせ、陶醉した表情で女陰のその一点を見詰めていた。

これまで親しく付き合ってきた商店主から、淫猥な視線を投げかけられ、次々と下卑た言葉を浴びせられ、激しい羞恥と絶望感に苛まれ、号泣しながら排泄を続けた。

「今更泣いても遅おます。これだけ恥を晒せば、もう逆らおうという気も起きませんやろ・・・」
黒子が厳しく縛めていた猿轡を解いた。

「どや？もう充分出したか？」

聞かれたお藤は、「はい・・・」と、惣右衛門の視線を避け、力無く答えた。

二人の股間からは、ポタポタと雫が垂れるだけとなっていた。

黒子の一人が二人の股下から不浄箱を抜き去ると、二人の背後に位置する黒子が最前のようにお藤とお福の尻を床の上に降ろし、開ききった股間の中心の肉襞を左右から摘まんで押し開いた。

客席からは自ら噴き出した汚水に濡れ光る赤く充血した女の花園がアリアリと映った。

落下微塵に破壊された城門を更に敵軍の目に晒す様に黒子達はその部分を無慈悲に開け広げた。

顔馴染みの商店主達に自分の女の構造を直視される羞恥と悔しさに悶え泣き続けた。

「どや？折角やからついでに大きい方も出したらどや？」

えっ！と驚いて惣右衛門の顔を見た。

「ここの^{ところ} 処アンタらが大きい方をしてないのは知ってましたで・・・」

惣右衛門の突然の言葉に青ざめるお藤に、畳みかける様に、「ここまで恥を晒せば、小さい方するのも大きい方するのも同じやろ・・・」と、狼狽えるお藤の表情を楽しむように笑い掛けた。

俯いて返事をしないお藤に、「さよか？それなら絵寝間の方がエエか？」と、懷からガラス製浣腸器を取り出してチラチラと見せ付けながら囁きかけた。

「アンタらが嫌や、言^いつても無理やりやらす方法は幾らでも在るでえ・・・」

と、陰惨な笑顔で迫った。

お藤とお福の心に前回、惣右衛門達により絵寝間と呼ばれる透明容器を使って腸の中に直接、下し薬を注ぎ込まれた記憶が蘇った。

あの時の腸を掻き穿^くる苦痛は筆舌に尽くしがたい物であった。

込み上げる浣腸への恐怖心から、「分りました、もう一度皆さんの前で恥を晒します・・・」と、涙に咽びながら口にした。

「こんなに一杯出しやがって！重くてしょうが無いぜ！」

黒子装束の男が、不浄箱の中で波打つ小水を溢さない様に慎重に持ち上げた。

「それに、この臭いはどうでえ？臭くって仕方ないぜ！大店のお嬢様が聞いて呆れらぁ！」

と、言葉で二人を罵りながら、用意した桶の中に中身をザーとぶち撒けた。

実は、この三人の黒子装束の男達は不良武士の杉作達であった。

舞台での白黒の男役を申し出たのであったが、お銀の試験により呆気なく落第した男達であった。

白黒の男役の夢は叶わなかったが、そのまま去り難かったようで、黒子役となって舞台の手伝いをしていたのだった。

空になった不浄箱が、便所で便器を跨ぐ姿勢を強制された女達の足の間に挿し入れられた。

「ほら、もう一度ノビノビと糞を垂れるんや！その前にお客さんに挨拶するんや！」

惣右衛門が凶悪な顔で二人を睨みつけた。

惣右衛門の気迫に怯えたように、お藤は股を大きく広げ不浄箱を跨ぐ惨めな姿勢のまま、舞台の上から観衆の方に顔を向けて、「井筒屋さん・・・伊勢屋さん・・・生駒屋さん・・・」と、顔見知りの主人達を涙に潤んだ目でじっと見詰め、一人一人呼び掛けた。

名前を呼ばれた店主達は、お藤の涙を浮かべた恨みがましい目で睨まれゾクッと身体を震わせた。

「・・そして・・大番頭さん・・私達母子はこれから皆様の前で見苦しい処をお見せします・・
そのお詫びに、この後、私達親子皆様に心ゆく迄ご奉仕させていただきますので、どうかお笑い
の内にお許しください・・」

ここまで口にすると堪りかねたように大粒の涙が零れ落ち、激しく嗚咽し始めた。

「こら！何泣いてまんのや？さっさと出さんかいな！」

惣右衛門の激しい言葉を受けて、全てを諦めた二人は崖から身を投げる思いで下腹に力を込めた。

眉根を寄せ、額に脂汗を浮かべて、下腹に力を込めウンウンと息むが、下劣な期待に燃える
野卑な男達の目に囲まれる羞恥と緊張感で排便することが出来ずにいた。

便塊は腸の中に溜まっている事は感じられたが、緊張で最後の門が硬く閉じられていたのだ
った。

下腹の栓が思うように退かないもどかしさで、ウンウンと唸りながら腰をブルブルと震わせた。

「ほら！お客様がお待ちかねだよ！さっさと出すんだよ！」

堪りかねた黒子の一人が青竹でお藤の尻を叩いた。

竹竿が豊かな臀肉の上で跳ね、ビシーッ！と鋭い音が小屋の中に響いた。

「こらこら、そんなに乱暴にしたら出るモンも出んようになってしまうやろ・・」

と、たしなめた。そして、「アンタらも痛い目に遭いとう無かったら早よ出すことや！」と、
脂汗を浮かべ、ウンウンと苦悶する母娘に声を掛けた。

その時、桃花が突然卑猥な歌詞の端唄を歌い始めた。

それに、引きずられる様に賑やかなお囃子が始められた。

腹の中の物と格闘し、苦悶する二人には最早歌の意味を理解する能力は失われていたが、華
やかな演奏は二人の緊張を解す効果が在ったようだった。

「おお！出てきよったで！」

観衆の一人が大声を上げて指さした。

見るとお藤の股間奥に位置する出口を割って便塊がニュッと突き出していた。

それは見る見る醜怪な姿を現し、長く下方に垂れ下がった。

お福も母親に倣って腹の中から便を出し始めていた。

後ろに立った黒子が観衆からその部分が良く見えるよう姿勢を整えさせ、思わず閉じようと

する股を大きく左右に開かせた。そして、「お客様に向かってニッコリと笑いながら糞をひり出すんだ！」と、髪を掴んで羞恥に顔を染める二人の顔を観衆の方に向けさせた。

その間にも、二人の肛門からはどんどん便が流れ出し、下に向かって一本の長く太い紐を形造り、不浄箱の底に蜷局を巻いていった。

「おお！出て来よる！どんどん出て来よるで！」

顔なじみの商店主達は、二人の羞恥図に奇声を上げ、笑い声を上げ続けた。

可憐な秘孔を押し広げ、腸の粘膜を引きずり出す様に褐色の物体が次々と迫り出していた。

「二人とも上品なおいどの穴から、綺麗な顔からは想像出来んような臭い物を良く出しますなあ・・・」

と、鼻を摘まみながら揶揄った。

見世物小屋の中には異臭が立ち込めたが、美貌の熟女と娘盛りの美女の繰り広げる扇情的な光景に不快な臭いも忘れ、怒号の様なヤジと下卑た笑い声が渦巻いていた。

夫と息子を暗殺し、身を粉にして守って来た稲葉屋を奪った憎い恵比寿屋の側に回ってしまった馴染みの商店主や信頼していた大番頭の淫靡な笑い声に取り巻かれ、あまりの惨めさに嗚咽しながらも、ブリブリと下品な音を立てて溜まりに溜まっていたモノを放出し続けた。

「二人とも随分と溜まっていたもんや無いか！もう、ええんか？」

惣右衛門が二人の不浄箱をのぞき込みながら聞いた。

「ああ・・・もう少し・・・」と、呟くように口にすると、名残りを惜しむように小さな便塊がお藤の肛口から垂れ、不浄箱の中にポトリと落ちたので観衆からドッと笑い声が上がった。

黒子の一人が排出したばかりの湯気が立つような排泄物が良く見える様に、二人の不浄箱を傾けて示した。

観衆は息を殺して、美しい未亡人と娘の肛門を通り抜けて押し出された、黄褐色の蜷局を巻くモノにじっと魅入っていた。

二人は黒子から尻の周りを紙で拭き取られながら、自分達の排出した恥ずかしい物を検分される羞恥に咽び泣いていた。

じっと不浄箱の中身を見つめる観衆に向かって惣右衛門が、「ところで、今日の昼弁当にお出しした鯉の甘露煮は美味しゅう御座いましたか？」と、たずねた。

突然の変な質問に、商店主達はウンウンと首を縦に振った。

「実は、あの鯉は此女奴らのウンコを餌に育ててまんねん。」

そう惣右衛門から教えられた男達は顔色を失い、あちこちでゲーゲーえずく声が聞こえた。そんな商店主の狼狽える様子を面白そうに眺める惣右衛門であった。

落下無残な醜態を馴染みの商店主達の前に晒し、暫く放心状態の母娘であったが、黒子が舞台の上に布団を敷き始めたのを見て、惣右衛門の次の悪意を察し、「もう、お許してください・・・私たちは疲れ果ててもう何もできません・・・」と、涙を浮かべて哀願した。

「おかしい事を言う奴やなあ！シヨンベンしたりウンコしたりするのはアンタら毎朝やっている事や無いか。そやから、アンタらは舞台に上がってからまだ何もやってへんのと同じや！さっさとお客さんの前で母娘の絡みを見せるんや！」と、鬼の様な形相で二人を睨みつけた。

黒子が後ろ手に縛ったままのお藤の身体を掴むと、舞台中央に敷かれた布団の上に仰向けに横たえた。そして、両足首を掴むと思ひ切り左右に押し広げた。

脚を観衆に向かって突き出す姿勢であったため、お藤の剃毛された熟年の秘奥がまざまざと曝け出され、男達の血走った眼がその部分に集中した。

舞台の床には所々に縄を通す仕掛けが作られており、丁度敷かれた布団の両端の位置に穿たれた穴に黒子達は鉄環を差し込み、手早くお藤の両足首を縛り付けてしまったので、男達の熱い視線に股間を炙られ、必死に閉じようとするお藤の努力を封じてしまった。

「女として脂の載り切った美味しそうなオ　　や・・・」

と、その部分をねっとりとした目で見詰めながら涎を垂らしそうに口にした。

男が思わず呟いたように、柔らかな肉置き的大腿の狭間に位置するお藤の女の部分は、ぷっくりと盛り上がった媚肉の間に深く切れ込みを作り、今はその門を慎ましやかに閉ざし、僅かにその谷間の奥から年に似合わぬ可憐な木の芽を突き出していた。その女の門のわずかな下には董色の華麗な花卉が姿を見せ、先ほどまで小水や大便を放出していたのが信じられない程、気品のある雰囲気醸し出していた。女なら絶対に人に見せる事の無いような秘密に覆われたその全体像は剃毛された為隠す物なく観客の目に映っていた。

「さあ、次はお福ちゃんや！」

一仕事終わったと言う様に手を叩きながら、怯えて立ち竦むお福に向かった。

イヤ・・・イヤ・・・自分の方に寄って来る不気味な黒子装束の男達に恐怖に顔を引き攣らせて声を上げた。

出た汁を吸る度に夢幻の世界に誘われて行くのであった。

桃花達の華やいだお囃子も二人の劣情を昂進させ、お囃子の調子に併せる様に身体を悶えさせ合った。

最早二人には母子で交接する背徳感や男から見られる羞恥心も感じなくなり、ただ淫欲に溺れる二匹の牝と化して、舌先で肉洞を抉り、溢れ出る淫液を吸り合った。

劣情に燃えた観衆の上げる卑猥なヤジも今の二人には、心を燃え立たせるお囃子にしか聞こえなかった。

「此女奴ら元々こう言う事が好きな淫蕩な血が流れてたんやなあ・・・」と、舞台の上で女同士の愛に没頭する母娘を見て呟いた。

「武家の姫として厳格に育てられた志乃は、淫らな舞台を演じさせても常に恥じらいみたいなものを感じさせよるが、そういう縛りの無い町人の母娘は肉欲に浸ったらとことん没頭する様な・・・今回は初めてやったさかい、両手を縛っての舞台やったけど、次は両手も自由に、互いに全身を愛撫させ合ったり、相対張型なんか使^{つか}って、もっと濃厚な舞台にさせよ・・・」

演戯を超えた女同士の真の愛も最終段階を向かいつつあった。

娘の舌でその部分を嘗められ、勃起した木の芽を口に含まれて撫でられるとお藤は舌足らずな悲鳴を上げて身体を仰け反らした。

お藤もその感激に煽り立てられ、無意識の内にお銀から仕込まれた口技を繰り出し、激しく娘の陰部を責め立てお福を悶えさせた。

互いに息を荒げて愛し合っていた母娘であったが、突然お福がウツと唸って身体を仰け反らせた。それに併せる様にお藤も淑女としては恥ずかしい下品な声を上げて絶頂に達した。

頂上を極めたお福の股間から突然激しく汐が噴き出し、すぐ下の母親の顔を洗った。

「ハハ！本当に水っぽい娘や！」

と、見物の男達からどっと笑い声が上がり、拍手が巻き起こった。

そんな商店主達の嘲りの声も耳に届かないのか、お藤は陶醉した表情で娘の聖水を浴び続けていた。

ハアハアと荒い息を吐き豊満な胸を上下させるお藤のふくよかな体の上に、同じく忙しく胸を上下させる華奢なお福の身体が重なっていた。

舞台に再び黒子達が登場し、母親の上に被さったお福を引き剥がした。

まるで母親から無理やり引き離された幼子の様に、お福は黒子の腕の中で藻掻き泣き叫んでいた。

お福の身体を抱きかかえている間に、もう一人の黒子が布団の上で開帳縛りにされたお藤の股間を検めた。

下の布団まで染みを作ってぐっしょり濡れた秘裂を確かめて、奥に合図を送った。

舞台の袖から鎖を握った黒子が登場し、その鎖を引き絞った。

その鎖につながれた首輪を嵌められた大男がのそっと舞台に現れた。

其処に登場した大男の姿に観客は息を呑んだ。

それは、まるで凶暴で巨大な野生熊を連想させた。

男は全身に一糸まとわず、剛毛の密生する股間からは、まるで大根をぶら下げたような陰茎がブラブラと揺れ動いていた。

黒子に扮した杉作が捨太郎の耳に何やら耳打ちをした。

知恵遅れで人の言葉を理解出来るかも怪しい捨太郎であったが、まだろくに言葉も喋れないような幼児時代からの遊び仲間だった杉作達の言葉は理解できるようであった。

捨太郎の股間のモノに力が漲り、天を突くように屹立し始めた。

その凶暴さを感じさせる肉塊に観客は言葉を呑んだ。

お藤を獲物と見定めた捨太郎は、のっしのっしとお藤の方に歩を進めた。

お福との女同士の交接で夢見心地に浸っていたお藤であったが、捨太郎が股間のイチモツを立ててこちらに向かって来るのに気付いて恐怖を覚えた。

逃げようと、身体を藻掻かせたが、両足首に結びつけられた縄が動きを封じた。

今や、お藤は布団に横たわったまま怪物の様な男の前で両足を思い切り広げ、剃毛され丸見えの股間から愛液を溢れさせるだけの状態となっていた。

観衆は化け物の前に人身御供として饗された哀れな女の運命を見届けようと息を殺してジッと見詰めていた。

捨太郎は蜜に誘われた虫の様に、布団の上に人の字型に固縛され、身動きも出来ず大きく開け広げられたお藤の股間の前に膝を着き、上体を屈めて、隠しようの無い秘裂に顔を近づけた。

お藤の股間から立ち昇る馥郁たる香りが、男の獣性を刺激するのか、股間のモノが見る見る硬度を増していった。

捨太郎の興奮した荒い息が秘部の柔肌を掃き、お藤は生きた心地もせず恐怖に身体を震わせ続けた。

ヒィー！と悲鳴を上げて身体を仰け反らせた。

捨太郎が長い舌を伸ばしてお藤の股間を舐めたのだった。

ざらつく舌がお藤の女を責め立てた。

捨太郎はお藤の淫液を貪る様に舌を絡めて啜り続けた。

女の精液を胃の腑に流し込む間に、捨太郎の痴人らしいどんよりと曇った目は、獲物の血肉を求める猛獣の目になっていた。

ヒィー！イヤー！助けて！

突然、捨太郎がお藤の上に身体を預けて来た。

捨太郎の巨大な肉塊がお藤の膣孔を引き裂くような激痛を与えた。

お藤は捨太郎から無理やり突き立てられ、その極太の男根はメリメリと音を立てて侵入して来るように感じた。

美熟女と野獣の交合の様子がはっきり見える様に再び舞台がゆっくりと回り始めた。

客席の男達は目を皿の様にして、固唾を飲み込みながら目の前で蹂躪される、かつては同じ商人仲間であった妻の無残な姿を声も上げる事無く見続けた。

捨太郎の醜怪なモノが扇の様に開け広げられたお藤の股間の中心に忙しなく出入りしていた。

「あー！母様！」

化け物の様な男に犯される母の姿に悲鳴を上げた。

「大丈夫だよ！お前の母親はお前と兄の二人の子を産んでいるんだから、あれ位のモノは通るさ！」背後からお福を抱きかかえながら半次郎が笑った。

「それより、心配なのはお前の方だな・・・」

お福の膝前にしゃがみ込んで、まだ愛液に濡れたままの淫裂を撫でまわす太兵衛が呟くように言った。

「精力絶倫で馬鹿でかいモノを持った捨太郎の相手をしたら、いくら女盛りのお藤でも一刻と保つめえ・・・志乃の初夜の時のように何度も気をやらされたあげく、最後は無様に泡吹いて気を失ってしまうぜ、その後はお前が相手をしなければならないからな・・・」

太兵衛の冷酷な言葉に現実に戻されてブルツと身体を震わせた。

「その為には今からでも少しでも身体を開かせておかないといけないからな・・・」と、懐か

ら巨大な張型を取り出して怯えるお福に見せ付けた。

「これ位の太い物で其処の風通しを良くしておかないと、いきなり捨太郎のデカ物を突き立てられたら裂けてしまうぜ！」

「ああ・・・いや！いや！」

「嫌な事が有るめえ・・・嬉しそうに涎をダラダラ垂れ流して、ビラビラを一杯に開いて呑み込んで行くじゃないか？」

醜怪な張型をお福の胎内に挿入しながら嬉しそうに声を上げた。

「へへ・・・流石にお銀に鍛えられただけの事はあるぜ！こんな太い張型をとうとう根元まで呑み込みやがったぜ！・・・これから動かしてやるからな・・・捨太郎のモノを受けられるよう精々肉を溶かしておくんだな・・・」

太兵衛が笑いながらゆるゆるとそれを操作し始めた。

ああ・・・イヤ・・・イヤ・・・と、呻きつつも、先ほど実の母親との間に極めた甘美な興奮の残り火が再び熾され、ジーンと痺れるような不可思議な陶酔の世界に誘われて行くのだった。背後から支える半次郎の腕の中ですねる様に身体を身悶えさせるお福を、女遊びに長けた太兵衛は巧みな手腕で追いつけていった。

「へへ・・・嫌よ嫌よも好きの内ってか？身体は正直だぜ。こんな野太いのを呑み込みながらダラダラお汁を溢すじゃないか！」

お福の反応を確かめつつ小刻みに操作しながら、秘孔から流れ出る愛液の多さに目を見張りながら擲擲った。

「お前が水気の多い女だってことは判ったぜ！あんまり気持ちが良いからって、さっきみたく小便を撒き散らして俺の顔に引っ掛けるんじゃないぜ！」

観客たちは中央の回り舞台の上で怪物の様な男に突き立てられ泣き叫び続けるお藤の哀れな姿と、舞台の端で黒子二人から張形責めに遭い嬌声を上げながら身悶えるお福の妖艶な姿に魅了され続けるのであった。

かつては、筆頭の御用商人としての権勢を誇り、贅沢の限りを尽くした豪商の妻と娘の落魄れた姿が其処に在った。

<第四部に続く>